

有 価 証 券 報 告 書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成24年1月1日
(第58期) 至 平成24年12月31日

株式会社 アサツー ディ・ケイ

(E04808)

第58期（自平成24年 1 月 1 日 至平成24年12月31日）

有 価 証 券 報 告 書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第 1 項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の 2 に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

株式会社 アサツー ディ・ケイ

目 次

頁

第58期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	6
5 【従業員の状況】	7
第2 【事業の状況】	8
1 【業績等の概要】	8
2 【営業の状況】	13
3 【対処すべき課題】	17
4 【事業等のリスク】	20
5 【経営上の重要な契約等】	26
6 【研究開発活動】	26
7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	27
第3 【設備の状況】	30
1 【設備投資等の概要】	30
2 【主要な設備の状況】	30
3 【設備の新設、除却等の計画】	31
第4 【提出会社の状況】	32
1 【株式等の状況】	32
2 【自己株式の取得等の状況】	41
3 【配当政策】	42
4 【株価の推移】	43
5 【役員の状況】	44
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	47
第5 【経理の状況】	57
1 【連結財務諸表等】	58
2 【財務諸表等】	108
第6 【提出会社の株式事務の概要】	136
第7 【提出会社の参考情報】	137
1 【提出会社の親会社等の情報】	137
2 【その他の参考情報】	137
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	138

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成25年3月29日
【事業年度】	第58期(自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
【会社名】	株式会社アサツー ディ・ケイ
【英訳名】	ASATSU-DK INC.
【代表者の役職氏名】	取締役社長 植 野 伸 一
【本店の所在の場所】	東京都中央区築地一丁目13番1号
【電話番号】	03 (3547) 2654
【事務連絡者氏名】	経理局長 阿 部 清 彦
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区築地一丁目13番1号
【電話番号】	03 (3547) 2654
【事務連絡者氏名】	経理局長 阿 部 清 彦
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第 1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第54期	第55期	第56期	第57期	第58期
決算年月	平成20年12月	平成21年12月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月
売上高 (百万円)	399,452	350,211	346,565	347,111	350,822
経常利益 (百万円)	5,335	1,094	1,885	5,627	5,314
当期純利益 又は当期純損失(△) (百万円)	2,125	73	△4,656	2,293	2,781
包括利益 (百万円)	—	—	—	△1,794	13,559
純資産額 (百万円)	101,617	107,465	103,168	96,800	109,559
総資産額 (百万円)	191,782	190,024	194,510	184,188	195,163
1株当たり純資産額 (円)	2,334.48	2,499.05	2,423.06	2,270.23	2,567.03
1株当たり当期純利益金額 又は当期純損失金額(△) (円)	48.14	1.73	△110.28	54.37	65.83
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額 (円)	48.12	1.72	—	—	65.81
自己資本比率 (%)	52.4	56.0	52.5	52.0	55.6
自己資本利益率 (%)	1.8	0.1	△4.5	2.3	2.7
株価収益率 (倍)	41.5	1,058.4	—	37.2	31.2
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△3,181	6,404	△221	8,957	2,581
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	7,085	1,570	2,298	3,779	△1,719
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△7,853	△2,141	△1,266	△4,944	△1,184
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	12,807	18,844	19,127	26,519	27,264
従業員数 (名)	3,264	3,239	3,229	3,416	3,376

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、第56期は潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失であるため、第57期は潜在株式が存在しないため、これを記載しておりません。

3 従業員数は、就業人員数を表示しております。

4 第56期の株価収益率は、当期純損失であるため、これを記載しておりません。

5 当社は、従業員持株E S O P信託制度を導入しており、当該信託にかかる従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式については、連結財務諸表において自己株式として計上しております。そのため、1株当たり純資産額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「期末の普通株式の数」を算定しております。また、1株当たり当期純利益金額又は当期純損失金額および潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「普通株式の期中平均株式数」を算定しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第54期	第55期	第56期	第57期	第58期
決算年月	平成20年12月	平成21年12月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月
売上高 (百万円)	358,595	310,970	305,759	301,878	303,422
経常利益 (百万円)	3,984	449	5	3,387	3,296
当期純利益 又は当期純損失(△) (百万円)	1,721	△498	△2,112	2,302	1,543
資本金 (百万円)	37,581	37,581	37,581	37,581	37,581
発行済株式総数 (株)	45,155,400	45,155,400	45,155,400	45,155,400	42,655,400
純資産額 (百万円)	86,002	91,147	90,241	84,423	94,699
総資産額 (百万円)	162,549	159,832	166,870	157,869	166,330
1株当たり純資産額 (円)	1,995.97	2,140.35	2,140.18	1,999.90	2,239.96
1株当たり配当額 (円)	20.00	20.00	20.00	109.00	111.00
(内、1株当たり 中間配当額) (円)	(10.00)	(10.00)	(10.00)	(10.00)	(10.00)
1株当たり当期純利益金額 又は当期純損失金額(△) (円)	39.01	△11.66	△50.03	54.59	36.53
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額 (円)	—	—	—	—	36.52
自己資本比率 (%)	52.9	57.0	54.1	53.5	56.9
自己資本利益率 (%)	1.7	△0.6	△2.3	2.6	1.7
株価収益率 (倍)	51.2	—	—	37.1	56.2
配当性向 (%)	51.3	—	—	199.7	303.8
従業員数 (名)	2,034	2,060	1,936	1,925	1,916

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、第54期および第57期は潜在株式が存在しないため、第55期および第56期は1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため、これを記載していません。

3 従業員数は、就業人員数を表示しております。

4 第55期および第56期の株価収益率は、当期純損失であるため、これを記載していません。

5 第55期および第56期の配当性向は、当期純損失であるため、これを記載していません。

6 当社は、従業員持株E S O P信託制度を導入しており、当該信託にかかる従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式については、財務諸表において自己株式として計上しております。そのため、1株当たり純資産額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「期末の普通株式の数」を算定しております。また、1株当たり当期純利益金額又は当期純損失金額および潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「普通株式の期中平均株式数」を算定しております。

7 第57期の1株当たり配当額109円には、平成23年10月31日を臨時基準日とする特別配当89円が含まれております。

8 第58期の1株当たり配当額111円には、特別配当88円が含まれております。

2 【沿革】

- 昭和31年 3月 ・創業者稲垣正夫が中心となり、東京都豊島区目白を本店として株式会社旭通信社を設立。東京都中央区茅場町にて、雑誌広告取扱い中心の広告会社として営業開始。
- 昭和42年 5月 ・本社を東京都港区新橋に移転。
- 昭和51年10月 ・株式会社日本文芸社(現・連結子会社)の株式を取得、子会社とする。
- 昭和55年 5月 ・米国にASATSU AMERICA INC.(現・連結子会社、ADK America Inc.)を設立。
- 12月 ・株式会社アサツーインターナショナル(現・連結子会社、株式会社ADKインターナショナル)を設立。
- 昭和59年 1月 ・米国BBDO INTERNATIONAL, INC.(現・BBDO WORLDWIDE INC.)と業務・資本提携。
- 昭和60年12月 ・香港にAsatsu HONG KONG Ltd.(現・連結子会社、ASATSU-DK HONG KONG Ltd.)を設立。
- 昭和62年10月 ・東京証券取引所市場第二部へ株式を上場。
- 平成 2年 6月 ・東京証券取引所の市場第一部銘柄に指定。
- 7月 ・中華民国にUNITED-ASATSU INTERNATIONAL Ltd.(現・連結子会社)を設立。
- 平成 3年 4月 ・ドイツにAsatsu (Deutschland) GmbH(現・連結子会社)を設立。
- 5月 ・単位株式数を1,000株から100株に変更。
- ・中国の新華通信社と業務提携。
- 平成 4年 9月 ・東京証券取引所より「上場会社表彰制度」第1回表彰企業として表彰される。
- ・株式会社アサツーインターナショナル(現・株式会社ADKインターナショナル)がシンガポールにNEXUS/ASATSU Advertising Pte.Ltd.(現・連結子会社、ASATSU-DK SINGAPORE Pte.Ltd.)を設立。
- 平成 5年 9月 ・東京証券取引所より2年連続の表彰を受ける。
- 11月 ・オランダにAsatsu Europe BV(現・連結子会社、Asatsu Europe Holding BV)を設立。
- 平成 6年 2月 ・中国の人民日報社傘下の事業会社との共同出資による合弁会社(北京華聞旭通国際広告有限公司)を北京に設立。
- 平成 7年 7月 ・本社を東京都中央区銀座に移転。
- 平成 8年12月 ・株式会社博報堂等、広告会社7社共同でインターネットメディアレップのデジタル・アドバタイジング・コンソーシアム株式会社を設立。
- 平成10年 6月 ・米国BBDO WORLDWIDE INC.との提携を解消。
- 8月 ・英国WPP Group plc(現・WPP plc)と業務・資本提携契約を締結。
- 10月 ・第一企画株式会社との合併契約書に調印(合併期日 平成11年1月1日)。
- ・Asatsu Europe Holding BVがオランダにAsatsu Europe BV(現・連結子会社)を設立。
- 平成11年 1月 ・第一企画株式会社と合併し、商号を株式会社アサツー ディ・ケイに変更。合併に伴い、子会社が10社増加(うち統合、社名変更を経て当事業年度末日時点で連結子会社となっているのはDK ADVERTISING (HK) LTD.、DIK-OCEAN Advertising Co.,Ltd.、ASATSU Century (Shanghai) Advertising Co.,Ltd.の3社)。
- 平成12年 1月 ・DAI-ICHI KIKAKU (THAILAND) Co.,Ltd.(現・連結子会社)を連結の範囲に加える。
- 4月 ・株式会社協和企画(現・連結子会社)の株式を追加取得、子会社とする。
- 平成14年 7月 ・株式会社エイケン(現・連結子会社)の株式を取得、子会社とする。
- 11月 ・本社を東京都中央区築地に移転。
- 平成15年 4月 ・制作およびセールスプロモーションを手掛ける子会社5社を統合し、社名を株式会社ADKアーツ(現・連結子会社)とする。
- 平成16年 7月 ・広告業務を手掛ける子会社3社を統合し、社名を株式会社トライコミュニケーションとする。
- 平成18年 5月 ・株式会社ADKボーイズ(現・連結子会社、株式会社ボーイズ)を設立。
- 平成20年 1月 ・株式会社トライコミュニケーションから分割したDRM事業部門と株式会社モチベーションマーケティングを統合し、社名を株式会社ADKダイアログ(現・連結子会社)とする。
- ・株式会社ADKインターナショナルに株式会社トライコミュニケーションを併合。
- 8月 ・デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム株式会社と共同で株式会社ADKインタラクティブを設立。
- 平成23年 8月 ・株式会社電通デジタル・ホールディングスと共同でメディアレップの株式会社ADKデジタル・コミュニケーションズ(現・連結子会社)を設立。
- ・デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム株式会社との合弁事業を解消。

3 【事業の内容】

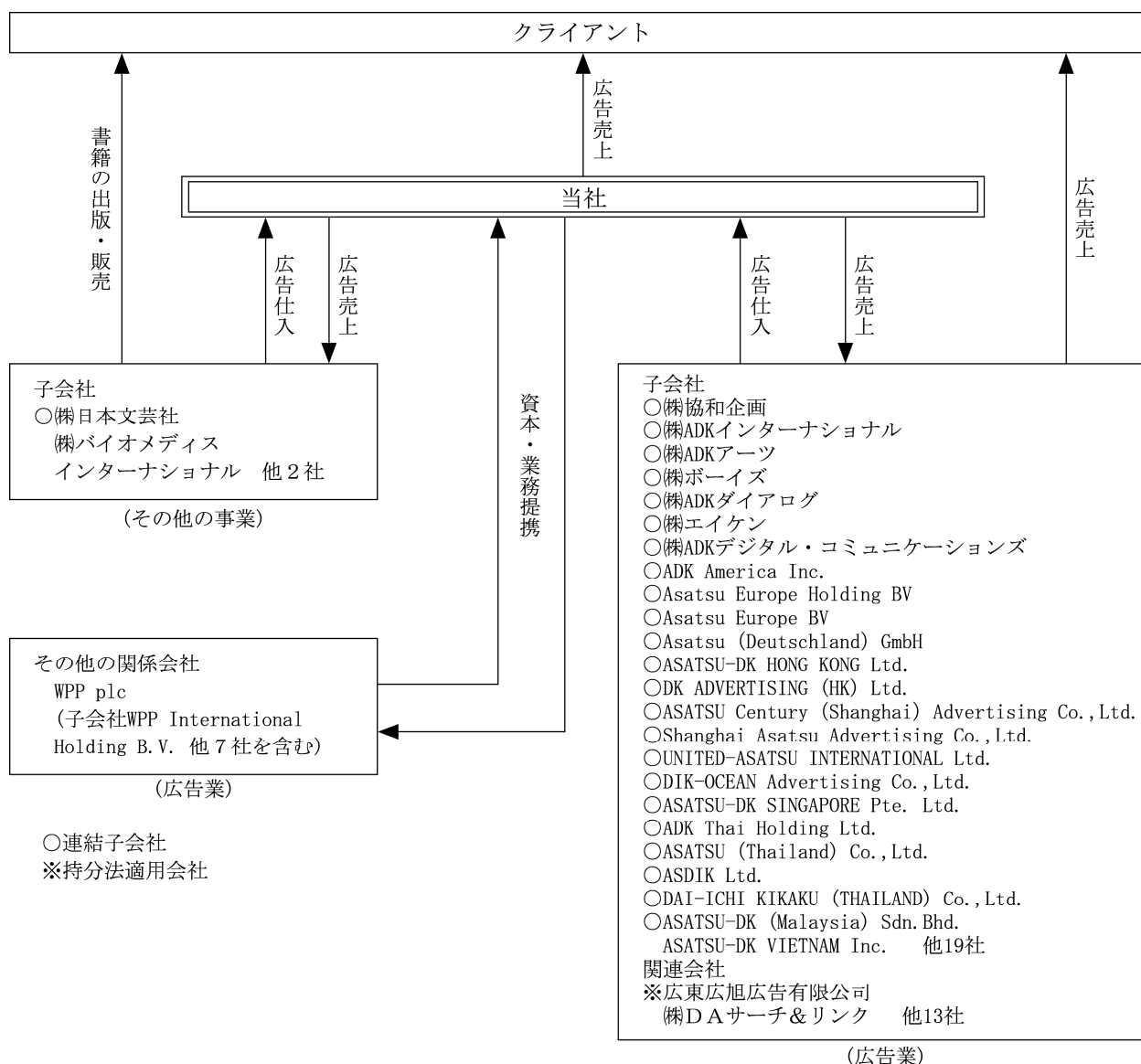
当社グループは、当社、子会社47社、関連会社15社およびその他の関係会社1社（その子会社を含む。以下同じ。）で構成され、おもな事業は、(1) 雑誌、新聞、テレビ、ラジオ、デジタルメディア、OOH（アウト・オブ・ホーム）メディアを媒体とする広告業務の企画と取扱い、広告表現およびコンテンツの企画と制作、セールスプロモーション、マーケティング、パブリックリレーションズ等のサービス活動など、広告に関する一切の業務と(2) その他の事業として雑誌・書籍の出版・販売業であります。

当社グループの事業に係わる位置づけは次のとおりであります。

広告業 当社の他、子会社43社、関連会社15社、その他の関係会社1社が行っております。

その他の事業 子会社の㈱日本文芸社の他、子会社3社が行っております。

事業の系統図は、次のとおりであります。



連結子会社でありました㈱ネオ書房は、清算手続き中で重要性が乏しいため、当連結会計年度より連結の範囲から除外しております。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
(連結子会社) (株)協和企画	東京都港区	百万円 40	広告業	100.0	—	広告取引 役員の兼任 1名
(株)ADKインターナショナル	東京都中央区	300	広告業	100.0	—	広告取引、ビルの賃貸 資金援助(貸付金)
(株)ADKアーツ	東京都中央区	90	広告業	100.0	—	広告制作業務の委託 ビルの賃貸
(株)ボーイズ	東京都中央区	30	広告業	100.0 (33.3)	—	広告取引
(株)ADKダイアログ	東京都中央区	80	広告業	100.0	—	広告取引 資金援助(貸付金)
(株)エイケン	東京都荒川区	10	広告業	70.0	—	広告取引
(株)ADKデジタル・ コミュニケーションズ	東京都中央区	100	広告業	51.0	—	広告取引、ビルの賃貸
ADK America Inc.	Los Angeles U. S. A.	百万米ドル 2	広告業	100.0	—	広告取引
Asatsu Europe Holding BV	Amsterdam Netherlands	百万ユーロ 10	広告業	100.0	—	広告取引 役員の兼任 1名
Asatsu Europe BV	Amsterdam Netherlands	百万ユーロ 2	広告業	100.0 (100.0)	—	広告取引 役員の兼任 1名
Asatsu (Deutschland) GmbH	Frankfurt Germany	千ユーロ 300	広告業	100.0 (100.0)	—	広告取引
ASATSU-DK HONG KONG Ltd.	Causeway Bay Hong Kong	百万香港ドル 11	広告業	100.0	—	広告取引 役員の兼任 1名
DK ADVERTISING (HK) Ltd.	Causeway Bay Hong Kong	千香港ドル 700	広告業	100.0	—	広告取引
ASATSU Century (Shanghai) Advertising Co., Ltd.	中国 上海市	百万米ドル 3	広告業	100.0	—	広告取引、ビルの賃貸 役員の兼任 1名
Shanghai Asatsu Advertising Co., Ltd.	中国 上海市	百万米ドル 3	広告業	100.0	—	広告取引 役員の兼任 2名
UNITED-ASATSU INTERNATIONAL Ltd.	中華民国 台北市	百万新台幣元 60	広告業	85.0	—	広告取引 役員の兼任 1名
DIK-OCEAN Advertising Co., Ltd.	中華民国 台北市	百万新台幣元 130	広告業	100.0	—	広告取引
ASATSU-DK SINGAPORE Pte. Ltd.	Singapore	百万シンガポールドル 2	広告業	100.0	—	広告取引 役員の兼任 1名
ADK Thai Holding Ltd.	Bangkok Thailand	百万タイバーツ 4	広告業	100.0	—	広告取引 役員の兼任 1名
ASATSU (Thailand) Co., Ltd.	Bangkok Thailand	百万タイバーツ 20	広告業	97.5 (48.5)	—	広告取引 役員の兼任 1名
ASDIK Ltd.	Bangkok Thailand	百万タイバーツ 10	広告業	85.0 (36.0)	—	広告取引
DAI-ICHI KIKAKU (THAILAND) Co., Ltd.	Bangkok Thailand	百万タイバーツ 20	広告業	85.0 (36.0)	—	広告取引
ASATSU-DK (Malaysia) Sdn. Bhd.	Selangor Malaysia	千マレーシアリンギット 1,500	広告業	100.0	—	広告取引
(株)日本文芸社	東京都千代田区	百万円 467	その他の事業	90.3	—	広告取引

名称	住所	資本金又は 出資金	主要な事業 の内容	議決権の割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有割合 (%)	
(持分法適用関連会社) 広東広旭広告有限公司	中国 広州市	千米ドル 500	広告業	40.0 (40.0)	—	広告取引
(その他の関係会社) WPP plc	Dublin Ireland	百万Stgポンド 126	広告業	2.4	24.3 (24.3)	資本・業務提携 役員の兼任 1名

- (注) 1 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
- 2 「議決権の割合」における「所有割合」および「被所有割合」欄の()内は、間接所有割合で内数であります。
- 3 上記関係会社は、いずれも特定子会社には該当しません。
- 4 有価証券届出書または有価証券報告書を提出している会社はありません。
- 5 上記連結子会社のうち、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く。)の連結売上高に占める割合が100分の10を超えるものはないため、主要な損益情報等の記載を省略しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成24年12月31日現在

セグメントの名称	従業員数(名)
広告業	3,307
その他の事業	69
合計	3,376

(注) 従業員数は、就業人員数であります。

(2) 提出会社の状況

平成24年12月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
1,916	41.9	13.8	7,954

セグメントの名称	従業員数(名)
広告業	1,916

- (注) 1 従業員数は、就業人員数であります。
- 2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

労使関係について、特に記載すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【業績等の概要】

(1) 業績の概況

当期における我が国経済は、期を通してみれば厳しい状況にあったと思われます。年央までは復興需要や各種政策効果などにより、景気は緩やかながらも回復基調を辿りました。しかしその後は、新興国を中心とした海外経済の減速による輸出の減少、国内政策効果の一巡、個人消費の足踏みなどにより景気は弱めの動きとなっています。もっとも、年末にかけて、新政権による財政・金融政策への期待から円安・株高の動きが強まっており、一部に明るさも見えてきました。

広告業界においても、経済産業省「特定サービス産業動態統計調査」によると、東日本大震災の影響を大きく受けた3月から5月の3ヵ月間は、売上高合計が前年同月比10%以上の伸長となりましたが、その後は伸長率も鈍化し、9月および10月は2ヵ月連続で前年を割り込んでおり、今後も不安定な状況が続くと思われます。

このような環境の下、当社グループでは広告主のコミュニケーション投資効果（ROI）の最大化を重視したコミュニケーション・プログラムを提供するとともに、新興国・中国市場やコンテンツ事業においても積極的なビジネスを展開し、売上面ではほぼ前年並みの実績でありました。利益面では引き続き売上原価の厳格な管理、販売費及び一般管理費の節減に取り組んでまいりましたが、前年を下回る結果となりました。

当連結会計年度の経営成績は以下のとおりであります。

売上高は3,508億2千2百万円（前年同期比1.1%増）、売上総利益は461億6千9百万円（前年同期比0.7%増）、営業利益は31億7千5百万円（前年同期比17.6%減）でありました。経常利益は、受取配当金13億8千3百万円や受取利息2億4千8百万円などを計上した結果、53億1千4百万円（前年同期比5.6%減）でありました。

特別損益は、投資有価証券売却益1億5千万円などにより、特別利益2億3千4百万円を計上し、特別退職金や投資有価証券売却損などにより、特別損失14億7千9百万円を計上しました。以上の結果、税金等調整前当期純利益は40億6千9百万円（前年同期比19.1%減）、当期純利益は27億8千1百万円（前年同期比21.3%増）でありました。

当連結会計年度の報告セグメント別の業績の詳細は、以下のとおりであります。

(広告業)

広告業における外部顧客への売上高は3,441億3千5百万円（前年同期比1.2%増）、セグメント利益は35億8千7百万円（前年同期比7.0%減）でありました。

売上高については、当社単体、国内子会社、海外子会社とも増収でありました。利益については、海外子会社は増益でしたが、当社単体、国内子会社は減益でありました。

なお、グループの中核である当社単体の業績、区分別・業種別売上は以下のとおりであります。

売上高は3,034億2千2百万円（前年同期比0.5%増）、売上総利益は328億1千2百万円（前年同期比1.0%減）でありました。引き続き販売費及び一般管理費の圧縮に努めましたが、固定費の割合が大きいことから減益が響き、営業利益は13億4千1百万円（前年同期比22.6%減）でありました。

区分別売上では雑誌広告、新聞広告、デジタルメディア広告、OOHメディア広告、マーケティング・プロモーションが前年同期に比べ増収となり、他の区分は減収となりました。

業種別売上では流通・小売業、教育・医療サービス・宗教、飲料・嗜好品などの業種の広告主からの出稿が増加しましたが、金融・保険、情報・通信、化粧品・トイレタリーなどの業種の広告主からの出稿が減少しました。

当社単体の区分別の売上高、その構成比と前年同期増減率は以下のとおりであります。

区分別売上（注）		当期売上高 （百万円）	構成比 （%）	前年同期比 （%）
メディア	雑誌広告	13,984	4.6	2.8
	新聞広告	21,006	6.9	3.1
	テレビ広告	142,007	46.8	△2.2
	ラジオ広告	3,075	1.0	△4.3
	デジタルメディア広告	9,024	3.0	9.0
	OOHメディア広告	8,937	3.0	4.8
小 計		198,035	65.3	△0.6
メディア以外	マーケティング・プロモーション	58,726	19.3	9.2
	制作その他	46,660	15.4	△4.7
小 計		105,386	34.7	2.6
合 計		303,422	100.0	0.5

- （注） 1 広告市場の成熟化やメディア環境の多角化に伴い、当社は広告主にクロス・コミュニケーション・プログラムを提供しており、媒体別の売上を厳密に分別することが困難な場合があります。従って、上記の区分別売上は厳密に媒体別の売上を反映していないことがあります。
- 2 テレビには、タイム、スポット、コンテンツが含まれます。
- 3 デジタルメディアには、インターネット、モバイル関連メディアが含まれます。
（WEBサイト制作・システム開発などデジタルソリューションは「マーケティング・プロモーション」に含まれます）
- 4 OOH（アウト・オブ・ホーム）メディアには、交通広告、屋外広告、折込広告などが含まれます。
- 5 マーケティング・プロモーションには、マーケティング、コミュニケーション・プランニング、プロモーション、イベント、PR、博覧会事業、デジタルソリューションなどが含まれます。

雑誌広告区分については、全般的な広告主の予算削減の中、家電・AV機器、情報・通信、食品関連企業の広告出稿が減少したものの、ファッション・アクセサリや飲料・嗜好品業種の広告主の売上高は増収となりました。以上の結果、売上高は139億8千4百万円（前年同期比2.8%増）でありました。

新聞広告区分については、趣味・スポーツ用品、官公庁・団体や情報・通信、食品業種の広告主からの出稿が減少しましたが、流通・小売業、不動産・住宅設備業種などの広告主からの出稿増の影響を受け、売上高は210億6百万円（前年同期比3.1%増）でありました。

テレビ広告区分のうち、番組提供広告（タイム）については、趣味・スポーツ用品、流通・小売業、官公庁・団体業種の広告主からの出稿が増加したものの、金融・保険、食品などの業種の広告主からの出稿が減少しました。スポット広告については、家電・AV機器、官公庁・団体などの業種の広告主からの出稿が増加したものの、情報・通信、食品、金融・保険などの業種の広告主からの出稿が減少しました。アニメコンテンツ分野については、前年に引き続きアニメ配信サイトやモバイルでの動画配信の推進、また新しいアニメコンテンツの開発、人気コンテンツの活用などに取り組んだ結果、売上は増収となりました。以上の結果、テレビ広告区分全体の売上高は1,420億7百万円（前年同期比2.2%減）でありました。

ラジオ広告区分については、ラジオ広告市場全体が縮小する中、交通・レジャー、化粧品・トイレタリーなどの業種の広告主の出稿が増加しましたが、自動車・関連品、情報・通信、金融・保険業種などの広告主からの出稿が減少した結果、売上高は30億7千5百万円（前年同期比4.3%減）でありました。

デジタルメディア広告区分については、情報・通信、流通・小売業などの出稿は減少したものの、金融・保険、化粧品・トイレタリー、飲料・嗜好品などの業種の広告主からの出稿が増加した結果、売上高は90億2千4百万円（前年同期比9.0%増）でありました。

OOHメディア広告区分については、クロスメディア型の企画提案などに取り組みました。外食・各種サービス、薬品・医療用品などの業種の広告主からの出稿は減少しましたが、教育・医療サービス・宗教、流通・小売業、飲料・嗜好品などの業種の広告主からの出稿が増加しました。以上の結果、売上高は89億3千7百万円（前年同期比4.8%増）でありました。

マーケティング・プロモーション区分については、イベント、販促ツールなどの個別プロモーション事業に加え、クライアントの“売上増に直接貢献する企画提案”ニーズに対応し、店頭マーチャンダイジングやデジタルソリューションを活用した複合型コミュニケーションの開発に努めてまいりました。その結果、金融・保険、化粧品・トイレタリー、趣味・スポーツ用品などの業種の広告主からの受注が減少したものの、飲料・嗜好品、自動車・関連品、不動産・住宅設備などの業種の広告主からの受注が増加し、売上高は587億2千6百万円（前年同期比9.2%増）でありました。

制作その他区分のうち、その売上の大半を占める制作分野については、デジタル分野を含め多様化するクライアントニーズに対応し、各スタッフ部門が連携し最適な施策提案を行える環境を推進しました。しかしながら、薬品・医療用品、情報・通信、化粧品・トイレタリーなどの業種の広告主において受注が減少し、同区分全体の売上高は、466億6千万円（前年同期比4.7%減）でありました。

(その他の事業)

その他の事業である雑誌・書籍の出版・販売部門におきましては、出版市場全体の縮小に伴い収益確保が困難である環境下、減収減益となり、外部顧客への売上高66億8千6百万円（前年同期比4.9%減）、セグメント損失は4億2千5百万円（前年同期は8百万円の損失）でありました。

(2) 海外売上

当社グループの海外売上高は、すべて広告業セグメントのものであり、当連結会計年度の売上高の7.8%（前年同期は7.4%）でありました。

(3) 目標とする経営指標とその達成状況

当社グループが目標とする主な経営指標とその最近の実績は以下のとおりであります。

決算年月	平成21年12月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月	中期目標 平成26年12月
連結 営業利益	△756百万円	22百万円	3,852百万円	3,175百万円	7,500百万円
連結 オペレーティング・ マージン（注①）	△1.8%	0.1%	8.4%	6.9%	13.0%
連結 人件費分配率 （注②）	67.0%	67.3%	61.8%	62.5%	60.0% 以下

注①：（オペレーティング・マージン）＝（営業利益）÷（売上総利益）

注②：（人件費分配率）＝（人件費）÷（売上総利益）

当連結会計年度については、連結オペレーティング・マージンが6.9%、人件費分配率が62.5%であり、当社単体においても、当期オペレーティング・マージンが4.1%、人件費分配率が62.6%と、いずれも平成24年8月に公表した業績指標に達しませんでした。中国等海外業績は順調に推移し、業績指標の改善が図られた一方で、当社単体等国内各社においては、年度後半の市況悪化の影響を考慮し、販売費及び一般管理費の効率化、コントロールに努めたものの、総利益の伸長不足を補うにはいたりませんでした。引き続き経済環境は予断を許さない状況にあるため、経営計画で掲げた施策を着実に迅速に遂行して経営効率の回復、向上に努力してまいります。

連結EPSおよび連結ROEの実績と目標

決算年月	平成21年12月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月	中期目標 平成26年12月
連結EPS（円）	1.73	△110.28	54.37	65.83	—
連結ROE（%）	0.1	△4.5	2.3	2.7	5.0

(4) 財政状態およびキャッシュ・フローの状況

① 資産、負債および純資産の状況

前連結会計年度末（平成23年12月31日）と比較した当連結会計年度末の財政状況は以下のとおりです。

資産合計は、売上債権が減少したものの、時価の上昇などのため投資有価証券が増加したことなどにより前連結会計年度末に比べ109億7千4百万円多い、1,951億6千3百万円でありました。負債合計は、前述の投資有価証券の時価上昇に起因する繰延税金負債が増加したものの、仕入債務の減少などにより、前連結会計年度末より17億8千4百万円少ない、856億3百万円でありました。純資産合計は、その他有価証券評価差額金の増加などにより、前連結会計年度末より127億5千9百万円多い、1,095億円5千9百万円でありました。少数株主持分と新株予約権を除く自己資本比率は55.6%（前年同期比3.6ポイント上昇）でありました。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度のキャッシュ・フローについては、営業活動による収入超が投資活動と財務活動による支出超を3億2千2百万円下回り、為替の換算差額を調整した結果、当連結会計年度末の現金及び現金同等物の期末残高は、前期末より7億4千4百万円増加して、272億6千4百万円でありました。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前当期純利益が40億6千9百万円となり、売上債権が47億5千7百万円、仕入債務が53億3百万円減少したことなどにより、25億8千1百万円の収入超（前年同期は89億5千7百万円の収入超）でありました。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動によるキャッシュ・フローは、無形固定資産の取得による支出が6億6千6百万円であったことなどにより、17億1千9百万円の支出超（前年同期は37億7千9百万円の収入超）でありました。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払額が8億4千4百万円であったことなどにより、11億8千4百万円の支出超（前年同期は49億4千4百万円の支出超）でありました。

2 【営業の状況】

(1) 営業実績

当連結会計年度における売上高をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	売上高(百万円)	前年同期比(%)
広告業	344,135	1.2
その他の事業	6,686	△4.9
合計	350,822	1.1

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 広告料金の状況

① 4媒体広告取引

4媒体の広告料金は、各媒体社の発行する広告料金表（消費税等は含まれておりません。）に定められております。通常の媒体広告取引は、この料金表の定価を基に行なわれますが、引き合い状況等により、実勢価格は若干異なることがあります。

イ 新聞

新聞の広告料金は、原則として基本料金と契約料金の二本建になっており、基本料金の典型的なものとしては死亡・火災・募集・決算などの「臨時ものの広告」と呼ばれる単発的な広告の料金であり何らの契約条件も含まない料金です。契約料金は広告掲載前に広告掲載段数、掲載期間を予め契約し最長6ヵ月以内に出稿が約束される場合に適用される料金で、出稿量に応じた料金通減制がとられております。

以下に朝日新聞各本支社版朝刊の主な基本料金表を記載いたします。

区分	平成23年12月末現在			平成24年12月末現在		
	記事下 基本料金 (1cm×1段) (円)	案内 (1行) (人事募集) (円)	色刷料 (1色) (円)	記事下 基本料金 (1cm×1段) (円)	案内 (1行) (人事募集) (円)	色刷料 (1色) (円)
全国版	156,000	—	5,720,000	156,000	—	5,720,000
東京本社版	91,000	17,000	2,730,000	91,000	17,000	2,730,000
大阪本社版	55,000	9,900	1,700,000	55,000	9,900	1,700,000
名古屋本社版	15,000	5,700	640,000	15,000	5,700	640,000
西部本社版	27,000	4,000	1,010,000	27,000	4,000	1,010,000
北海道支社版	—	—	270,000	—	—	270,000

(注) 1 東京本社版の記事下基本料金は、北海道支社版を含んだセット料金として表示しております。

2 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

ロ 雑誌

雑誌広告の料金は、各雑誌ごとに決められております。広告料金はその雑誌の発行部数をベースに印刷方式、紙質、掲載場所などにより設定されています。新聞広告が、1センチ1段の単位で料金を表示するものに対して、雑誌広告は、掲載場所で料金が設定されています。

主要雑誌1ページの広告料金は次のとおりです。

区分	平成23年12月末現在			平成24年12月末現在		
	表4 (円)	4色カラー (円)	記事 (円)	表4 (円)	4色カラー (円)	記事 (円)
週刊ポスト	2,600,000	2,000,000	800,000	2,600,000	2,000,000	800,000
週刊現代	2,450,000	1,850,000	720,000	2,450,000	1,850,000	720,000
文藝春秋	2,100,000	1,640,000	740,000	2,100,000	1,640,000	740,000
女性自身	3,100,000	2,400,000	800,000	3,100,000	2,400,000	800,000

(注) 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

ハ テレビ・ラジオ

テレビおよびラジオの広告料金は、放送エリア内の視聴世帯数等によって地域別・放送局別に設定され、時間区分によるタイムクラスによっても変わり、一様ではありません。更に公式料金は広告料金表によって示されていますが、その実施料金は各局の販売状況によって異なり、最終契約条件は放送期間、放送時間帯、広告投下量、広告主の実績貢献度などに応じて交渉のうえ個別に決定されます。また、スポットの場合は、各タイムクラスをセットにして契約交渉することが一般的です。

ここではタイムクラス区分とタイムクラスAの場合の各地区の主な料金を記載いたします。

◇平日の時間帯によるタイムクラス区分（テレビ）◇

7:00		10:00		12:00		14:00		18:00		19:00		23:00		24:00		
C		B		C		特B		B		特B		A		特B		C

◇放送料金表（タイムクラスAの場合）◇

地区名	放送局	平成23年12月末現在				平成24年12月末現在			
		テレビ		ラジオ		テレビ		ラジオ	
		タイム (30分) (円)	スポット (15秒) (円)	タイム (30分) (円)	スポット (20秒) (円)	タイム (30分) (円)	スポット (15秒) (円)	タイム (30分) (円)	スポット (20秒) (円)
東京地区	東京放送	1,876,800	1,050,000	540,000	100,000	1,876,800	1,050,000	540,000	100,000
大阪地区	朝日放送	1,600,000	720,000	360,000	65,000	1,600,000	720,000	360,000	65,000
名古屋地区	中部日本放送	1,324,800	550,000	360,000	60,000	1,324,800	550,000	360,000	60,000
福岡地区	RKB毎日放送	1,242,000	480,000	350,000	48,000	1,242,000	480,000	350,000	48,000
札幌地区	北海道放送	1,380,000	480,000	350,000	60,000	1,380,000	480,000	350,000	60,000

(注) 1 タイム料金には番組制作費、ネット費は含まれておりません。

2 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

② インターネット広告取引

インターネット広告（モバイル広告を含む）の料金の設定形式には、ポータルサイト等各媒体の指定したサイズのスペースに対し、出稿期間保証タイプ、露出量（インプレッション：広告表示回数）保証タイプ、獲得するクリック数を保証するクリック数保証タイプ等があり、広告主は目的や予算に見合った形式や量の取引を選択します。

インターネット広告では、ユーザー数が増加しているうえ、ハードウェアやソフトウェアの技術革新に伴い、閲覧環境が激しく変化しているため、広告メニューやその価格も日々変化しております。

国内主要ポータルサイトないしモバイル通信事業者公式サイト内の広告メニューの中で、トップページをはじめ、主要ページにバナー広告を掲載した場合の代表的な取引例の料金は以下のとおりです。

<パソコン>

ポータルサイト	平成23年12月末現在		平成24年12月末現在	
	想定インプレッション (回)	料金 (円)	想定インプレッション (回)	料金 (円)
Yahoo!JAPAN *	7,500,000	5,550,000	12,500,000	12,500,000
MSN JAPAN *	10,000,000	10,500,000	10,000,000	6,500,000
Infoseek	14,000,000	4,000,000	4,000,000	1,500,000

- (注) 1 露出期間は全て1週間です。
 2 上記金額には、消費税等は含まれておりません。
 3 *印の広告料金は、出稿期間に加え露出量を保証するタイプのものであり、その想定インプレッションの欄には、保証インプレッション（回）を記載しております。

<モバイル>

モバイル通信業者 ないし ポータルサイト	平成23年12月末現在		平成24年12月末現在	
	想定インプレッション (回)	料金 (円)	想定インプレッション (回)	料金 (円)
KDDI (au)	6,000,000	500,000	6,000,000	500,000
NTT DoCoMo	24,000,000	1,000,000	5,000,000	300,000
Yahoo!JAPAN	4,000,000	1,600,000	7,500,000	5,100,000

- (注) 1 上記金額には、消費税等は含まれておりません。
 2 広告料金は全て出稿期間を保証するタイプのものです。

③ その他の広告取引

その他の広告取引は、業務 1 件ごとに費やすコストに当社の進行管理料・企画料等を加えた制作料を広告主と個別に交渉して取り決めております。しかしセールスプロモーション業務のうち、交通広告には基準料金が定められています。

主な鉄道運営会社別の交通広告の基準料金は以下のとおりです。

区分				平成23年12月末現在		平成24年12月末現在	
				枚数(枚)	料金(千円)	枚数(枚)	料金(千円)
東京地区	J R 山手セット	駅ばり	7 日	68	5,000	64	4,500
	J R 山手線群	中ぶり	2 日	2,700	2,100	2,700	2,100
	J R 山手線群	まど上	4 日	1,250	800	1,250	800
	地下鉄	中ぶり	2・3 日	4,520	3,351	4,530	3,351
	私鉄	中ぶり	2・3 日	220～1,350	80～1,060	220～1,350	80～1,060
	私鉄	まど上	1 ヲ月	220～1,350	210～2,350	220～1,350	210～2,350

- (注) 1 J R 山手セットの駅ばりは、山手線（大塚と神田を除く）27駅と中央線御茶ノ水～千駄ヶ谷間（信濃町と四ツ谷を除く）5 駅の合計32駅（平成23年12月末現在は、神田と四ツ谷を含む34駅）に B O 判ポスター各 2 枚を掲出する料金です。
- 2 J R 山手線群の中ぶりには、横須賀線、総武線(快速)、常磐線、つくばエクスプレスが含まれております。
- 3 J R 山手線群のまど上には、常磐線（E531系を除く）が含まれております。
- 4 地下鉄の枚数および料金は、東京メトロと都営地下鉄全線同時に掲出した場合を表示しております。
- 5 私鉄の枚数および料金は、主要各社の最高および最低数値を表示しております。なお、最高・低枚数と最高・低料金はそれぞれ対応しておりません。
- 6 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

(3) その他の事業における販売価格・料金決定の状況

その他の事業のうち雑誌・書籍の出版および販売については、販売価格は出版物個々に決定されます。

3 【対処すべき課題】

近隣諸国との領土問題による摩擦や欧州経済の先行きに対する不確実性、円安への期待は高まるもののいまだ回復基調とは言い難い輸出や雇用などにより国内市場が不安視される中、堅調な成長を見せる東南アジア諸国に進出を目指す広告主からの海外市場における広告対応ニーズが増加傾向にあります。また、マスメディアを中心とした広告市場が成熟した国内では、デジタルテクノロジーの進化やデジタルデバイスの高機能化による生活者のメディア接触行動、消費行動の変化に伴い、広告主はROI重視の高度なコミュニケーション・プログラムの提案を求めています。

当社グループは、このように急速に変化する環境の中、以下のテーマに注力することで、この厳しい環境に対応してまいります。

(1) グローバル

当社グループは、かねてより広告主の海外展開に対応するため、海外におけるネットワーク構築に努めてまいりました。日本国内の市場が頭打ちの中、海外、特に、中国やアジアに成長を求める日系広告主はさらに増える見込みで、そうした動きに対応できる体制を強化してまいります。WPPリソースの有効活用をさらに進め、平成25年1月よりWPP傘下のメディアエージェンシーグループ「Group M（グループ・エム）」に属するmaxus（マクサス）社との包括的な協業を開始しました。業績好調の中国、タイ、シンガポールに加え、市場規模の大きなインドネシアやインドなどにおいて、日系広告主へ高効率で結果を重視したプランニングやメディア戦略を提供することにより、ビジネスパートナーとしての地位を確固たるものにしてまいります。

また、アジア各国に対する本社からのグローバル対応人材の投入や現地プランナーの新規採用・育成など人材面での強化を図り、日系広告主の商品やサービスの販売に直接貢献するアクティベーション領域でのソリューション提供に注力してまいります。

(2) デジタル

当社と㈱電通デジタル・ホールディングスが共同で設立したメディアレップ㈱ADKデジタル・コミュニケーションズによってデジタルビジネス領域における業務の高度化と効率化が促進され、平成24年は当領域の総利益を前年比200%以上伸長させました。平成25年は、メディア・オペレーション業務の更なる効率化により収益性向上を目指すとともに、デジタルビジネス領域における新たなビジネスモデルや商材の開発に注力してまいります。

(3) ソリューション

広告主のますます多様化・高度化するニーズや課題に対応するために、専門性と統合力の強化をテーマに体制を刷新いたしました。デジタルテクノロジーをベースとした統合型キャンペーンの提案・実施力の更なる強化を目指し、平成25年1月に「コミュニケーション・アーキテクト局」を本部に昇格させました。さらに業界・業種の知見やノウハウを集約した「カテゴリーチーム」を本格稼働させ、広告主への高度で専門性の高いソリューション提供やショーケースづくりに努めてまいります。

また、個別で強みを発揮していた関係会社と本社を強力に連携させ、グループ経営を推進することにより、ADKグループとしての競争力の向上や収益力の強化に努めてまいります。

(4) コンテンツ

当社グループの伝統的な強みであるアニメコンテンツビジネスにおける新たな取り組みとして、「ONE PIECE展」（平成24年3月から6月東京開催、11月から平成25年2月大阪開催）に主催の一社として協賛し、収益面で大きな成果を上げました。

当社がアニメビジネスを始めてから節目の50年目を迎える今年、「R e g r o w t h（再成長）プロジェクト」をスタートさせます。国内外における放送、配信、マーチャンダイジングなどの分野をさらに強化し、ADKコンテンツビジネスのプレゼンスを一層高めてまいります。

(5) 人材育成

当社グループの競争力の源泉は人材であるため、今後もビジネス構造の変化に対応できる人材の育成を推進してまいります。具体的には、階層別教育を徹底し、特にミドルマネジメント層のマネジメント力向上に努めてまいります。また、今後も成長が見込まれるデジタルソリューション領域において、デジタルスキルアップを目的とした人材教育に取り組んでまいります。さらに、国内企業の海外進出、そして海外企業の日本進出に対応するため、グローバル対応人材の育成に注力してまいります。

(6) コストコントロール

当社グループは、業績の伸長が期待しにくい経済環境の中で、従来以上のコストのコントロールを目指して平成24年1月に購買マネジメント本部を設立し、コスト改善や業務プロセスの適正化など一定の成果を上げました。平成25年は仕入れ業務のインフラ整備を確固たるものにするとともに、業務対象領域を本社から支社へ拡大し、更なる原価管理の徹底と収益性の向上に努めてまいります。

(7) グループ経営の強化

当社グループは、海外におきましては中国および東南アジア諸国のグループ会社が着実に成長しており、国内におきましても専門性が求められる業務領域に強みをもつ優良なグループ会社を有しております。当社グループは各社間の連携を強化し、業務の内製化を一層推進することにより、グループ全体の競争力を高めてまいります。また、新たな業務提携、M&Aを含めた事業の拡大も併せて検討してまいります。

以上の取り組みに加えて、当社グループは安定した成長を担保するため、業務上の不確実性を最小化するリスクマネジメントに注力してまいります。その一環として、ISO27001規格に基づく情報セキュリティ体制やコンプライアンス体制を強化するほか、金融商品取引法に基づく当社グループの内部統制報告制度も引き続き改善してまいります。また、ISO14001規格に基づく環境保護など、企業としての社会的責任を意識した経営を推進してまいります。

なお、当社は「株式会社の支配に関する基本方針」を定めており、それは次のとおりであります。

当社は、当社の財務および事業の方針の決定を支配する者の在り方は、究極的には株主の皆様のご判断に委ねられるものと考えております。

当社は、資本効率の改善や株主の皆様への種々の利益還元施策の実施に加え、「全員経営」の理念のもとに全社をあげて広告業としての競争力を高めることにより、企業価値・株主共同の利益の最大化に取り組んでまいりました。また「ピープルビジネス」といわれる広告業では役員と従業員の一体感・運命共同体的意識こそが競争力の源泉であり、不適切な買収によりこれが損なわれるときは、企業価値・株主共同の利益が毀損されるとともに、買収者の目的は達成されないことになることを認識しております。

このように企業価値を高め株主に報いることによって株主のサポートを得ることが、不適切な買収に対抗する最大の防衛策であると考え、当社は現在のところ、具体的な買収防衛策を導入しておりません。

他方、当社株式の大量買付行為や買収提案があった場合には、取締役会は、株主の皆様から経営の負託を受けている者の責務として、社外専門家の意見を尊重しながら、当該買付が企業価値・株主共同の利益に及ぼす影響について評価し、自らの見解を表明するほか、当該買付者と交渉を行い、株主の皆様が当該買付に応じるか否かを適切に判断するために必要な情報の提供と時間の確保に全力を尽くす所存です。

更に、当該買付者が必要な情報を提供しない場合やその提案内容が企業価値・株主共同の利益を毀損するおそれがあると判断した場合には、その時点において採り得る実効的で、かつ株主の皆様を受け入れられる合理的対抗措置を講じる予定です。

なお、具体的な買収防衛策を予め導入しておくことについては、今後の経済環境、資本市場、法令の動向等を鑑みて、慎重に検討を進めることといたします。

4 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績、財政状態、株価等に影響を及ぼす可能性のある要因を、投資者に対する積極的な情報開示の観点から、以下のとおり記載いたします。

なお、文中における予想、見通し等、将来に関する事項は、有価証券報告書提出日（平成25年3月29日）現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 国内の景気動向の影響に関するリスク

広告会社の業績は、景気、特に個人消費動向をもとにした企業の広告支出動向の影響を受ける傾向があります。当社グループの当連結会計年度の国内売上高比率は92.2%と高い水準にあり、当社グループの業績は国内の景気動向の影響を受ける傾向があります。

(2) メディアのデジタル化・多様化および生活者のメディア接触行動の変化への対応に関するリスク

広告媒体においては、デジタルサイネージ、スマートフォン、タブレット端末などの新たなデバイスの登場など、ますますメディアが多様化するとともに、フェイスブックやツイッターを始めとしたソーシャルネットワークの急速な浸透により、生活者のメディア接触行動や時間量が変化しています。それに伴い雑誌、新聞、テレビ、ラジオの4媒体(以下「マス4媒体」)なかでも印刷媒体向けの広告市場が縮小し、ネットビジネスが高い成長を示しています。広告主も生活者のメディア消費ならびに購買行動のデータを集積・分析できるデジタルメディアを効率よく使うための高いソリューション提供能力を広告会社に求めています。

当社グループは、伝統的メディアと新しいメディアは対立するものとは考えず、それらを統合し生活者のあらゆる接点で提供していくクロス・コミュニケーション・プログラムの開発など、広告主に対するソリューション提供の強化に取り組んでおります。しかし、こうしたメディア環境や生活者のメディア接触行動の変化に当社グループが適切に対応できない場合には、業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

(3) 取引慣行等に関するリスク

① 広告主との取引慣行

わが国においては、欧米の広告業界とは異なり、「一業種一社制」ではなく同一業種の複数の広告主と取引するケースが一般的であり、案件の企画や提案内容が評価されることによって同一業種の複数の広告主からの発注を獲得できます。しかし、わが国でのこのような慣行が変化し、その変化に当社グループが適切に対応できない場合には、業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。また、広告主との取引は個別の案件ごとに行われることから、将来にわたって、現在の取引が維持されない可能性があります。

わが国の広告業界においては、広告計画や内容の突然の変更に柔軟に対応できるよう、広告主との間で契約書の作成が徹底されないことがあります。そのため、取引内容について不測の事態が発生し、紛争が生じる可能性があります。

わが国では、広告主からの受注に基づいてマス媒体を取り扱いますが、慣行として、広告会社は自己の責任で媒体社との取引を行います。そのため、広告主の経営破綻などの場合、広告主から広告料金の支払いを受けることができないにもかかわらず、媒体社や制作会社等に対して媒体料や制作費を負担しなければならない場合があります。また、広告主と当社グループとの間に第二の広告会社が介在することがあります。広告主が広告料金の支払いをしても、介在する広告会社が広告料金の決済の前に破綻した場合、同様に当社グループは媒体社や制作会社等に対して媒体料や制作費を負担しなければならない場合があります。

② 媒体社との取引慣行

わが国の広告業界では優良なコンテンツを育成するため、あるいは、重要な広告枠を確保するため、事前に広告枠を一定の金額で買取る取引を行うことがあります。その場合、当該広告枠の販売状況に関わらず媒体社等への広告料金の支払債務が生じるため、販売不足の場合には当社グループの業績および財政状態に影響を与える可能性があります。

③ 協力会社との取引慣行

広告会社は、協力会社納品物や業務の品質管理向上に努めておりますが、協力会社が発注どおりに納品する能力、企業を維持する能力のリスクを広告主に転嫁することが困難であることが通常です。さらに広告業界では業務は細分化され、協力会社はさらに下請けの協力会社に外注することや、当社グループと協力会社および媒体社との間に他の代理店が介在することがあります。そのような複層的な構造のなかで、当社グループは零細な協力会社や海外の協力会社に対して、資金繰り支援や国際ビジネスの慣行として制作資金の一部ないし全部を前払いすることがあります。協力会社が納品まで企業維持をできなかった場合、あるいは広告主の検収を満足に完了させることができずその不良品にかかわる損害の責めを負いきれなかった場合、広告会社は前払い資金を回収できない場合や不良品に係る損害の責めを負わざるを得ない場合があります。

(4) 競合に関するリスク

当社グループは、売上高国内第3位の総合広告企業グループとして、上位企業と激しく競争しております。近年、広告主は広告商品を厳しく選別し、コスト削減や広告効果の検証のため、メディアを中心とした広告の取り扱いを少数の広告会社に集中させる傾向にあり、その結果広告会社間の価格競争が激化しております。さらに、広告主の多国籍化や国内企業の合併・統合等で広告主の商品ブランドの統一化や購買の集中化等が実施されることにより、競争はいっそう激しさを増しております。また、外国広告会社の日本市場への参入、内外のインターネット関連企業によるインターネット広告市場および周辺市場への新規参入や同分野での新興企業の急成長、ならびに流通業者や商社など異業種企業による広告関連事業、特に非マス媒体広告事業への参入などの動きもあり、広告業界の競合状態がさらに激化することが見込まれます。

これらの顧客のニーズや広告業界の変化に対し、当社グループが適時・適切に対応できなかった場合には、当社グループの業界におけるシェア低下、あるいは利幅縮など、当社グループの業績および財政状態に影響を受ける可能性があります。

(5) 事業等に関するリスク

① 広告主との取引について

当社グループは、業績の安定と成長を図るため、さまざまな業種の多くの広告主と長年にわたる取引関係を維持しており、今後も広告主のニーズに対応した提案を行うよう努力してまいります。顧客ポートフォリオが変化したりその分散が不十分になったりする可能性があります。なお、当社単体における上位広告主10社、および20社に対する累積売上高は、当社の売上高のそれぞれ約2割、3割を占めております。

② 媒体社との取引慣行

当社グループは、マス4媒体、インターネットやモバイルをはじめとするデジタルメディアなど、各種の媒体社が保有する広告枠を、一般企業等の広告主に販売しております。

当社単体の売上高に占めるマス4媒体、デジタルメディアおよびOOHメディアの取扱高の割合は当事業年度で65.3%と高く、特に「テレビ区分」の当社単体の売上高に占める割合は46.8%でありました。当社グループは、今後ともテレビをはじめとしたマス4媒体およびデジタルメディアの広告枠の確保や取引条件の改善に努めてまいります。それが適切にできなかった場合には、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

③ 協力会社との取引について

広告の制作やセールスプロモーション、PRおよび市場調査等において、当社グループは企画業務を主とし、実施業務はその多くを協力会社に外注しております。将来、当社グループとこれら協力会社との取引関係に変化が生じ、当社グループがそれらの変化に的確に対応できなかった場合には、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

④ 人材の確保・育成およびコスト管理について

当社グループは、広告業はピープルビジネスであり、すべての価値の根源となる経営資源はひとえに「人」と考えております。したがって、優秀な人材の獲得と確保、適材適所の配置、市場環境に対応できる能力を獲得させるための教育、社内コミュニケーションの円滑化などに努めております。また、本年4月以降改正される改正労働契約法、改正労働者派遣法と高年齢者雇用安定法を順守することにより当社の諸人事施策を改定し運用し、新経営方針に沿って新しい社員教育の仕組みも検討してまいります。しかし、当社グループが人材の確保、活用、育成強化に十分対応できない場合、当社グループの経営判断、成長力や競争力が影響を受ける可能性があります。また、人件費は固定費的な性格が強く、販売費及び一般管理費の中で大きなシェアを占めていることから、当社グループのコスト構造への影響が大きい傾向にあります。当連結会計年度における人件費の売上総利益に対する割合は62.5%でした。

⑤ 海外業務について

当社グループはかねてより成長率の高い海外市場での広告事業の拡大に努めてまいりました。当社グループの当連結会計年度の海外売上高比率は7.8%でありました。海外での事業には、異なる政治・文化・社会・法規制・商慣習に起因するさまざまな問題が発生することがあり、また、為替リスクが根源的に付随しております。高い成長性が期待される新興市場ではこれらのリスクは一層高いものと思われます。当社グループが計画どおりに海外業務を展開できなかった場合には、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

⑥ コンテンツ事業について

当社グループはアニメーションのテレビ放映とその関連事業を得意としており、それにスポーツ・文化イベント等を加えたコンテンツビジネスを広告主に対する競合他社との差別化に生かし、また、収益性の高い二次利用収入を獲得しておりますが、国内の人口の高齢化が進み、生活者の嗜好やメディアが多様化する環境下、この分野の業務形態が複雑化し、競争が激化しており、一件当たりの投資必要額とその成否の不確実性が上昇し、投資の回収期間は長期化する傾向にあります。当社グループは一層コンテンツとその販売ルートの開発に注力し、リスクを管理しながら新しいビジネスモデルにも挑戦しております。しかしながら、期待した収益が得られなかった場合には、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

⑦ 営業基盤強化のための投資に関するリスク

当社グループは、デジタルビジネス領域への投資、およびより高度な提案をするためのシステム開発やデータ収集ならびに研究開発活動に投資しております。さらに、効率のよいオペレーションのためにもシステム開発を進めております。しかしながら、これらの投資の成果が予定したとおりにあげられない場合には、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

⑧ グループ経営に関わるリスク

当社グループは、当連結会計年度末現在において、当社、子会社47社、関連会社15社およびその他の関係会社1社（その子会社を含む。以下同じ。）で構成されており、広告業ならびに雑誌・書籍の出版・販売業を行っております。当社グループは、広告、出版市場の激しい変化に一丸となつて対応し、相乗効果を上げるよう努めてまいりますが、この施策が計画どおりにいかない場合には、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

⑨ WPPグループとの資本・業務提携について

当社は、平成10年8月より、世界的大手広告業持株会社のWPP plcとの間で資本・業務提携契約を締結しております。資本提携においては、WPP plcは当社の株式を24.32%（議決権ベース）間接保有しており、筆頭株主であります。一方で当社は、WPP plcの株式の2.47%を保有しております。また、当社とWPPグループは相互に取締役を1名ずつ派遣しあっております。業務提携においては、JWT社をはじめとするWPPグループの広告事業会社との間で営業上の取引関係を進め、地域ごとに経営資源の偏在を補完しあっております。

当社は、同社グループとの資本・業務提携は、今後も安定して継続、拡大するものと考えますが、当社が予期したとおりの成果を上げられない場合、また、万が一、提携の内容に変化が生じる場合は、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

また、当社の保有するWPP plc株式の時価は当連結会計年度末時点において387億7千3百万円（£8.88／株）でありました。同株式の帳簿価額は平成10年度低価法適用後の222億6千2百万円（£3.6517／株）であります。将来WPP plcの株価が大幅に低下した場合には、投資有価証券評価損を計上することが必要になる可能性があります。

⑩ 有価証券、投資有価証券の市場リスクについて

当連結会計年度末の当社グループの投資有価証券残高は、前述のWPP plc株式を含めて553億1千2百万円であり、総資産1,951億6千3百万円の28.3%を占めております。そのうち、時価のある株式は前述のWPP plc株式を含めて511億6千7百万円であり、主として広告主との取引拡大を目的に保有しているものであります。その他有価証券評価差額金は当連結会計年度末で135億5千3百万円（前年同期は40億6千3百万円）でありました。個別銘柄において時価が大幅に低下した場合には、投資有価証券評価損を計上することが必要になる可能性があります。

⑪ 退職給付制度について

当社および当社グループ会社の一部は、個社毎の差はありますが、それぞれ確定拠出年金制度と確定給付型制度と退職一時金制度を採用し、総合設立型の日本広告業厚生年金基金制度に加入しております。確定給付型制度は、年金資産の運用状況が悪化すること、年金数理計算上の前提条件から実際の結果が大きく乖離すること、などがあつた場合、当社グループの業績および財政状態に影響を与える可能性があります。

日本広告業厚生年金基金に関しては、会計上自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができないため、いわゆる例外処理として年金基金への拠出額を退職給付費用としております。市場金利水準の長期低位維持などによる掛金計算予定利率の低下、年金資産の運用状況の悪化、加入員数の減少、加入員数に対する年金受給者数の割合の増加などによって、追加的拠出負担を求められた場合、あるいは退職給付会計基準が変更になった場合、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

⑫ 訴訟等に関わるリスク

当社グループは、様々な要因により今後なんらかの訴訟・紛争に直接または間接的に関与する可能性を排除できません。当社グループが訴訟・紛争に関与した場合、その内容、経過、結果によっては、当社グループ業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

⑬ 法的規制等によるリスク

広告主の広告活動には、景品表示法、著作権法、商標法、薬事法、特定商取引法等の法的規制や媒体掲載・審査基準等の自主規制が適用されます。これらの法的規制や自主規制の強化、新設等が広告主の広告活動を抑制するケースが発生した場合には、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

また、当社グループは、中心となる広告業そのものには業法規制はないものの、付随する業務で建設業法、警備業法等の規制を受けるほか、下請代金支払遅延等防止法、個人情報保護法その他の企業活動規制法の適用を受けております。また、金融商品取引法のもと内部統制報告制度の遵守が求められています。いずれも当社グループに重大な影響を与える懸念はないと考えておりますが、今後これらの法的規制の変更等に適切に対応できなかった場合には、対応のためのオペレーション費用の増加を始め、当社グループの業績および財政状態が影響を受ける可能性があります。

5 【経営上の重要な契約等】

当社は、WPP plcと資本・業務提携契約をしております。

(1) 契約発効日 平成10年8月3日

(2) 契約の内容

- ① 業務提携 共同事業協議体を結成し、共同しての顧客開拓、相互の顧客紹介合併事業等、様々な協力形態をとりながら、グローバルなスケールでの業務展開をはかる。
- ② 資本提携 WPP plcの子会社（ダブリューピーピー インターナショナル ホールディング ビーヴィー）に対し、普通株式10,331,100株（発行価格総額299億8千万円）を第三者割当増資により発行しております。また、当社は上記の出資額と同額に相当するWPP plcの普通株式を、第三者割当増資により取得しております。

6 【研究開発活動】

当社グループは広告主企業に対し、より高品質のサービスを提供するために研究活動を行っております。

セグメント別の主な研究開発活動を示すと、次のとおりであります。

(1) 広告業

広告業の研究開発費用は10億3千9百万円であります。

その内訳の主なものは、BSデジタル放送やインターネットといったメディアの多様化、多チャンネル化に対応し、より効果的、効率的にメディアプランニングをサポートするシステム「MPSS」の開発への支出8億円であります。

(2) その他の事業

その他の事業では、特に研究開発活動は行っておりません。

7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

以下の文中における予想、見通し等、将来に関する事項は、有価証券報告書提出日（平成25年3月29日）現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 重要な会計方針および見積り・判断が財務諸表に与える影響について

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成しております。

その作成に際し当社経営陣は、投資、債権の貸倒れ、子会社の設立・統廃合、法人税等、財務活動、退職金・年金制度、偶発債務や訴訟等について過去の実績や状況に応じ合理的だと考えられる様々な要因に基づき、見積りおよび判断を行い、継続して評価を行っております。その結果は、資産・負債の簿価、収益・費用の報告数字についての計上に反映されます。

実際の結果は、見積り特有の不確実性があるため、見積り数字と異なる場合があります。

当社は、特に以下の重要な会計方針について、当社グループの財政状態および経営成績に特に影響を与える、あるいは当社の連結財務諸表の作成において使用される当社の重要な判断と見積りにより、大きな影響を受けると考えております。

① 収益の認識

当社グループの収益の内訳は、メディア会社から受け取る手数料と広告主等から受け取る報酬とに大別されます。

メディア会社から受け取る手数料はマージンとよばれ、日本では一般に広告主の依頼に基づいて広告代理店がメディア会社から購入して広告主に販売した広告出稿料金（広告枠）に対する一定割合であります。この割合は、通常、当社グループと当該メディア会社との交渉によって決まります。日本の広告業界慣例としてメディア会社へ支払う代金は当社グループが受け取るべきマージンを相殺した後の金額を支払います。売上の認識は広告放送・掲載日になされ、当社グループでは、日本の会計基準に基づき、広告主に請求する金額すべてを売上高として計上し、メディア会社に対する支払額を売上原価として計上しています。

広告主から受け取る報酬の対象は、広告主およびその他のクライアントからの広告制作やその他情報成果物です。この報酬金額は、通常、当社内部でのコストや外注先等から請求されたコストに当社の利益を加えた金額をもとにクライアントと交渉を行い決定されます。また、内容によっては定額または定率、もしくはその他の報酬体系によることもあります。これら報酬の売上認識は情報成果物が納品された時点で行っています。

② 貸倒引当金

当社グループは、広告主等の顧客からの回収が不能となった時に発生する損失に備えるため、貸倒引当金を計上しています。貸倒見積高の算定にあたっては、債権を一般債権、貸倒懸念債権、破産更生債権等に区分し、一般債権については貸倒実績率により算定した回収不能見込額を、貸倒懸念債権については個別に回収可能性を検討した回収不能見込額を、破産更生債権等については回収見込額を減額した残額を、それぞれ貸倒見積高としております。

広告主等の顧客の財政状態が悪化し、その支払能力が低下した場合には追加引当てが必要となる場合があります。

③ 投資の減損

当社グループは、継続的な成長を目指して、成長が見込まれる新規事業、海外事業および国内外の取引先等が発行する投資有価証券への投資を行っております。これらの投資には時価の算定と変動の認識が容易な公開会社の株式と、時価の算定が困難な非公開会社の株式等が含まれます。当社グループは両者について時価下落が一時的でないと判断した場合、投資額の減損損失を評価損として計上しております。将来の市況の悪化、投資先の業績不振等により、現在の簿価に反映されていない取得通貨ベースでの時価の下落が発生した場合、評価損の計上が必要となる場合があります。投資対象が外貨建ての場合は、円貨換算後の評価損を計上します。なお、外貨建て投資の場合には、円貨換算後の時価をもって貸借対照表に計上しております。

④ 繰延税金資産

当社グループは、実現可能性を慎重に勘案した継続的なタックスプランニングに基づいて繰延税金資産を計上しておりますが、当該資産の全部または一部について、将来、税効果を実現できないと判断した場合、当該判断を行った事業年度において繰延税金資産の調整額を費用として計上する場合があります。

⑤ 退職給付引当金

退職給付費用および債務は、年金数理計算上の前提条件に基づいて算出・計上しております。そのため、前提条件が各年の実際の結果と大きく異なった場合または前提条件が変更された場合、計上される費用および債務が影響を受ける場合があります。

(2) 当連結会計年度の経営成績の分析

当連結会計年度の経営成績の分析は、1 [業績等の概要] に詳述したとおりであります。

(3) 経営成績に重要な影響を与える要因について

経営成績に重要な影響を与える要因は、4 [事業等のリスク] に詳述したとおりであります。

(4) 戦略的現状と見通し

戦略的現状と見通しは、3 [対処すべき課題] に詳述したとおりであります。

(5) 資本の財源および資金の流動性についての分析

① 資産、負債および純資産の分析

資産、負債および純資産の分析は、1 [業績等の概要] (4) 財政状態およびキャッシュ・フローの状況に詳述したとおりであります。

② キャッシュ・フローの分析

当連結会計年度のキャッシュ・フローの分析は、1 [業績等の概要] (4) 財政状態およびキャッシュ・フローの状況に詳述したとおりであります。

(6) 経営者の問題認識と今後の方針について

経営者の問題意識と今後の方針のうち、当社グループの競争戦略については、3 [対処すべき課題]、目標とする経営指標については、1 [業績等の概要] (3) 目標とする経営指標とその達成状況、株主還元方針については、第4 [提出会社の状況] 3 [配当政策] にそれぞれ記載のとおりであります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

特記すべき事項はありません。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

平成24年12月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)				従業員数 (名)
			建物及び 構築物	土地 (面積㎡)	その他	合計	
本社オフィス (東京都中央区)	広告業	事務所	854	—	494	1,349	1,668
関西支社 (大阪市北区)	広告業	事務所	44	—	25	70	98
中部支社その他国内事務所 (名古屋市中区他)	広告業	事務所	47	—	44	92	150
熱海保養所他厚生施設及び 社宅他 (静岡県熱海市他)	広告業	厚生施設他	280	321 (987,956)	0	602	—

(2) 国内子会社

平成24年12月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)				従業員数 (名)
				建物及び 構築物	土地 (面積㎡)	その他	合計	
(株)日本文芸社	本社 (東京都千代田区)	その他の 事業	事務所	324	560 (400)	10	894	69

(3) 在外子会社

主要な設備はありません。

- (注) 1 帳簿価額には、建設仮勘定の金額は含まれておりません。
2 帳簿価額のうち「その他」は、主として工具、器具及び備品であります。
3 現在休止中の主要な設備はありません。
4 上記の他、連結会社以外から賃借している主要な設備の内容は、下記のとおりであります。

提出会社

平成24年12月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	賃借料又は 年間リース料 (百万円)	リース契約残高 (百万円)
本社オフィス (東京都中央区)	広告業	事務所	年間賃借料 2,103	—
本社オフィス他 (東京都中央区他)	広告業	工具、器具及び備品等	年間リース料 41	18

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	支払予定額		資金調達方法	契約 年月	移転予定 年月	備考
				総額 (百万円)	既支払額 (百万円)				
提出 会社	本社 新社屋 (東京都 港区)	広告業	新社屋用 貸借ビル	1,186 (注) 1	593	自己資金	平成24年 11月	平成26年 夏頃	(注) 2

- (注) 1 支払予定総額については、ビル賃借に係る差入保証金であり、設備等の投資、費用は含まれておりません。
- 2 業務効率の向上を図るため、上記新社屋「虎ノ門ヒルズ」に移転する予定であります。
- 3 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 重要な設備の除却等

特記すべき重要な事項はありません。

第 4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	206,000,000
計	206,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成24年12月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成25年3月29日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	42,655,400	42,655,400	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数 100株
計	42,655,400	42,655,400	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

① 新株予約権

平成24年5月11日の取締役会決議に基づいて発行した会社法に基づく新株予約権は、次のとおりであります。

	事業年度末現在 (平成24年12月31日)	提出日の前月末現在 (平成25年2月28日)
新株予約権の数	500個 (注) 1	同左
新株予約権のうち自己新株予約権の数	—	—
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数	50,000株 (注) 2	同左
新株予約権の行使時の払込金額	1株当たり1円	同左
新株予約権の行使期間	平成27年5月31日～ 平成34年5月30日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額	発行価格 1,219円 資本組入額 610円	同左
新株予約権の行使の条件	(注) 3	
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡による新株予約権の取得については、取締役会の承認を要する。	同左
代用払込みに関する事項	—	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注) 4	同左

(注) 1 新株予約権1個当たりの目的である株式の数(以下「付与株式数」という。)は100株とする。

2 当社が当社普通株式につき、株式分割(株式無償割当てを含む。以下、株式分割の記載につき同じ。)または株式併合を行う場合、次の算式により付与株式数を調整し、調整の結果生じる1株未満の端数は、これを切り捨てるものとする。

$$\text{調整後付与株式数} = \text{調整前付与株式数} \times \text{株式分割・株式併合の比率}$$

調整後付与株式数は、株式分割の場合は、当該株式分割の基準日の翌日(基準日を定めないときはその効力の発生日)以降、株式併合の場合は、その効力の発生日以降、これを適用する。また、当社が合併、会社分割または株式交換を行う場合およびこれらの場合に準じて付与株式数の調整を必要とする場合、当社は取締役会において必要と認める付与株式数の調整を行うことができるものとする。

3 新株予約権の行使の条件

① 新株予約権者は、権利行使時において、当社の取締役の地位にあることを要する。ただし、任期満了による退任その他正当な理由がある場合はこの限りではない。

② 新株予約権者が行使できる新株予約権の数は、新株予約権の割当日以後権利行使期間開始日までの株主総利回り(権利行使期間開始日の属する月の直前3か月の各日(取引が成立しない日を除く。))の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値から、新株予約権の割当日の属する月の直前3か月の各日(取引が成立しない日を除く。))の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値を控除し、新株予約権の割当日以後権利行使期間開始日までの間における当社普通株式1株当たりの配当金の総額を加算した金額を、新株予約権の割当日の属する月の直前3か月の各日(取引が成立しない日を除く。))の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値で除して算定した値)の結果に応じて、割当を受けた新株予約権の数の0%から100%の範囲で段階的に変動するものとする。

- 4 当社が合併（合併により消滅する場合に限る。）、吸収分割、新設分割、株式交換または株式移転（これらを総称して以下「組織再編行為」という。）を行う場合において、組織再編行為の効力発生日（吸収合併につき吸収合併の効力発生日、新設合併につき新設合併設立会社成立の日、吸収分割につき吸収分割の効力発生日、新設分割につき新設分割設立会社の成立の日、株式交換につき株式交換の効力発生日、および株式移転につき株式移転設立完全親会社の設立の日をいう。）の直前において残存する新株予約権（以下「残存新株予約権」という。）を保有する新株予約権者に対し、会社法第236条第1項第8号のイからホまでに掲げる株式会社（以下「再編対象会社」という。）の新株予約権を次の定めに基づきそれぞれ交付することとする。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編対象会社は新たに新株予約権を交付するものとする。ただし、次の定めに沿って再編対象会社の新株予約権を交付する旨を、吸収合併契約、新設合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約または株式移転計画において定めることを条件とする。
- ① 交付する再編対象会社の新株予約権の数
新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数をそれぞれ交付する。
 - ② 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の種類
再編対象会社の普通株式とする。
 - ③ 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数
組織再編行為の条件等を勘案のうえ、上記(注)1および2に準じて決定する。
 - ④ 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額
交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編後行使価額に当該各新株予約権の目的である再編対象会社の株式の数を乗じて得られる金額とする。再編後行使価額は、交付される各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編対象会社の株式1株当たり1円とする。
 - ⑤ 新株予約権を行使することができる期間
表中の「新株予約権の行使期間」に定める新株予約権を行使することができる期間の開始日と組織再編行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、表中の「新株予約権の行使期間」に定める新株予約権を行使できる期間の満了日までとする。
 - ⑥ 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金および資本準備金に関する事項
 - (1) 新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本金の額は、会社計算規則第17条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果1円未満の端数を生ずる場合、その端数を切り上げる。
 - (2) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本準備金の額は、上記(1)記載の資本金等増加限度額から上記(1)に定める増加する資本金の額を減じた額とする。
 - ⑦ 譲渡による新株予約権の取得の制限
譲渡による新株予約権の取得については、再編対象会社の取締役会の承認を要する。
 - ⑧ 新株予約権の取得条項
以下の議案につき再編対象会社の株主総会で承認されたとき（株主総会決議が不要の場合は、再編対象会社の取締役会決議がなされたとき）は、再編対象会社は取締役会が別途定める日に新株予約権を無償で取得することができる。
 - (1) 再編対象会社が消滅会社となる合併契約承認の議案
 - (2) 再編対象会社が分割会社となる分割契約または分割計画承認の議案
 - (3) 再編対象会社が完全子会社となる株式交換契約または株式移転計画承認の議案
 - (4) 再編対象会社の発行する全部の株式の内容として譲渡による当該株式の取得について再編対象会社の承認を要することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
 - (5) 新株予約権の目的である種類の株式の内容として譲渡による当該種類の株式の取得について再編対象会社の承認を要することまたは当該種類の株式について再編対象会社が株主総会の決議によってその全部を取得することについての定めを設ける定款の変更承認の議案
 - ⑨ その他の新株予約権の行使の条件
上記(注)3に準じて決定する。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成24年2月27日 (注)	△2,500,000	42,655,400	—	37,581	—	7,839

(注) 平成24年2月14日開催の取締役会において決議した自己株式の消却による減少であります。

(6) 【所有者別状況】

平成24年12月31日現在

平成24年12月31日現在

区分	株式の状況（１単元の株式数 100株）								単元未満 株式の状況 （株）
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 （人）	—	38	27	142	147	4	5,911	6,269	—
所有株式数 （単元）	—	58,092	2,403	24,710	275,982	2,379	61,941	425,507	104,700
所有株式数 の割合（％）	—	13.65	0.56	5.81	64.86	0.56	14.56	100.00	—

(注) 1 自己株式75,649株のうち756単元(75,600株)を「個人その他」の欄に、49株を「単元未満株式の状況」の欄にそれぞれ含めて記載しております。なお、期末日現在の株主名簿上の株式数と、実質的な所有株式数は同一であります。

2 証券保管振替機構名義の株式20株を「単元未満株式の状況」の欄に含めて記載しております。

(7) 【大株主の状況】

平成24年12月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
ダブリューピーピー インターナショナル ホールディング ビーヴィ (常任代理人 大和証券株式会社)	WILHELMINAPLEIN 10, 3072 DE ROTTERDAM THE NETHERLANDS (東京都千代田区丸の内1-9-1)	10,331	24.21
ノーザン トラスト カンパニー (エイブイ エフシー) サブ アカウント アメリカ ン クライアント (常任代理人 香港上海銀行東京支店 カス トディ業務部)	50 BANK STREET CANARY WHARF LONDON E14 5NT, UK (東京都中央区日本橋3-11-1)	2,333	5.46
ザ シルチェスター インターナショナル インベスターズ インターナショナル バリュウ エクイティーズ トラスト (常任代理人 香港上海銀行東京支店カス トディ業務部)	C/O SILCHESTER INTERNATIONAL INVESTORS INC, 780 THIRD AVENUE, 42ND FLOOR, NEW YORK, NEW YORK 10017, USA (東京都中央区日本橋3-11-1)	1,672	3.92
ノーザン トラスト カンパニー エイブイ エフシー リ ユーエス タックス エグゼ ンプテッド ペンション ファンズ (常任代理人 香港上海銀行東京支店 カス トディ業務部)	50 BANK STREET CANARY WHARF LONDON E14 5NT, UK (東京都中央区日本橋3-11-1)	1,587	3.72
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー (常任代理人 株式会社みずほコーポレート 銀行決済営業部)	P. O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 USA (東京都中央区月島4-16-13)	1,458	3.41
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー 505223 (常任代理人 株式会社みずほコーポレート 銀行決済営業部)	P. O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 USA (東京都中央区月島4-16-13)	1,452	3.40
ジェーピー モルガン チェース バン ク 380055 (常任代理人 株式会社みずほコーポレート 銀行決済営業部)	270 PARK AVENUE, NEW YORK, NY 10017, USA (東京都中央区月島4-16-13)	958	2.24
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー 505225 (常任代理人 株式会社みずほコーポレート 銀行決済営業部)	P. O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 USA (東京都中央区月島4-16-13)	940	2.20
メロン バンク エヌエー アズ エージェ ント フォー イッツ クライアント メロ ン オムニバス ユーエス ペンション (常任代理人 株式会社みずほコーポレート 銀行決済営業部)	ONE BOSTON PLACE BOSTON, MA 02108 (東京都中央区月島4-16-13)	854	2.00
日本マスタートラスト信託銀行株式会社 (退職給付信託口・三菱商事株式会社口)	東京都港区浜松町2-11-3	765	1.79
計	—	22,352	52.40

(注) 1 上記の所有株式のうち、信託業務に係る株式数は、次のとおりであります。

日本マスタートラスト信託銀行株式会社 765千株

- 2 シルチェスター・パートナーズ・リミテッド(旧名称シルチェスター・インターナショナル・インベスターズ・リミテッド)から、平成22年11月8日付の大量保有報告書(変更報告書)の写しの送付があり、平成22年11月1日現在でシルチェスター・インターナショナル・インベスターズ・エルエルピーおよび同社により、6,268,500株(発行済株式総数の13.88%)を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として当事業年度末現在における保有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。
- 3 モルガン・スタンレーMUFJ証券株式会社から、平成24年3月8日付の大量保有報告書(変更報告書)の写しの送付があり、平成23年11月30日現在でモルガン・スタンレー・インベストメント・マネジメント・リミテッドをはじめとする計4社により、2,335,926株(発行済株式総数の5.17%)を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として当事業年度末現在における保有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

- 4 フランクリン・テンブルトン・インスティテューショナル・エルエルシーから、平成24年9月19日付の大量保有報告書（変更報告書）の写しの送付があり、平成24年9月14日現在で2,194,500株（発行済株式総数の5.14%）を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として当事業年度末現在における保有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。
- 5 サード・アベニュー・マネージメント・エルエルシーから、平成25年2月4日付の大量保有報告書（変更報告書）の写しの送付があり、平成25年1月31日現在で2,148,300株（発行済株式総数の5.04%）を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として当事業年度末現在における保有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。
- 6 ハリス・アソシエイツ・エル・ピーから、平成25年3月21日付の大量保有報告書の写しの送付があり、平成25年3月15日現在で2,285,500株（発行済株式総数の5.36%）を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として当事業年度末現在における保有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成24年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式（自己株式等）	—	—	—
議決権制限株式（その他）	—	—	—
完全議決権株式（自己株式等）	(自己保有株式) 普通株式 75,600	—	—
完全議決権株式（その他）	普通株式 42,475,100	424,751	—
単元未満株式	普通株式 104,700	—	—
発行済株式総数	42,655,400	—	—
総株主の議決権	—	424,751	—

(注) 1 「単元未満株式」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が20株含まれております。

2 「単元未満株式」の欄には、当社所有の自己株式が49株含まれております。

② 【自己株式等】

平成24年12月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 株式会社アサツー ディ・ケイ	東京都中央区 築地1-13-1	75,600	—	75,600	0.17
計	—	75,600	—	75,600	0.17

(9) 【ストックオプション制度の内容】

当社は、新株予約権方式による株式報酬型ストック・オプション制度を採用しております。

当該制度は、会社法に基づき、平成24年5月11日の取締役会において決議されたものであります。

当該制度の内容は、以下のとおりであります。

決議年月日	平成24年5月11日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役（社外取締役を除く。）9名
新株予約権の目的となる株式の種類	「(2)新株予約権等の状況 ①新株予約権」に記載しております。
株式の数	同上
新株予約権の行使時の払込金額	同上
新株予約権の行使期間	同上
新株予約権の行使の条件	同上
新株予約権の譲渡に関する事項	同上
代用払込みに関する事項	—
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	同上

(10) 【従業員株式所有制度の内容】

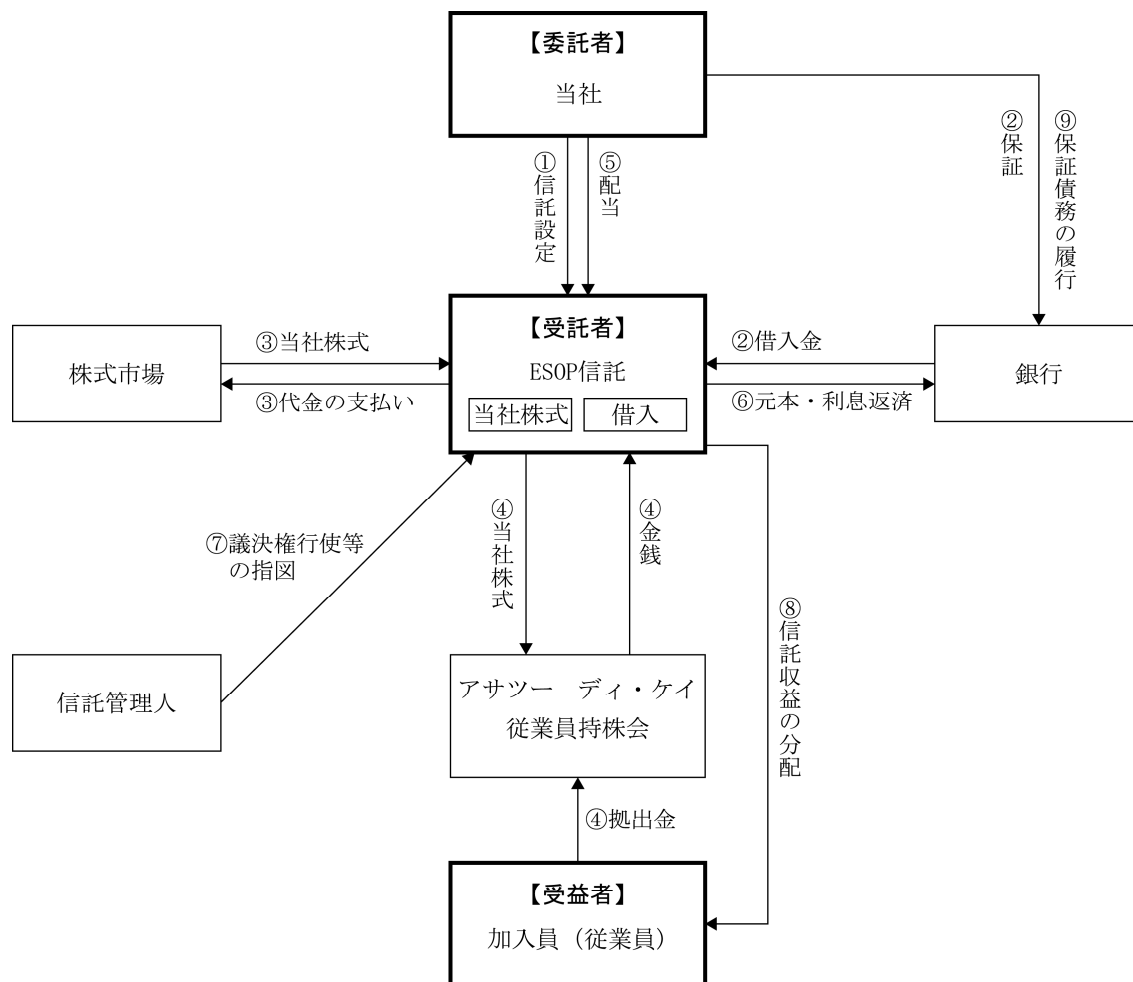
当社は、平成22年2月12日の取締役会決議により、当社グループの成長の原動力となる従業員に対する福利厚生施策強化の一環とするとともに、従業員の業績や株価に対する意識を高め、かつ中長期的な企業価値向上を図ることを目的として、従業員インセンティブ・プラン「従業員持株E S O P信託」（以下「E S O P信託」といいます。）を導入しております。

① E S O P信託の概要

E S O P信託とは、米国のE S O P（Employee Stock Ownership Plan）制度を参考に、従業員持株会の仕組みを応用した信託型の従業員インセンティブ・プランであり、当社株式を活用した従業員の財産形成を促進する貯蓄制度の拡充（福利厚生制度の拡充）を図る目的を有するものをいいます。

当社が「アサツー ディ・ケイ従業員持株会」（以下「当社持株会」といいます。）に加入する従業員のうち一定の要件を充足する者を受益者とする信託を設定し、当該信託は今後5年間にわたり当社持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を、予め定める取得期間中に取得します。その後、当該信託は当社株式を毎月一定日に当社持株会に売却します。信託終了時に、株価の上昇により信託収益がある場合には、受益者たる従業員の拠出割合に応じて金銭が分配されます。株価の下落により譲渡損失が生じ信託財産に係る債務が残る場合には、金銭消費貸借契約の保証条項に基づき、当社が銀行に対して一括して弁済するため、従業員への追加負担はありません。

当該E S O P信託の仕組みは、以下のとおりであります。



- ① 当社は受益者要件を充足する従業員を受益者とするE S O P信託を設定します。
- ② E S O P信託は銀行から当社株式の取得に必要な資金を借入れます。当該借入にあたっては、当社がE S O P信託の借入について保証を行います。
- ③ E S O P信託は上記②の借入金をもって、信託期間内に当社持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を、株式市場から予め定める取得期間中に取得します。
- ④ E S O P信託は信託期間を通じ、毎月一定日までに当社持株会に拠出された金銭をもって譲渡可能な数の当社株式を、時価で当社持株会に譲渡します。
- ⑤ E S O P信託は当社の株主として、分配された配当金を受領します。
- ⑥ E S O P信託は当社持株会への当社株式の売却による売却代金及び保有株式に対する配当金を原資として、銀行からの借入金の元本・利息を返済します。
- ⑦ 信託期間を通じ、信託管理人が議決権行使等の株主としての権利の行使に対する指図を行い、E S O P信託はこれに従って株主としての権利を行使します。
- ⑧ 信託終了時に、株価の上昇により信託内に残余の当社株式がある場合には、換価処分の上、受益者に対し信託期間内の拠出割合に応じて信託収益が金銭により分配されます。
- ⑨ 信託終了時に、株価の下落により信託内に借入金が残る場合には、上記②の保証に基づき、当社が銀行に対して一括して弁済します。

※当社持株会への売却により信託内に当社株式がなくなった場合には、信託期間の満了前に信託収益を受益者に分配し、残余財産を委託者に返還することによって、信託期間が満了する前に信託が終了します。

② 信託契約の内容

信託の種類	特定単独運用の金銭信託（他益信託）
信託の目的	当社持株会に対する当社株式の安定的・継続的な供給及び受益者要件を充足する当社従業員に対する福利厚生制度の拡充
委託者	当社
受託者	三菱UFJ信託銀行株式会社
受益者	当社持株会加入員のうち受益者要件を充足する者
信託管理人	当社と利害関係のない第三者
信託契約日	平成22年 2 月24日
信託の期間	平成22年 2 月24日～平成27年 4 月20日
信託の終了事由	信託期間が満了した場合、信託内の当社株式がすべて売却されて信託収益の受益者への分配・残余財産の委託者への返還が行われた場合、当社が解散した場合、当社持株会の会員が存在しなくなり以後も存在しない場合、信託管理人が欠けたときに新たな信託管理人が選任されない場合等
議決権行使	受託者は、当社持株会の議決権行使状況を反映した信託管理人の指図に従い、当社株式の議決権を行使します。
取得株式の種類	当社普通株式
取得株式の総額	8.2億円
株式の取得期間	平成22年 3 月 2 日～3 月24日
株式の取得方法	取引所市場より取得

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号および会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

会社法第155条第3号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会（平成25年2月12日）での決議状況 （取得期間 平成25年2月18日～平成25年6月17日）	500,000	1,250,000,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	—	—
残存決議株式の総数及び価額の総額	500,000	1,250,000,000
当事業年度の末日現在の未行使割合（％）	100.0	100.0
当期間における取得自己株式	53,700	128,836,600
提出日現在の未行使割合（％）	89.3	89.7

（注）当期間における取得自己株式数には、平成25年3月1日から有価証券報告書提出日までの取得株式数は含めておりません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	1,987	4,224,424
当期間における取得自己株式	302	725,581

（注）当期間における取得自己株式数には、平成25年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	2,500,000	6,777,921,897	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他（単元未満株式の売渡し）	36	97,603	—	—
保有自己株式数	75,649	—	129,651	—

（注）当期間における保有自己株式数には、平成25年3月1日から有価証券報告書提出日までの自己株式の取得、単元未満株式の買取りおよび売渡しによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は会社法第459条第1項に基づき、剰余金の配当等を取締役会が定めることができる旨を定款で定めております。取締役会はこの権限の行使にあたり、次の方針で臨んでおります。

当社は、株主還元を当社グループ経営の最も重要な目的のひとつとして位置づけております。配当および自己株式の取得による短期的・長期的な株主還元と中長期的な経営戦略に沿った事業投資を行うに必要な内部留保とのバランスをとり、総合的に企業価値を増加させる方針を採っております。

配当額の決定にあたっては、原則として1株当たり年間配当額の下限を20円として配当の長期安定性を図りながらも、グループ連結当期純利益の35%を目安に年間配当を実施することとしております。配当回数は当面年2回といたします。中間と期末の割り振りとしては、中間基準日配当においては安定的に10円を原則とし、期末基準日配当においては下限の10円もしくは年間配当性向約35%の目安を達成する金額のどちらか高い額としております。

この方針のもと、当事業年度の剰余金の配当は、中間基準日配当金を平成24年8月10日の取締役会決議により1株につき10円といたしました。期末基準日配当金につきましては、平成25年2月12日の取締役会決議により1株につき13円の普通配当に加えて、今後の事業展開のために必要な内部留保、経営環境の見通し等を総合的に勘案し、1株につき88円の特別配当を実施し、101円といたしました。

この結果、当事業年度の1株当たり年間配当金は111円でありました。

なお、自己株式の取得は、自己資本利益率（ROE）の改善を加速化させるため、当期純利益の増大ともども注力することとしておりますが、その決定にあたっては、当社グループをめぐる市場環境、連結収益力、財務安定性を勘案し、成長戦略に支障のない範囲で行うこととしております。

（注）基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
平成24年8月10日 取締役会	425	10.00
平成25年2月12日 取締役会	4,300	101.00

※ 上記の配当金の総額には、それぞれ以下の従業員持株E S O P信託に対する配当金を含めて記載しております。

平成24年8月10日取締役会決議の配当金	3百万円
平成25年2月12日取締役会決議の配当金	30百万円

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第54期	第55期	第56期	第57期	第58期
決算年月	平成20年12月	平成21年12月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月
最高(円)	3,640	2,235	2,633	2,575	2,480
最低(円)	1,706	1,604	1,697	1,824	1,692

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成24年7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高(円)	2,285	2,284	2,054	1,996	1,976	2,076
最低(円)	2,167	2,010	1,906	1,741	1,692	1,901

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員の状況】

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 社長		植野 伸一	昭和29年 2月17日生	昭和51年4月 平成17年1月 平成19年1月 平成20年3月 平成20年4月 平成23年1月 平成23年3月 平成24年3月 平成25年3月	当社入社 当社執行役員 当社コーポレート本部長 当社取締役執行役員 当社コーポレート部門担当 当社統合ソリューションセンター担当 兼コーポレートセンター担当 当社統合ソリューションセンター担当 当社取締役常務執行役員 当社代表取締役社長(現任)	(注)3	8
取締役 専務執行役員	営業総括担当	成松 和彦	昭和23年 2月15日生	昭和62年2月 平成11年1月 平成16年3月 平成16年4月 平成17年1月 平成22年3月 平成23年1月 平成24年3月	当社入社 当社第1国際本部長 当社取締役 当社取締役執行役員 当社営業部門担当 当社取締役常務執行役員 当社営業総括担当(現任) 当社取締役専務執行役員(現任)	(注)3	4
取締役 執行役員	コーポレート センター、社長室、 グループ監査室担当	加藤 武	昭和31年 3月10日生	昭和56年4月 平成18年1月 平成20年1月 平成21年1月 平成23年1月 平成23年3月 平成24年1月 平成25年1月	当社入社 当社第10営業本部長 当社執行役員 当社第6営業部門長 当社コーポレートセンター担当 兼営業総括担当役員補佐 当社取締役執行役員(現任) 当社コーポレートセンター担当 兼グループ監査室担当 当社コーポレートセンター 兼社長室兼総合企画本部 兼グループ監査室担当 当社コーポレートセンター 兼社長室兼グループ監査室担当(現任)	(注)3	5
取締役 執行役員	最高財務責任者 (CFO)	酒井 吉廣	昭和36年 11月5日生	昭和60年4月 平成12年1月 平成17年5月 平成19年7月 平成21年4月 平成22年9月 平成23年5月 平成25年1月 平成25年3月	日本銀行入社 ノムラ・ホールディング・アメリカ Inc. 入社 アメリカ公共政策研究所主任研究員兼 務 野村ホールディングス株式会社 戦略 グループリーダー兼SOXグループリ ーダー 日本政策投資銀行(現 株式会社日本政 策投資銀行) 参事役 株式会社日本政策投資銀行 参事役、 シニア・エコノミスト マイクロファイナンス・インターナシ ョナル・コーポレーション 代表取締役副社長 清華大学(中国)米中センター 高級研究員(現任) 当社顧問 当社取締役執行役員(現任) 当社最高財務責任者(CFO)(現任)	(注)3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役 取締役会議長		長沼 孝一郎	昭和20年 1月4日生	昭和56年8月 平成10年3月 平成12年3月 平成13年9月 平成16年1月 平成22年3月 平成23年1月 平成23年3月 平成24年3月 平成25年3月	当社入社 当社取締役 当社常務取締役 当社代表取締役社長 WPP Group plc (現 WPP plc) Director (現任) 当社代表取締役会長 当社取締役会長 当社取締役・取締役会議長 当社代表取締役・取締役会議長 当社取締役・取締役会議長(現任)	(注)3	68
取締役 相談役		清水 與二	昭和21年 8月24日生	昭和45年4月 平成16年4月 平成17年3月 平成18年1月 平成20年3月 平成22年1月 平成22年3月 平成25年3月	当社入社 当社執行役員 当社取締役執行役員 当社営業部門担当 当社取締役常務執行役員 当社営業部門担当兼営業総括 当社代表取締役社長 当社取締役相談役(現任)	(注)3	10
取締役		Stuart Neish [スチュアート ・ニーシュ]	昭和38年 9月21日生	昭和63年3月 平成3年6月 平成6年1月 平成17年10月 平成23年3月	スコットランド勅許会計士登録 英国Deloitte シニア監査マネージャー WPP Group plc (現 WPP plc)入社 関連会社・ジョイントベンチャー 財務責任者 WPP Group (Asia Pacific) Ltd. Director(現任) 当社取締役(現任)	(注)3	—
取締役		大林 宏	昭和22年 6月17日生	昭和47年4月 昭和55年4月 平成8年4月 平成14年1月 平成18年6月 平成20年7月 平成22年6月 平成22年12月 平成23年3月 平成23年4月 平成24年3月	東京地方検察庁検事 在中華人民共和国 日本国大使館一等書記官 東京高等検察庁検事 法務省大臣官房長 法務事務次官 東京高等検察庁検事長 検事総長 検事総長退官 弁護士登録(東京弁護士会) (現在に至る) 大和証券株式会社 社外監査役(現任) 当社取締役(現任)	(注)3	—
取締役		木戸 英晶	昭和25年 4月23日生	昭和49年4月 平成11年4月 平成13年6月 平成15年3月 平成20年6月 平成21年4月 平成23年6月 平成24年3月	伊藤忠商事株式会社入社 伊藤忠インターナショナル会社 Vice President & General Manager (米国) 株式会社スター・チャンネル 代表取締役副社長 株式会社ジャパン・エンターテイン メント・ネットワーク 代表取締役社長 J S A T株式会社 執行役員専務 兼宇宙通信株式会社 取締役 スカパー J S A T株式会社 執行役員専務 兼株式会社スカパー・エンターテイ メント 代表取締役社長 株式会社 I M A G I C Aティーヴィ 取締役会長(現任) 当社取締役(現任)	(注)3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役		梅田 望夫	昭和35年 8月30日生	昭和63年1月 平成6年10月 平成9年5月 平成12年8月 平成22年6月 平成24年3月	アーサー・D・リトル（ジャパン）株式会社入社 アーサー・D・リトル米国本社 ディレクター ミューズ・アソシエイツLLC創業 同社社長（現任） パシフィカファンド創設 同社マネージング・ディレクター（現任） 株式会社リコー 社外取締役（現任） 当社取締役（現任）	(注) 3	—
監査役 (常勤)		境 芳郎	昭和30年 8月29日生	昭和58年10月 平成2年6月 平成7年6月 平成9年6月 平成11年1月 平成12年3月	第一企画(株)入社 同社取締役 同社監査役 同社取締役 当社取締役 当社監査役（常勤）（現任）	(注) 4	352
監査役 (常勤)		市川 亮	昭和31年 3月1日生	昭和53年4月 平成14年4月 平成16年7月 平成17年7月 平成18年7月 平成20年3月 平成21年3月	農林中央金庫入庫 同 札幌支店副支店長 同 管財部副部長 同 J Aバンク事業商品部副部長 同 大阪支店副支店長 同 本店業務部長 当社監査役（常勤）（現任）	(注) 4	—
監査役 (常勤)		太田 浩司	昭和22年 7月9日生	昭和46年4月 平成10年6月 平成17年4月 平成20年4月 平成22年4月 平成23年3月	大和証券株式会社（現 株式会社大和証券グループ本社）入社 大和証券株式会社（現 株式会社大和証券グループ本社）取締役 大和証券エスエムビーシー株式会社 代表取締役専務取締役 兼株式会社大和証券グループ本社 取締役専務執行役 株式会社大和総研 代表取締役社長 兼株式会社大和証券グループ本社 執行役副社長 株式会社大和総研ホールディングス 特別顧問 当社監査役（常勤）（現任）	(注) 4	—
監査役		吉成 昌之	昭和22年 10月6日生	昭和50年4月 平成9年4月 平成13年4月 平成19年4月 平成23年3月	弁護士登録（第二東京弁護士会） 第二東京弁護士会副会長 日本弁護士連合会常務理事 第二東京弁護士会会長 日本弁護士連合会副会長 当社監査役（現任）	(注) 4	—
計							448

- (注) 1 取締役大林 宏氏、取締役木戸英晶氏および取締役梅田望夫氏は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。
- 2 監査役市川 亮氏、監査役太田浩司氏および監査役吉成昌之氏は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
- 3 取締役の任期は、平成24年12月期に係る定時株主総会で選任された時から平成26年3月28日以前に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時までであります。
- 4 監査役の任期は、平成22年12月期に係る定時株主総会で選任された時から平成27年3月30日以前に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時までであります。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

① 企業統治の体制

当社は、意思決定の効率化と業務執行の監督機能の強化を図ることは企業価値向上のための重要な要素のひとつであると認識しており、企業価値向上の観点から、コーポレート・ガバナンスに関する施策を以下のとおり実施しております。

イ 会社の機関の内容

本有価証券報告書提出日（平成25年3月29日）現在における取締役は10名であり、代表取締役を1名選定しております。また、代表取締役以外の業務執行取締役は3名、社外取締役は3名であります。

当社は監査役設置会社制度を採用しており、社外取締役、監査役および内部監査担当取締役が相互に連携を図ることにより、業務執行の監督・監査機能の強化に取り組んでおります。

業務執行につきましては、執行役員制度を導入し、業務執行取締役および従業員から選任された執行役員が、業務執行組織を指揮しております。また、執行役員の合意形成等を目的として取締役社長を議長とする執行役員会を設置し、取締役会の委任を受けた事項その他一定の事項について決定しております。執行役員会の審議の概要等は取締役会に報告しているほか、従業員と問題意識を共有するために、その議事抄録を社内電子掲示板で公開しております。

ロ リスク管理体制の整備の状況

当社は、取締役社長を委員長とするリスクマネジメント委員会が統括して内部統制システムの整備に取り組むこととしており、リスク管理体制は「損失の危険の管理に関する規程その他の体制」として、会社法上の内部統制システムの一環に組み込まれております。

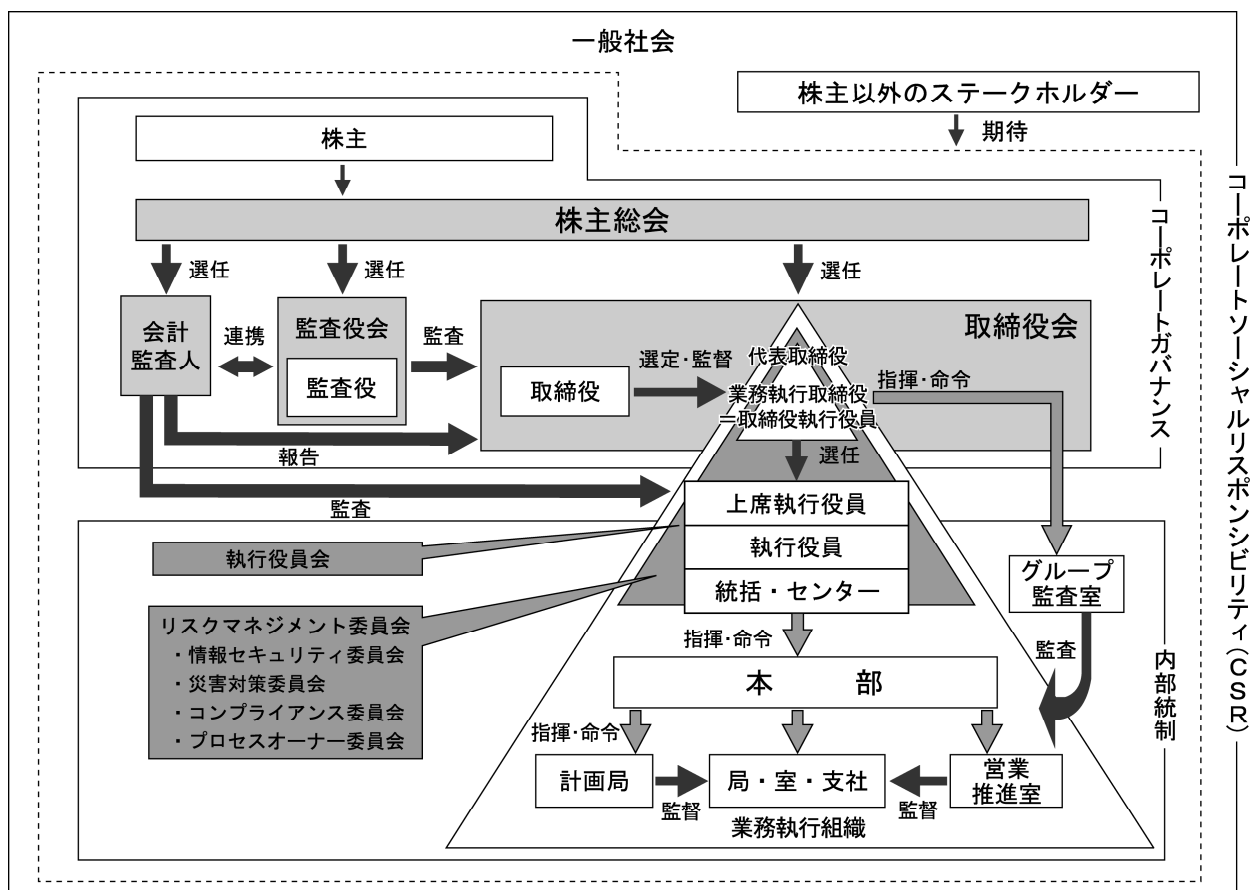
リスクマネジメント委員会の統括のもとに、専門委員会としてコンプライアンス委員会、情報セキュリティ委員会、災害対策委員会およびプロセスオーナー委員会を設置し、各専門分野のリスクマネジメントを行わせ、専門委員会が担当する分野以外のリスクマネジメントはリスクマネジメント委員会が直轄します。

コンプライアンス委員会は法令遵守体制の整備、内部通報制度の運営等にあたっており、情報セキュリティ委員会は個人情報を含む各種の業務情報の安全管理を主導しております。災害対策委員会は、地震等の災害に際しての事業継続力を確保するための諸施策に取り組んでおり、プロセスオーナー委員会は、金融商品取引法に基づく財務報告の信頼性にかかる内部統制体制の維持運用を任務としております。

ハ 内部統制システムの整備の状況

前記のとおり、会社法の定める内部統制システムの整備はリスクマネジメント委員会が統括し、同委員会の下部組織として設置するプロセスオーナー委員会が、金融商品取引法に基づく財務報告の信頼性にかかる内部統制の整備・維持運用を推進しております。

業務執行・監視および内部統制、リスク管理体制の仕組みは、下記模式図のとおりです。



(注) グループ監査室は業務執行組織全般に対する、営業推進室は営業統括センター所属の組織に対する、計画局は媒体仕入・スタッフ系センター所属の組織に対する、それぞれ内部統制監視を担当する部署であります。

② 内部監査および監査役監査

イ 内部監査および監査役監査の組織、人員および手続き

内部監査はグループ監査室が担当しており、当事業年度末現在の人員は8名であります。グループ監査室は、監査実施の概況等について取締役会に報告するほか、リスク管理体制の有効性をモニタリングし、リスクマネジメント委員会に報告しております。

監査役監査につきましては、監査役監査の充実を図るため、法定の人数を超えて監査役総員を4名以上、社外監査役を3名以上、常勤監査役3名以上をそれぞれ維持しております。本有価証券報告書提出日（平成25年3月29日）現在における監査役の員数は4名であり、社外監査役は3名、常勤監査役は3名であります。

各監査役は、監査役会が定めた監査役監査の基準に準拠し、監査の方針、職務の分担等に従い、取締役会その他重要な会議に出席し、取締役および従業員からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求めています。取締役および従業員は、監査役に対し、当社グループに著しい損害を及ぼすおそれのある事実、取締役の職務の執行に関する不正行為、法令・定款に違反する重大な事実、グループヘルプライン制度に基づき通報された事実等を速やかに報告することとしています。

監査役の職務を補助する従業員は1名であります。取締役からの独立性を強化するため、当該従業員の業績考課、人事異動、賞罰の決定については事前に監査役の同意を得ることとしています。

ロ 内部監査、監査役監査、会計監査の相互の連携状況

グループ監査室は、監査報告書を社長のほか監査役に対しても提出し、グループ監査室員が監査役会に出席し、監査役監査との連携を図っております。

監査役監査は、監査役相互の連携をとるために正式な監査役会以外にも、適宜、常勤・非常勤監査役の連絡会を実施し、意見交換を行っております。また、新日本有限責任監査法人との連携を図るため、監査役会に会計監査人の出席を要請し、会計監査結果（四半期レビュー）や会計監査人の監査体制等について説明、報告を受けております。

③ 社外取締役および社外監査役

イ 社外取締役および社外監査役の体制、機能および役割

前記のとおり、本有価証券報告書提出日（平成25年3月29日）現在の社外取締役は3名、社外監査役は3名であります。

社外取締役は、各氏の豊富な経験と専門分野に関する幅広い知見に基づき、取締役会等を通じて、外部の立場から当社の経営について大局的な視点から適宜助言、発言を行い、重要事項の決定に関与することによりその妥当性を確保し、業務執行の監督を行っております。

社外監査役は、より中立的な立場から客観的に監査意見を表明するため、取締役会その他重要な会議に出席し、取締役および従業員からその職務の執行状況について報告を受け、必要に応じて説明を求めること等を通じて、取締役の職務執行の監査を行っております。

なお、当社は、社外取締役および社外監査役が期待される役割を十分に発揮できるようにするため、各社外取締役および各社外監査役との間で、会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する旨の契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、1,000万円または法令が規定する額のいずれか高い額としております。

ロ 社外取締役および社外監査役との人的関係、資金的関係または取引関係その他の利害関係

社外取締役である大林宏氏および同氏が所属する法律事務所と当社との間に、顧問契約または個別の法律事務の委任等の取引関係等はありません。

社外取締役である木戸英晶氏は、株式会社IMAGICAティーヴィの取締役会長を兼務しており、当社は、同社との間で動画配信に係る業務の委託等の取引関係がありますが、同社との取引は、当社の売上高（平成24年12月期）および同社の直近事業年度（平成24年3月期）の売上高の0.1%未満であり、その規模は極めて僅少であります。

社外取締役である梅田望夫氏は、ミューズ・アソシエイツLLCの社長、パシフィカファンドのマネージング・ディレクター、株式会社ミューズアソシエイツの代表取締役社長であります。当社との間に人的関係、資金的関係又は取引関係その他の利害関係はありません。

社外監査役である太田浩司氏は、過去において当社の取引先である株式会社大和証券グループ本社およびそのグループ会社の業務執行者でありましたが、同社および同社のグループ会社との取引は、当社の売上高（平成24年12月期）の1%未満であります。また、大和証券株式会社は当社が証券を発行する際の幹事会社として起用する等の取引関係にありますが、当社との取引は同社の経営に影響を及ぼすものではありません。

社外監査役である市川亮氏は、過去において当社の取引先である農林中央金庫の業務執行者でありましたが、同金庫との取引は、当社の売上高（平成24年12月期）の1%未満であります。また、当事業年度末現在で同金庫からの借入金はありません。

社外監査役である吉成昌之氏および同氏が所属する法律事務所と当社との間に、顧問契約または個別の法律事務の委任等の取引関係等はありません。

ハ 社外取締役および社外監査役を選任するための提出会社からの独立性に関する基準又は方針の内容

社外取締役または社外監査役を選任するための当社からの独立性に関する基準または方針は特に設けておりませんが、選任にあたっては、株式会社東京証券取引所の定める独立性の基準を参考にして、一般株主と利益相反が生じるおそれのないことを基本的な考え方としており、本有価証券報告書提出日（平成25年3月29日）現在、社外取締役および社外監査役の全員を、株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員として届け出ております。

④ 役員の報酬等

イ 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数
		定例報酬	賞与	ストック・ オプション	
取締役 (社外取締役を除く。)	294	288	—	5	11名
監査役 (社外監査役を除く。)	17	17	—	—	1名
社外役員	61	61	—	—	6名

(注) 1 当事業年度に係る賞与の支給はありません。

2 上記には、平成24年3月29日に開催した第57回定時株主総会終結の時をもって退任した取締役2名と、その取締役に対する報酬等が含まれております。なお、当事業年度末の取締役13名のうち1名は無報酬であり、上記の記載対象には含めておりません。

ロ 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

ハ 役員の報酬等の額の決定に関する方針の概要

役員報酬につきましては、役員をその機能により分類のうえ、業務を執行する取締役に對しては「固定報酬」および「業績連動報酬」を支給することとし、社外取締役など業務を執行しない取締役および監査役に対しては「固定報酬」のみを支給することとします。

業務を執行する取締役に支給する「業績連動報酬」は、短期の業績に連動する「賞与」と長期の業績に連動する「株式報酬型ストック・オプション」からなるものとし、長短のインセンティブ効果を図ります。当社は使用人兼務取締役という考え方はとっておりませんので、取締役に使用人給与を別に支給することはありません。役員退任慰労金制度は、監査役につきましては平成19年3月28日開催の第52回定時株主総会終結の時をもって、取締役に對しましては平成23年3月30日開催の第56回定時株主総会終結の時をもって、それぞれ廃止しております。

なお、具体的な報酬水準の額につきましては、売上規模において同程度の非製造業企業に同業他社を加えた企業群のデータを参考として決定することとします。

「固定報酬」、「賞与」および「株式報酬型ストック・オプション」の概要は次のとおりであります。

i 固定報酬

取締役に対する固定報酬は、平成23年3月30日開催の第56回定時株主総会で、年額5億円以内で支給することを決議しております。

取締役に対する固定報酬は、定例の「基本報酬」および役員持株会を通じての「自社株取得資金」からなるものとします。ただし、「自社株取得資金」につきましては、常勤の取締役のみに支給するものとしております。

監査役に対する固定報酬は定例の基本報酬であり、平成10年11月20日開催の臨時株主総会で、月額1,000万円以内で支給することを決議しております。

ii 賞与

平成24年3月29日開催の第57回定時株主総会で、上記iの固定報酬とは別に、取締役（社外取締役を除く。）に対し、各事業年度の連結営業利益の額に応じて、年額1億5千万円以内で賞与を支給することを決議しております。この賞与は、各事業年度の連結営業利益が目標額に達しない場合には支給しないものとし、目標額に達した場合は、達成度合に応じて、固定報酬である基本報酬（ただし、役員持株会を通じての自社株取得資金を除く。）に20%から40%を乗じた額を支給するものであります。

iii 株式報酬型ストック・オプション

平成24年3月29日開催の第57回定時株主総会で、上記iの固定報酬および上記iiの賞与とは別に、取締役（社外取締役を除く。）に対し、年額1億円以内で、新株予約権を発行することを決議しております。この新株予約権の額は、固定報酬である基本報酬（ただし、役員持株会を通じての自社株取得資金を除く。）の約30%に相当します。

新株予約権の権利行使価格は1株当たり1円に設定します。新株予約権者である取締役が行世できる新株予約権の数は、新株予約権の割当日以後権利行使期間開始日までの株主総利回り（権利行使期間開始日の属する月の直前3か月の各日（取引が成立しない日を除く。）の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値から、新株予約権の割当日の属する月の直前3か月の各日（取引が成立しない日を除く。）の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値を控除し、新株予約権の割当日以後権利行使期間開始日までの間における当社普通株式1株当たりの配当金の総額を加算した金額を、新株予約権の割当日の属する月の直前3か月の各日（取引が成立しない日を除く。）の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値で除して算定した値）の結果に応じて、割当てを受けた新株予約権の数の0%から100%の範囲で段階的に変動するものとします。

⑤ 株式の保有状況

イ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数	141銘柄
貸借対照表計上額の合計額	12,909百万円

ロ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額および保有目的

(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
アサヒグループホールディングス(株)	1,000,000	1,690	取引関係の維持・強化のため
(株)東京放送ホールディングス	982,900	973	取引関係の維持・強化のため
松竹(株)	1,100,000	804	取引関係の維持・強化のため
日清食品ホールディングス(株)	220,000	663	取引関係の維持・強化のため
(株)資生堂	429,813	608	取引関係の維持・強化のため
三菱商事(株)	310,000	482	取引関係の維持・強化のため
(株)歌舞伎座	100,000	362	取引関係の維持・強化のため
(株)不二家	2,000,000	326	取引関係の維持・強化のため
(株)バンダイナムコホールディングス	296,520	324	取引関係の維持・強化のため
コナミ(株)	127,798	294	取引関係の維持・強化のため
(株)ニコン	167,810	287	取引関係の維持・強化のため
東宝(株)	193,250	265	取引関係の維持・強化のため
久光製薬(株)	77,772	253	取引関係の維持・強化のため
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	620,411	202	取引関係の維持・強化のため
エスビー食品(株)	294,800	201	取引関係の維持・強化のため
ロート製薬(株)	200,000	197	取引関係の維持・強化のため
エステー(株)	196,350	190	取引関係の維持・強化のため
養命酒製造(株)	204,000	147	取引関係の維持・強化のため
(株)オリエントコーポレーション	2,051,500	143	取引関係の維持・強化のため
日本ハム(株)	137,500	131	取引関係の維持・強化のため
バイオニア(株)	373,800	129	取引関係の維持・強化のため
(株)ヤクルト本社	50,000	121	取引関係の維持・強化のため
(株)WOWOW	600	115	取引関係の維持・強化のため
(株)角川グループホールディングス	38,000	101	取引関係の維持・強化のため
三菱電機(株)	130,000	95	取引関係の維持・強化のため
(株)永谷園	105,000	91	取引関係の維持・強化のため
(株)テレビ東京ホールディングス	75,000	76	取引関係の維持・強化のため
(株)大塚商会	14,303	75	取引関係の維持・強化のため
キリンホールディングス(株)	78,000	73	取引関係の維持・強化のため
花王(株)	34,650	72	取引関係の維持・強化のため

(注) (株)歌舞伎座以下の24銘柄は、貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下ですが、上位30銘柄について記載しております。

(当事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
アサヒグループホールディングス(株)	1,000,000	1,837	取引関係の維持・強化のため
松竹(株)	1,100,000	977	取引関係の維持・強化のため
(株)東京放送ホールディングス	982,900	888	取引関係の維持・強化のため
日清食品ホールディングス(株)	220,000	720	取引関係の維持・強化のため
(株)資生堂	435,556	530	取引関係の維持・強化のため
三菱商事(株)	310,000	510	取引関係の維持・強化のため
(株)歌舞伎座	100,000	485	取引関係の維持・強化のため
(株)ニコン	167,810	423	取引関係の維持・強化のため
(株)ヤクルト本社	109,900	414	取引関係の維持・強化のため
(株)不二家	2,000,000	388	取引関係の維持・強化のため
久光製薬(株)	80,286	344	取引関係の維持・強化のため
(株)バンダイナムコホールディングス	296,520	331	取引関係の維持・強化のため
東宝(株)	193,250	293	取引関係の維持・強化のため
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	620,411	286	取引関係の維持・強化のため
コナミ(株)	137,084	264	取引関係の維持・強化のため
エスビー食品(株)	294,800	205	取引関係の維持・強化のため
ロート製薬(株)	200,000	201	取引関係の維持・強化のため
日本ハム(株)	137,500	164	取引関係の維持・強化のため
養命酒製造(株)	204,000	148	取引関係の維持・強化のため
富士重工業(株)	102,000	109	取引関係の維持・強化のため
(株)モブキャスト	50,000	108	取引関係の維持・強化のため
(株)大塚商会	15,560	101	取引関係の維持・強化のため
三菱電機(株)	130,000	95	取引関係の維持・強化のため
(株)角川グループホールディングス	38,000	87	取引関係の維持・強化のため
(株)みずほフィナンシャルグループ	524,032	82	取引関係の維持・強化のため
パイオニア(株)	373,800	79	取引関係の維持・強化のため
キリンホールディングス(株)	78,000	78	取引関係の維持・強化のため
花王(株)	34,650	77	取引関係の維持・強化のため
ダイドードリンコ(株)	20,000	70	取引関係の維持・強化のため
(株)フジ・メディア・ホールディングス	536	69	取引関係の維持・強化のため

(注) 久光製薬(株)以下の20銘柄は、貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下ですが、上位30銘柄について記載しております。

ハ 保有目的が純投資目的である投資株式

該当事項はありません。

⑥ 会計監査の状況

当社は会社法および金融商品取引法に基づく会計監査について新日本有限責任監査法人と監査契約を締結しており、監査が実施されております。なお、同監査法人および当社監査に従事する同監査法人の業務執行社員と当社の間には、特別な利害関係はありません。

当事業年度において業務を執行した公認会計士の氏名、所属する監査法人名および監査業務にかかる補助者の構成は、次のとおりであります。

公認会計士の氏名等		所属する監査法人名
指定有限責任社員 業務執行社員	坂 本 満 夫	新日本有限責任監査法人
指定有限責任社員 業務執行社員	林 一 樹	

監査業務にかかる補助者の構成 公認会計士14名、その他13名

⑦ 取締役の定数

取締役の員数は、定款で3名以上と定めており、上限の定めはありません。なお、取締役の任期は1年として株主の信任を問う機会を増やしております。

⑧ 取締役選任の決議要件の変更

当社は定款で、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定めております。これは定足数を緩和することにより株主総会の円滑な運営を行うためであります。また、取締役の選任決議は累積投票によらないものとする旨を定めております。

⑨ 取締役会で決議できる株主総会決議事項

当社は、剰余金の配当、自己株式の取得等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める旨を定款に定めております。剰余金の配当等を取締役会決議事項とする理由は、機動的な株主還元を図るためであり、株主総会決議事項としない理由は、取締役会決議によるものと株主提案によるものが重複して過剰な株主還元が行われたり、手続上の混乱が生じたりすることを避けるためであります。

⑩ 株主総会の特別決議要件の変更

当社は定款で、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定めております。これは定足数を緩和することにより株主総会の円滑な運営を行うためであります。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区 分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)
提出会社	110	—	112	15
連結子会社	—	—	—	—
合計	110	—	112	15

② 【その他重要な報酬の内容】

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

一部の在外連結子会社は、提出会社の監査公認会計士等である新日本有限責任監査法人と同一のネットワークに属する監査事務所等に対して、監査証明業務に相当すると認められる業務に対する報酬として2百万円を支払っております。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

当社および一部の在外連結子会社は、提出会社の監査公認会計士等である新日本有限責任監査法人と同一のネットワークに属する監査事務所等に対して、監査証明業務に相当すると認められる業務に対する報酬として8百万円を支払っております。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

当社が監査公認会計士等に報酬を支払っている非監査業務の内容は、次期基幹系システム構想立案にかかわるプロジェクト評価に関する業務であります。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社は、監査公認会計士等に対する監査報酬を決定するにあたり、監査公認会計士等により提示される監査計画の内容をもとに監査工数等の妥当性を勘案し、その内容について協議した上で、会社法第399条に基づき監査役会の同意を得て決定することとしております。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成24年1月1日から平成24年12月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成24年1月1日から平成24年12月31日まで）の財務諸表について、新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取り組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取り組みを行っております。

具体的には、会計基準等の内容やその改正内容等を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。また、監査法人や専門的情報を有する団体等が主催するセミナーへの参加や専門書等の購読により、必要な知識の習得に努めております。

1 【連結財務諸表等】
 (1) 【連結財務諸表】
 ① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※3 22,641	※3 24,489
受取手形及び売掛金	※5 88,955	※5 84,128
有価証券	6,334	6,471
たな卸資産	※1 6,840	※1 7,032
繰延税金資産	1,133	534
その他	1,619	2,363
貸倒引当金	△310	△257
流動資産合計	127,213	124,762
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	4,503	4,737
減価償却累計額	△2,670	△2,802
建物及び構築物（純額）	1,832	1,935
土地	1,259	1,248
その他	3,192	3,383
減価償却累計額	△1,973	△2,270
その他（純額）	1,219	1,112
有形固定資産合計	4,311	4,296
無形固定資産		
ソフトウェア	2,328	2,241
その他	108	101
無形固定資産合計	2,437	2,342
投資その他の資産		
投資有価証券	※2, ※3 42,133	※2, ※3 55,312
長期貸付金	238	238
繰延税金資産	412	259
その他	※2 9,384	※2 9,378
貸倒引当金	△1,943	△1,426
投資その他の資産合計	50,225	63,761
固定資産合計	56,974	70,400
資産合計	184,188	195,163

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※5 71,382	※5 67,130
短期借入金	94	59
1年内返済予定の長期借入金	※6 272	※6 246
未払法人税等	740	337
賞与引当金	763	359
役員賞与引当金	12	12
返品調整引当金	600	839
その他	8,243	6,563
流動負債合計	82,110	75,548
固定負債		
長期借入金	※6 483	※6 246
繰延税金負債	1,581	6,584
退職給付引当金	1,377	1,275
役員退職慰労引当金	394	430
債務保証損失引当金	34	65
その他	1,405	1,453
固定負債合計	5,277	10,055
負債合計	87,388	85,603
純資産の部		
株主資本		
資本金	37,581	37,581
資本剰余金	20,023	13,245
利益剰余金	43,557	45,428
自己株式	△7,632	△746
株主資本合計	93,530	95,508
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	4,063	13,553
繰延ヘッジ損益	△76	△2
為替換算調整勘定	△1,681	△539
その他の包括利益累計額合計	2,304	13,012
新株予約権	—	5
少数株主持分	965	1,032
純資産合計	96,800	109,559
負債純資産合計	184,188	195,163

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】
【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年 1 月 1 日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年 1 月 1 日 至 平成24年12月31日)
売上高	347,111	350,822
売上原価	※1 301,275	※1 304,653
売上総利益	45,836	46,169
販売費及び一般管理費		
給料及び手当	21,772	22,615
賞与引当金繰入額	807	312
退職給付費用	2,103	2,106
役員退職慰労引当金繰入額	58	49
役員賞与引当金繰入額	12	12
福利厚生費	3,120	3,255
賃借料	3,865	3,913
貸倒引当金繰入額	53	345
減価償却費	420	540
その他	9,768	9,843
販売費及び一般管理費合計	※2 41,983	※2 42,993
営業利益	3,852	3,175
営業外収益		
受取利息	222	248
受取配当金	1,194	1,383
持分法による投資利益	184	12
生命保険配当金	62	68
不動産賃貸料	72	49
その他	289	598
営業外収益合計	2,025	2,362
営業外費用		
支払利息	26	19
貸倒引当金繰入額	—	45
不動産賃貸費用	47	40
保険解約損	10	24
為替差損	93	60
その他	73	32
営業外費用合計	250	224
経常利益	5,627	5,314

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
特別利益		
固定資産売却益	※3 15	※3 7
投資有価証券売却益	1,862	150
貸倒引当金戻入額	23	61
その他	122	15
特別利益合計	2,023	234
特別損失		
固定資産売却損	※4 0	※4 20
固定資産除却損	※5 14	※5 16
減損損失	※6 255	※6 69
投資有価証券売却損	78	214
投資有価証券評価損	※7 1,278	※7 28
出資金評価損	115	173
特別退職金	※8 7	※8 824
和解金	537	—
その他	335	132
特別損失合計	2,622	1,479
税金等調整前当期純利益	5,028	4,069
法人税、住民税及び事業税	1,072	753
法人税等調整額	1,651	511
法人税等合計	2,724	1,264
少数株主損益調整前当期純利益	2,303	2,804
少数株主利益	10	23
当期純利益	2,293	2,781

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	2,303	2,804
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△3,636	9,492
繰延ヘッジ損益	17	74
為替換算調整勘定	△451	1,188
持分法適用会社に対する持分相当額	△27	—
その他の包括利益合計	△4,098	※1 10,755
包括利益	△1,794	13,559
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△1,777	13,488
少数株主に係る包括利益	△17	70

③【連結株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
株主資本		
資本金		
当期首残高	37,581	37,581
当期末残高	37,581	37,581
資本剰余金		
当期首残高	20,024	20,023
当期変動額		
自己株式の処分	△0	△0
自己株式の消却	—	△6,777
当期変動額合計	△0	△6,777
当期末残高	20,023	13,245
利益剰余金		
当期首残高	45,906	43,557
当期変動額		
剰余金の配当	△4,641	△851
当期純利益	2,293	2,781
連結範囲の変動	—	△57
その他	△1	△1
当期変動額合計	△2,349	1,870
当期末残高	43,557	45,428
自己株式		
当期首残高	△7,718	△7,632
当期変動額		
自己株式の取得	△2	△4
自己株式の処分	88	112
自己株式の消却	—	6,777
当期変動額合計	85	6,885
当期末残高	△7,632	△746
株主資本合計		
当期首残高	95,793	93,530
当期変動額		
剰余金の配当	△4,641	△851
当期純利益	2,293	2,781
連結範囲の変動	—	△57
自己株式の取得	△2	△4
自己株式の処分	88	112
自己株式の消却	—	—
その他	△1	△1
当期変動額合計	△2,263	1,978
当期末残高	93,530	95,508

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金		
当期首残高	7,727	4,063
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△3,663	9,490
当期変動額合計	△3,663	9,490
当期末残高	4,063	13,553
繰延ヘッジ損益		
当期首残高	△94	△76
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	17	74
当期変動額合計	17	74
当期末残高	△76	△2
為替換算調整勘定		
当期首残高	△1,256	△1,681
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△424	1,142
当期変動額合計	△424	1,142
当期末残高	△1,681	△539
その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	6,375	2,304
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△4,070	10,707
当期変動額合計	△4,070	10,707
当期末残高	2,304	13,012
新株予約権		
当期首残高	—	—
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	—	5
当期変動額合計	—	5
当期末残高	—	5
少数株主持分		
当期首残高	999	965
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△34	67
当期変動額合計	△34	67
当期末残高	965	1,032

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
純資産合計		
当期首残高	103,168	96,800
当期変動額		
剰余金の配当	△4,641	△851
当期純利益	2,293	2,781
連結範囲の変動	—	△57
自己株式の取得	△2	△4
自己株式の処分	88	112
自己株式の消却	—	—
その他	△1	△1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△4,105	10,781
当期変動額合計	△6,368	12,759
当期末残高	96,800	109,559

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	5,028	4,069
減価償却費	※2 975	※2 1,341
投資有価証券評価損益 (△は益)	1,278	28
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	47	1
賞与引当金の増減額 (△は減少)	390	△433
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	12	0
返品調整引当金の増減額 (△は減少)	91	239
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	35	△126
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△605	35
受取利息及び受取配当金	△1,416	△1,632
支払利息	26	19
為替差損益 (△は益)	0	△15
持分法による投資損益 (△は益)	△184	△12
投資有価証券売却損益 (△は益)	△1,783	63
固定資産除売却損益 (△は益)	△0	29
売上債権の増減額 (△は増加)	3,535	4,757
たな卸資産の増減額 (△は増加)	1,318	△40
仕入債務の増減額 (△は減少)	△3,098	△5,303
未収入金の増減額 (△は増加)	624	△14
未払金の増減額 (△は減少)	490	△614
特別退職金	7	824
その他	1,140	△176
小計	7,912	3,040
利息及び配当金の受取額	1,759	1,619
利息の支払額	△27	△20
特別退職金の支払額	△7	△824
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	△680	△1,233
営業活動によるキャッシュ・フロー	8,957	2,581

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△3,280	△4,993
定期預金の払戻による収入	4,493	3,939
有価証券の売却による収入	253	55
有形固定資産の取得による支出	△351	△240
有形固定資産の売却による収入	26	25
無形固定資産の取得による支出	△1,570	△666
投資有価証券の取得による支出	△818	△459
投資有価証券の売却による収入	4,831	1,100
貸付けによる支出	△159	△176
貸付金の回収による収入	204	148
保険掛金の純増減額（△は支出）	48	73
その他	101	△525
投資活動によるキャッシュ・フロー	3,779	△1,719
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（△は減少）	10	△34
長期借入金の返済による支出	△275	△275
自己株式の純増減額（△は増加）	85	107
配当金の支払額	△4,599	△844
少数株主への配当金の支払額	△13	△13
その他	△150	△124
財務活動によるキャッシュ・フロー	△4,944	△1,184
現金及び現金同等物に係る換算差額	△449	1,104
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	7,342	782
現金及び現金同等物の期首残高	19,127	26,519
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	—	34
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額	—	△71
連結子会社と非連結子会社の合併に伴う現金及び現金同等物の増加額	48	—
現金及び現金同等物の期末残高	※1 26,519	※1 27,264

【継続企業の前提に関する事項】

該当事項はありません。

【連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項】

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数

24社

主要な連結子会社の名称は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため、ここへの記載は省略しております。

なお、前連結会計年度において非連結子会社でありました(株)ADKデジタル・コミュニケーションズは、重要性が増したことに伴い、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

また、連結子会社でありました(株)ネオ書房は、清算手続き中で重要性が乏しいため、当連結会計年度末より連結の範囲から除外しております。

(2) 主要な非連結子会社の名称

(株)バイオメディスインターナショナル

ASATSU-DK VIETNAM Inc.

連結の範囲から除いた理由

非連結子会社23社は、いずれも小規模会社であり、合計の総資産、売上高、当期純損益及び利益剰余金（持分に見合う額）等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した関連会社の数

1社

主要な会社等の名称

広東広旭広告有限公司

(2) 持分法を適用しない非連結子会社及び関連会社のうち主要な会社等の名称

(株)バイオメディスインターナショナル

(株)DAサーチ&リンク

持分法を適用しない理由

持分法非適用会社は、それぞれ当期純損益及び利益剰余金等に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、持分法の適用の範囲から除外しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、(株)エイケンの決算日は9月30日であります。

連結財務諸表の作成にあたっては、同日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4 会計処理基準に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は、全部純資産直入法により処理し、売却原価は、総平均法により算定）

時価のないもの

総平均法による原価法

② たな卸資産

通常の販売目的で保有するたな卸資産

主として個別法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）

③ デリバティブ

時価法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除く）

建物(建物附属設備は除く)

i 平成10年3月31日以前に取得したもの……旧定率法

ii 平成10年4月1日以降に取得したもの……旧定額法

iii 平成19年4月1日以降に取得したもの……定額法

建物以外

i 平成19年3月31日以前に取得したもの……旧定率法

ii 平成19年4月1日以降に取得したもの……定率法

なお、在外連結子会社においては、定額法を採用しております。

また、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 3～65年

② 無形固定資産（リース資産を除く）……定額法

なお、ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（3～5年）に基づく定額法によっております。

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

……リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

なお、リース取引開始日が平成20年12月31日以前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、当社および国内連結子会社は、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

在外連結子会社においては、主として特定の債権について、その回収可能性を勘案した所要見積額を計上しております。

② 賞与引当金

当社および連結子会社は、従業員に対する賞与の支出に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

③ 役員賞与引当金

当社および一部の国内連結子会社は、取締役に対する賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

④ 返品調整引当金

返品調整引当金には、返品調整引当金と返品債権特別勘定を含んでおります。

i 返品調整引当金

国内連結子会社1社は、出版物（主として単行本）の返品による損失に備えるため、一定期間の返品実績率に基づいて算出した返品損失見込額を計上しております。

ii 返品債権特別勘定

国内連結子会社1社は、出版物（雑誌）の売れ残りによる損失に備えるため、一定期間の返品実績率に基づいて算出した返品損失見込額を計上しております。

⑤ 退職給付引当金

退職給付規程を定める当社および連結子会社は、従業員の退職給付に備えるため、期末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。

なお、数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（13年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日連結会計年度から費用処理することとし、過去勤務債務は、発生時に全額費用処理しております。

⑥ 役員退職慰労引当金

一部の国内連結子会社は、取締役の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

⑦ 債務保証損失引当金

保証債務の履行による損失に備えるため、被保証先の財政状態等を勘案して、損失負担見込額を計上しております。

(4) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。

ただし、外貨建金銭債権債務をヘッジ対象とする為替予約については、振当処理によっております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段……為替予約取引

ヘッジ対象……外貨建金銭債権債務、外貨建予定取引

③ ヘッジ方針

主として外貨建金銭債権債務、外貨建予定取引に係る為替の変動リスクの軽減を目的として為替予約取引を行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

当社が利用している為替予約取引は、リスク管理方針に従い実需により実行しており、原則として為替予約の締結時にヘッジ対象と同一通貨建による同一金額で同一期日の為替予約を振当てているため、その後の為替相場の変動による相関関係は完全に確保されているので、決算日における有効性の評価を省略しております。

(5) のれんの償却方法及び償却期間

のれんは、個別案件ごとに投資効果が見込まれる期間を見積り、20年以内の合理的な年数で均等償却しております。なお、金額が僅少な場合には、発生時に一括償却しております。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、要求払預金および容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない、取得日から3ヵ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(7) 消費税等の会計処理

消費税および地方消費税については、税抜方式によっております。

【会計方針の変更】

該当事項はありません。

【未適用の会計基準等】

「退職給付に関する会計基準」（企業会計基準第26号 平成24年5月17日）および「退職給付に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日）

1 概要

数理計算上の差異および過去勤務費用は、連結貸借対照表の純資産の部において税効果を調整した上で認識し、積立状況を示す額を負債又は資産として計上する方法に改正されました。また、退職給付見込額の期間帰属方法について、期間定額基準のほか給付算定基準の適用が可能となったほか、割引率の算定方法が改正されました。

2 適用予定日

平成26年12月期の期末より適用予定です。ただし、退職給付債務および勤務費用の計算方法の改正については、平成27年12月期の期首より適用予定です。

3 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中です。

【表示方法の変更】

(連結貸借対照表関係)

前連結会計年度において、独立掲記していた流動負債の「繰延税金負債」については、金額の重要性が乏しいため、当連結会計年度より流動負債の「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において流動負債の「繰延税金負債」に表示していた0百万円は、「その他」として組み替えております。

(連結損益計算書関係)

- 1 前連結会計年度において、営業外費用の「その他」に含めていた「保険解約損」については、営業外費用の総額の100分の10を超えたため、当連結会計年度より独立掲記することとしております。また、前連結会計年度において、独立掲記していた「投資事業組合運用損」、「複合金融商品評価損」については、営業外費用の総額の100分の10以下となったため、当連結会計年度より営業外費用の「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、営業外費用の「投資事業組合運用損」、「複合金融商品評価損」、「その他」にそれぞれ表示していた14百万円、37百万円、31百万円は、「保険解約損」10百万円、「その他」73百万円として組み替えております。

- 2 前連結会計年度において、特別損失の「その他」に含めていた「減損損失」、「出資金評価損」については、重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記することとしております。また、前連結会計年度において、独立掲記していた特別損失の「貸倒引当金繰入額」については、重要性が低下したため、当連結会計年度より特別損失の「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、特別損失の「貸倒引当金繰入額」、「その他」にそれぞれ表示していた21百万円、684百万円は、「減損損失」255百万円、「出資金評価損」115百万円、「その他」335百万円として組み替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

前連結会計年度において、独立掲記していた営業活動によるキャッシュ・フローの「複合金融商品評価損益(△は益)」、「有価証券売却損益(△は益)」については、金額の重要性が低下したため、当連結会計年度より営業活動によるキャッシュ・フローの「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、営業活動によるキャッシュ・フローの「複合金融商品評価損益(△は益)」、「有価証券売却損益(△は益)」、「その他」にそれぞれ表示していた37百万円、1百万円、1,100百万円は、「その他」1,140百万円として組み替えております。

【会計上の見積りの変更】

当連結会計年度において、平成26年夏頃に本社を移転することを決定いたしました。この決定により、本社の不動産賃借契約に伴う原状回復義務として計上していた資産除去債務について、より精緻な見積りが可能になったため、見積額の変更を行っております。

これにより、従来に比べて、当連結会計年度の営業利益、経常利益および税金等調整前当期純利益は28百万円減少しております。

【追加情報】

当連結会計年度の期首以後に行われる会計上の変更及び誤謬の訂正より、「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準」（企業会計基準第24号 平成21年12月4日）および「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第24号 平成21年12月4日）を適用しております。

【注記事項】

(連結貸借対照表関係)

※1 たな卸資産

当社グループのたな卸資産は、主として広告物の制作等に係る進行中業務の費用や諸権利など、広告関連業務に付随する多種多様なものが含まれており、適切に区分することが困難であるため、一括して表示しております。

※2 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
投資有価証券(株式)	2,057百万円	1,302百万円
投資その他の資産 その他(出資金)	174百万円	394百万円

※3 担保に供している資産

新聞社等に対する営業保証金の代用として差し入れているものは、次のとおりであります

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
現金及び預金(定期預金)	57百万円	57百万円
投資有価証券	8百万円	11百万円

4 偶発債務

(1) 保証債務

次のとおり債務保証を行っております。

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
IMMG Pte.Ltd.	借入金／買掛金 104百万円	借入金／買掛金 55百万円
北京旭通广告有限公司	買掛金 42百万円	— —
北京華聞旭通国際广告有限公司	借入金 123百万円	借入金 195百万円
Dai-Ichi Kikaku (Malaysia) Sdn. Bhd.	— —	借入金 4百万円
Asatsu-DK Korea Ltd.	借入金 19百万円	— —
グループエム・ジャパン(株)	買掛金 174百万円	買掛金 176百万円
計	463百万円	431百万円

上記のうち、取引先であるグループエム・ジャパン(株)以外の保証債務については、非連結子会社または関連会社に対するものであります。

(2) 係争事件に係る損害賠償義務

前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
① 業務委託料等請求訴訟に対する反訴提起について 当社は、アートコーポレーション(株)より受託した業務に係る代金および立替えた金員の支払請求につき、その代金および金員の支払いについて、平成22年1月8日に業務委託料等請求訴訟(請求額379百万円およびそれに対する遅延損害金)(本訴)を提起いたしました。 これに対し、アートコーポレーション(株)から、平成22年4月22日に反訴(請求額311百万円およびそれに対する遅延損害金)が提起され、現在係争中であります。 当社は、以上の主張が反訴提起であることを踏まえ、慎重かつ十分に分析、検討した結果、当社の業務委託料等請求が正当であり、アートコーポレーション(株)の反訴請求は理由のないものであると考えており、これについて当社顧問弁護士も同様の意見であります。今後は、当社顧問弁護士と協議のうえ、本訴請求および反訴請求に対して適切に対処していく所存であります。	① 業務委託料等請求訴訟に対する反訴提起について 当社は、アートコーポレーション(株)より受託した業務に係る代金および立替えた金員の支払請求につき、その代金および金員の支払いについて、平成22年1月8日に業務委託料等請求訴訟(請求額379百万円およびそれに対する遅延損害金)(本訴)を提起いたしました。 これに対し、アートコーポレーション(株)から、平成22年4月22日に不当利得返還請求反訴(請求額311百万円およびそれに対する遅延損害金)が提起されましたが、平成25年3月12日に東京地方裁判所より、アートコーポレーション(株)の反訴請求を棄却し、当社の請求を一部認容してアートコーポレーション(株)が当社に62百万円およびその遅延損害金を支払うことを命じる判決が出されました。当社はこれを不服とし、平成25年3月25日に東京高等裁判所に控訴しました。 なお、アートコーポレーション(株)が、上記判決に対して、判決書の送達を受けた日から2週間以内に控訴する可能性があります。 当社におきましては、当社顧問弁護士と協議のうえ、当該訴訟に対して適切に対処していく所存であります。

※5 連結会計年度末日は金融機関の休業日でありましたが、当該期日の満期手形の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理しております。その金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
受取手形	542百万円	539百万円
支払手形	929百万円	822百万円

※6 このうち、従業員持株E S O P信託に係る借入金残高は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
1年内返済予定の長期借入金	164百万円	164百万円
長期借入金	410百万円	246百万円

(連結損益計算書関係)

※1 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
売上原価	488百万円	493百万円

※2 販売費及び一般管理費に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
	1,103百万円	1,039百万円

※3 固定資産売却益の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
車両運搬具	0百万円	6百万円
工具、器具及び備品	4百万円	0百万円
土地	10百万円	—

※4 固定資産売却損の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
建物	—	7百万円
車両運搬具	—	1百万円
工具、器具及び備品	0百万円	0百万円
土地	—	11百万円
その他	—	0百万円

※5 固定資産除却損の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
建物	3百万円	11百万円
車両運搬具	0百万円	0百万円
工具、器具及び備品	8百万円	2百万円
ソフトウェア	2百万円	—
商標権	0百万円	—
その他	—	1百万円

※6 減損損失

以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

用途	種類	場所	件数
事業用資産	ソフトウェア	—	1件
遊休資産	建物および土地	岩手県盛岡市	2件

(1) 減損損失の認識に至った経緯

ソフトウェアは、当初想定していた収益が見込めなくなったため、減損損失を認識いたしました。

建物および土地は、市場価格が著しく下落したことにより、減損損失を認識いたしました。

(2) 減損損失の金額

建物	4百万円
土地	2百万円
ソフトウェア	248百万円

(3) 資産のグルーピングの方法

資産のグルーピングは、セグメントを基礎としております。ただし、賃貸資産および遊休資産については、個別の物件ごとにグルーピングの単位としております。

(4) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、使用価値と正味売却価額のいずれか高い額とし、遊休資産については正味売却価額を使用しております。正味売却価額は、不動産鑑定評価、取引事例比較方式その他合理的な方法によって算定しております。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

用途	種類	場所	件数
事業用資産	ソフトウェア	—	1件

(1) 減損損失の認識に至った経緯

ソフトウェアは、当初想定していた収益が見込めなくなったため、減損損失を認識いたしました。

(2) 減損損失の金額

ソフトウェア	69百万円
--------	-------

(3) 資産のグルーピングの方法

資産のグルーピングは、セグメントを基礎としております。ただし、賃貸資産および遊休資産については、個別の物件ごとにグルーピングの単位としております。

(4) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、使用価値と正味売却価額のいずれか高い額とし、遊休資産については正味売却価額を使用しております。正味売却価額は、不動産鑑定評価、取引事例比較方式その他合理的な方法によって算定しております。

※7 減損処理にともなうものであります。

※8 主に特別転進支援措置により退職者に支給した退職加算金であります。

(連結包括利益計算書関係)

当連結会計年度(自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

その他有価証券評価差額金

当期発生額	14,719百万円
組替調整額	△29百万円
税効果調整前	14,689百万円
税効果額	△5,197百万円
その他有価証券評価差額金	9,492百万円

繰延ヘッジ損益

当期発生額	124百万円
税効果調整前	124百万円
税効果額	△49百万円
繰延ヘッジ損益	74百万円

為替換算調整勘定

当期発生額	1,188百万円
為替換算調整勘定	1,188百万円

その他の包括利益合計	10,755百万円
------------	-----------

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	45,155,400	—	—	45,155,400

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	2,990,104	1,153	49,659	2,941,598

(注) 当連結会計年度末の自己株式の株数には、従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式367,900株を含めて記載しております。

(変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取りによる増加 1,153株

減少数の内訳は、次のとおりであります。

従業員持株E S O P信託口の株式売却による減少 49,500株

単元未満株式の売渡しによる減少 159株

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成23年2月10日 取締役会	普通株式	421	10.00	平成22年12月31日	平成23年3月14日
平成23年8月10日 取締役会	普通株式	421	10.00	平成23年6月30日	平成23年9月12日
平成23年10月13日 取締役会	普通株式	3,756	89.00	平成23年10月31日	平成23年12月26日

(注) 1 平成23年2月10日取締役会決議の配当金の総額には、従業員持株E S O P信託口に対する配当金4百万円を含めておりません。

2 平成23年8月10日取締役会決議の配当金の総額には、従業員持株E S O P信託口に対する配当金3百万円を含めておりません。

3 平成23年10月13日取締役会決議の配当金の総額には、従業員持株E S O P信託口に対する配当金33百万円を含めておりません。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成24年2月22日 取締役会	普通株式	利益剰余金	422	10.00	平成23年12月31日	平成24年3月21日

(注) 配当金の総額には、従業員持株E S O P信託口に対する配当金3百万円を含めておりません。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	45,155,400	—	2,500,000	42,655,400

(変動事由の概要)

減少数の内訳は、次のとおりであります。

取締役会決議に基づく消却による減少 2,500,000株

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	2,941,598	1,987	2,563,036	380,549

(注) 当連結会計年度末の自己株式については、従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式304,900株を含めて記載しております。

(変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取りによる増加 1,987株

減少数の内訳は、次のとおりであります。

取締役会決議に基づく消却による減少 2,500,000株

従業員持株E S O P信託口の株式売却による減少 63,000株

単元未満株式の売渡しによる減少 36株

3 新株予約権等に関する事項

会社名	内訳	目的となる株式の種類	目的となる株式の数(株)				当連結会計年度末残高(百万円)
			当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末	
提出会社	平成24年ストック・オプションとしての新株予約権	—	—	—	—	—	5
合計			—	—	—	—	5

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成24年2月22日 取締役会	普通株式	422	10.00	平成23年12月31日	平成24年3月21日
平成24年8月10日 取締役会	普通株式	422	10.00	平成24年6月30日	平成24年9月10日

- (注) 1 平成24年2月22日取締役会決議の配当金の総額には、従業員持株E S O P信託口に対する配当金3百万円を含めておりません。
- 2 平成24年8月10日取締役会決議の配当金の総額には、従業員持株E S O P信託口に対する配当金3百万円を含めておりません。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成25年2月12日 取締役会	普通株式	利益剰余金	4,269	101.00	平成24年12月31日	平成25年3月18日

(注) 配当金の総額には、従業員持株E S O P信託口に対する配当金30百万円を含めておりません。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
現金及び預金勘定	22,641百万円	24,489百万円
有価証券勘定	6,334百万円	6,471百万円
小計	28,975百万円	30,961百万円
預入期間が3ヵ月を超える定期預金	△2,416百万円	△3,696百万円
MMF等に該当しない有価証券	△40百万円	—百万円
現金及び現金同等物	26,519百万円	27,264百万円

※2 減価償却費には、コンピュータ費で計上しているソフトウェア償却費等の他科目計上額を含んでおります。

(リース取引関係)

リース取引開始日が平成20年12月31日以前の所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産 その他(工具、器具及び備品)	384	322	61
ソフトウェア	45	39	6
合計	430	361	68

(単位：百万円)

	当連結会計年度 (平成24年12月31日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
有形固定資産 その他(工具、器具及び備品)	206	190	16
ソフトウェア	15	13	1
合計	221	203	18

(2) 未経過リース料期末残高相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
1 年内	53	21
1 年超	21	0
合計	75	21

(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年 1 月 1 日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年 1 月 1 日 至 平成24年12月31日)
支払リース料	126	54
減価償却費相当額	111	50
支払利息相当額	2	1

(4) 減価償却費相当額及び利息相当額の算定方法

減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

利息相当額の算定方法

リース料総額とリース物件の取得価額相当額の差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。

(5) 減損損失について

リース資産に配分された減損損失はありませんので、項目等の記載は省略しております。

1 ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

主として、工具、器具及び備品並びに車両運搬具であります。

無形固定資産

主として、ソフトウェアであります。

(2) リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
1 年内	618	699
1 年超	2,552	2,410
合計	3,170	3,110

（金融商品関係）

1 金融商品の状況に関する事項

（1）金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については安全性、流動性を重視した金融資産で運用しております。資金調達は銀行借入で調達しております。デリバティブ取引は、為替変動によるリスクを回避する目的で為替予約取引を利用し、投機的な取引は行わない方針であります。また、資金運用の一環として、複合金融商品（デリバティブ取引が組み込まれている債券）を購入しております。

（2）金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。

有価証券および投資有価証券は、業務・資本提携契約を締結している株式のほか、広告主との取引関係の維持・強化を目的に保有しているものであり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形および買掛金は、短期間で決済されるものであります。

借入金の使途は、運転資金（主として短期）と、当社が導入した従業員持株E S O P信託制度の当社株式取得資金であります。これらの大半は変動金利であるため、金利の変動リスクに晒されております。

外貨建債権および債務は、為替の変動リスクに晒されておりますが、原則として先物為替予約を利用してヘッジしております。

デリバティブ取引は、外貨建債権債務に係る為替の変動リスクに対するヘッジを目的とした先物為替予約取引を利用しております。また、一部の国内連結子会社において複合金融商品が組み込まれている債券を購入しており、債券の元本が毀損するリスクを有しております。

なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載されている「重要なヘッジ会計の方法」を参照ください。

（3）金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、営業債権について、経理規程に従い各営業部門と経理部門の協働により、新規取引先等の審査、取引先毎の与信限度額の設定、取引先毎の債権残高の期日管理の徹底、主要な取引先の財務状況のモニタリングなどにより、滞留債権の発生防止を図っております。

また、連結子会社においても与信管理、債権管理を行っており、一定の重要な事象について当社への報告を必要とする管理体制をとっております。

② 市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社グループは、外貨建ての債権債務に係る為替の変動リスクに対して、外貨建取引の需要の範囲内に限定して、為替予約取引を利用しております。

借入金について、金利変動リスクに晒されておりますが、借入元本が僅少であるため、そのリスクは限定的であると判断しております。

有価証券および投資有価証券については、定期的に時価や取引先企業の財務状況等を把握し、取引先企業との関係を勘案して保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引は、社内規程に基づく範囲内で、種類および取引金額を決定し、決裁権限者の承認を経た後、経理部門にて実行、管理を行っております。当該運用状況および結果は、適切に定期的な社内報告を行っております。

③ 資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、各部署からの報告に基づき資金管理部門が適宜に資金繰り計画を作成・更新し、収支の状況に応じた手元流動性を確保することなどにより、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません（（注2）を参照ください。）。

前連結会計年度（平成23年12月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表 計上額（※1）	時価（※1）	差額
(1) 現金及び預金	22,641	22,641	—
(2) 受取手形及び売掛金	88,955	88,951	△4
(3) 有価証券および投資有価証券 （※2）	44,774	44,774	—
(4) 支払手形及び買掛金	(71,382)	(71,382)	—
(5) 短期借入金	(94)	(94)	—
(6) 長期借入金	(756)	(758)	△2
(7) デリバティブ取引（※3）	51	51	—

当連結会計年度（平成24年12月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表 計上額（※1）	時価（※1）	差額
(1) 現金及び預金	24,489	24,489	—
(2) 受取手形及び売掛金	84,128	84,128	—
(3) 有価証券および投資有価証券 （※2）	58,833	58,833	—
(4) 支払手形及び買掛金	(67,130)	(67,130)	—
(5) 短期借入金	(59)	(59)	—
(6) 長期借入金	(492)	(492)	△0

（※1）負債に計上されているものについては、（ ）で示しております。

（※2）組込デリバティブを区分して測定できない複合金融商品は、複合金融商品全体を時価評価し、投資有価証券に含めて記載しております。

（※3）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

(1) 現金及び預金、ならびに(2) 受取手形及び売掛金

これらのうち、短期間（1年以内）で決済されるものは、時価が帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。また、受取手形及び売掛金のうち、当連結会計年度末から決済日までの期間が1年を超えるものについては、原則として債権ごとに債権額を決済日までの期間および信用リスクを加味した利率により割り引いた現在価値によっております。

(3) 有価証券および投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格、債券については金融機関から提示された価格、投資信託は公表されている基準価格によっております。

(4) 支払手形及び買掛金ならびに(5) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価が帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(6) 長期借入金

長期借入金のうち、変動金利のものについては短期間で市場金利に基づいて利率を見直ししており、借入れを行っている当社の信用状況は借入実行後に大きく異なっていないため、時価は帳簿価額に近似していると考えられることから、当該帳簿価額によっております。また、金利が固定されているものについては、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に適用される合理的に見積もられる利率で割り引いて算定する方法によっております。なお、これらの長期借入金の元利金には「1年内返済予定の長期借入金」を含んでおります。

(7) デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記を参照ください。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	平成23年12月31日	平成24年12月31日
非上場株式	1,411	1,374
非上場の関係会社株式	2,057	1,302
その他	224	273

上記については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3) 有価証券および投資有価証券」には含めておりません。

(注3) 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成23年12月31日）

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	22,641	—	—	—
受取手形及び売掛金	88,845	109	—	—
有価証券および投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの				
その他	4	116	1,232	40
合計	111,491	226	1,232	40

当連結会計年度（平成24年12月31日）

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	24,489	—	—	—
受取手形及び売掛金	84,128	—	—	—
有価証券および投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの				
その他	—	33	1,179	62
合計	108,630	33	1,179	62

(注4) 長期借入金（1年内返済予定の長期借入金を含む）の返済予定額
連結附属明細表「借入金等明細表」をご参照ください。

(有価証券関係)

前連結会計年度

1 その他有価証券（平成23年12月31日）

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの			
株式	34,205	27,195	7,010
債券	401	400	1
その他	33	24	8
小計	34,641	27,620	7,020
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの			
株式	2,847	3,392	△544
債券	991	1,060	△69
その他	160	172	△12
小計	3,999	4,626	△626
合計	38,640	32,246	6,394

(注) 「連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」の「債券」には、組込デリバティブを区分して測定できない複合金融商品が含まれております。当該複合金融商品は、全体を時価評価し、評価差額を当連結会計年度の損益に計上しております。

なお、当該複合金融商品の取得原価は、評価損益計上後の価額によっております。

2 当連結会計年度中に売却したその他有価証券（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

区分	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	707	598	78
債券	559	9	1
その他	26	—	—
合計	1,293	607	80

3 減損処理を行ったその他有価証券（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

時価のあるその他有価証券について、次のとおり減損処理を行っております。

株式 430百万円

なお、減損処理にあたっては、時価が取得原価に比べ50%程度以上下落しているものについては、合理的な反証が無い限り、時価が取得原価まで回復する見込みの無い著しい下落とみなし、減損処理を行っております。また、50%程度以下下落であっても、30%以上下落しているものについては、その下落状況が継続しているものについて、財政状態や営業状況を個別に検討し、時価が取得価額まで回復する可能性が乏しいと判断された場合は、減損処理することとしております。

当連結会計年度

1 その他有価証券（平成24年12月31日）

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を 超えるもの			
株式	49,208	27,809	21,399
債券	704	700	4
その他	11	3	8
小計	49,925	28,512	21,412
連結貸借対照表計上額が取得原価を 超えないもの			
株式	1,958	2,362	△404
債券	570	596	△25
その他	174	174	—
小計	2,703	3,133	△429
合計	52,629	31,646	20,982

(注) 「連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」の「債券」には、組込デリバティブを区分して測定できない複合金融商品が含まれております。当該複合金融商品は、全体を時価評価し、評価差額を当連結会計年度の損益に計上しております。

なお、当該複合金融商品の取得原価は、評価損益計上後の価額によっております。

2 当連結会計年度中に売却したその他有価証券（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

区分	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	1,039	140	79
債券	—	—	—
その他	106	18	11
合計	1,145	158	90

3 減損処理を行ったその他有価証券（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

時価のあるその他有価証券について、次のとおり減損処理を行っております。

株式 1百万円

なお、減損処理にあたっては、時価が取得原価に比べ50%程度以上下落しているものについては、合理的な反証が無い限り、時価が取得原価まで回復する見込みの無い著しい下落とみなし、減損処理を行っております。また、50%程度以下下落であっても、30%以上下落しているものについては、その下落状況が継続しているものについて、財政状態や営業状況を個別に検討し、時価が取得価額まで回復する可能性が乏しいと判断された場合は、減損処理することとしております。

(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度（平成23年12月31日）

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等 のうち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の 取引	為替予約取引 買建 米ドル	70	—	51	△19
	合計	70	—	51	△19

(注) 時価の算定方法

為替予約取引 … 取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

(2) 複合金融商品関連

組込デリバティブを区分して測定できない複合金融商品については、全体を時価評価し、「注記事項（有価証券関係）」に含めて記載しております。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

ヘッジ会計 の方法	デリバティブ 取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等 のうち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
原則的 処理方法	為替予約取引 買建 米ドル	買掛金	1,171	272	1,041
	小計		1,171	272	1,041
為替予約の 振当処理	為替予約取引 買建 米ドル	買掛金	25	—	(注) 2
	ユーロ	買掛金	16	—	(注) 2
	英ポンド	買掛金	4	—	(注) 2
	小計		46	—	—
	合計		1,217	272	—

(注) 1 原則的処理方法の時価の算定方法

為替予約取引 … 取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

2 為替予約の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建金銭債権債務と一体として処理されているため、その時価は、当該外貨建債権債務の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度（平成24年12月31日）

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

該当事項はありません。

(2) 複合金融商品関連

組込デリバティブを区分して測定できない複合金融商品については、全体を時価評価し、「注記事項（有価証券関係）」に含めて記載しております。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
原則的 処理方法	為替予約取引				
	買建 米ドル	買掛金	300	—	297
	小計		300	—	297
為替予約の 振当処理	為替予約取引				
	買建 米ドル	買掛金	2	—	(注) 2
	小計		2	—	—
合計			303	—	—

(注) 1 原則的処理方法の時価の算定方法

為替予約取引 … 取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

2 為替予約の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建金銭債権債務と一体として処理されているため、その時価は、当該外貨建債権債務の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社および一部の連結子会社が現従業員を対象に採用している退職給付制度は、個社ごとの差はありますが、確定拠出年金制度と確定給付型制度であり、確定給付型制度の中には、厚生年金基金制度、キャッシュ・バランス・プランおよび退職一時金制度があります。

2 退職給付債務に関する事項

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
退職給付債務	△11,050	△11,864
年金資産	7,625	8,704
未積立退職給付債務	△3,424	△3,160
未認識数理計算上の差異	2,046	1,885
差引	△1,377	△1,275
退職給付引当金	△1,377	△1,275

3 退職給付費用に関する事項

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
勤務費用	843	852
利息費用	192	199
期待運用収益	△109	△114
数理計算上の差異の費用処理額	257	289
期中支払退職年金掛金等(※)	942	907
退職給付費用	2,126	2,135

(※) 期中支払退職年金掛金等は、確定拠出年金制度の拠出額と総合型である日本広告業厚生年金基金への拠出額を含んでおります。

なお、当該基金の積立状況に関する事項および制度全体に占める当社グループの掛金拠出割合、当社グループの掛金拠出割合を基準として按分した給付債務額および年金資産額は、次のとおりであります。

① 当該基金の積立状況に関する事項

(単位：百万円)

	平成23年3月31日	平成24年3月31日
給付債務額	△88,314	△90,787
年金資産額	71,037	70,319
差引額	△17,277	△20,468

給付債務の予定利率は、おおむね5.5%です。

② 制度全体に占める当社グループの掛金拠出割合

	自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日	自 平成23年4月1日 至 平成24年3月31日
事業主分	10.39%	10.99%
従業員分	6.09%	6.49%
計	16.48%	17.48%

③ 当社グループの掛金拠出割合を基準として按分した給付債務額および年金資産額

(単位：百万円)

	平成23年3月31日		平成24年3月31日	
	事業主分	従業員分	事業主分	従業員分
給付債務額	△9,178	△5,372	△9,976	△5,893
年金資産額	7,382	4,321	7,727	4,564
差引額	△1,795	△1,051	△2,249	△1,328

④ 補足説明

上記①の差引額の内訳は、年金財政計算上の過去勤務債務残高（平成23年3月31日7,161百万円、平成24年3月31日6,637百万円）および繰越不足金（平成23年3月31日10,115百万円、平成24年3月31日13,830百万円）であります。

なお、本制度における過去勤務債務の償却方法は、期間20年の均等償却であり、当社グループは平成22年4月1日から平成23年3月31日までの期間において、特別掛金116百万円、平成23年4月1日から平成24年3月31日までの期間において、特別掛金114百万円をそれぞれ費用処理しております。

4 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

(1) 退職給付見込額の期間配分方法

期間定額基準

(2) 割引率

前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
2.0%	1.3%

(3) 期待運用収益率

前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
1.5%	1.5%

(4) 過去勤務債務の額の処理年数

発生時に全額費用処理

(5) 数理計算上の差異の処理年数

13年（発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定年数による按分額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理する方法）

(ストック・オプション等関係)

1 スtockオプションにかかる費用計上額及び科目名

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
販売費及び一般管理費の 株式報酬費用	—	5百万円

2 スtockオプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtockオプションの内容

会社名	提出会社
決議年月日	平成24年5月11日
付与対象者の区分及び人数	当社取締役（社外取締役を除く。）9名
株式の種類及び付与数	普通株式 50,000株
付与日	平成24年5月30日
権利確定条件	(注)
対象勤務期間	平成24年5月30日 ～ 平成27年5月30日
権利行使期間	平成27年5月31日 ～ 平成34年5月30日

(注) 新株予約権の行使の条件

- ① 新株予約権者は、権利行使時において、当社の取締役の地位にあることを要する。ただし、任期満了による退任その他正当な理由がある場合はこの限りではない。
- ② 新株予約権者が行使できる新株予約権の数は、新株予約権の割当日以後権利行使期間開始日までの株主総利回り（権利行使期間開始日の属する月の直前3か月の各日（取引が成立しない日を除く。）の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値から、新株予約権の割当日の属する月の直前3か月の各日（取引が成立しない日を除く。）の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値を控除し、新株予約権の割当日以後権利行使期間開始日までの間における当社普通株式1株当たりの配当金の総額を加算した金額を、新株予約権の割当日の属する月の直前3か月の各日（取引が成立しない日を除く。）の株式会社東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値で除して算定した値）の結果に応じて、割当を受けた新株予約権の数の0%から100%の範囲で段階的に変動するものとする。

(2) ストックオプションの規模及び変動状況

当連結会計年度（平成24年12月期）において存在したストックオプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

① ストック・オプションの数

会社名	提出会社
決議年月日	平成24年 5 月11日
権利確定前（株）	
前連結会計年度末	—
付与	50,000
失効	—
権利確定	—
未確定残	50,000
権利確定後（株）	
前連結会計年度末	—
権利確定	—
権利行使	—
失効	—
未行使残	—

② 単価情報

会社名	提出会社
決議年月日	平成24年 5 月11日
権利行使価格	1 株当たり 1 円
行使時平均株価	—
付与時における公正な評価単価	1,218円

3 ストックオプションの公正な評価単価の見積方法

当連結会計年度において付与されたストック・オプションについての公正な評価単価の見積方法は以下の通りであります。

① 使用した評価技法

モンテカルロ・シミュレーション

② 主な基礎数値及び見積方法

株価変動性	(注) 1	26.7%
予想残存期間	(注) 2	3年
予想配当	(注) 3	20円/株
無リスク利子率	(注) 4	0.11%

(注) 1 過去3年間の株価実績に基づき算定しております。

2 権利確定までの期間を用いております。

3 配当政策の原則としている1株当たり年間配当額の下限を用いております。

4 予想残存期間に対応する期間に対応する国債の利回りであります。

4 ストックオプションの権利確定数の見積方法

権利確定条件等を考慮し、権利不確定による失効数を見積もっております。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
(繰延税金資産)		
貸倒引当金	594百万円	454百万円
賞与引当金	267百万円	56百万円
退職給付引当金	188百万円	250百万円
たな卸資産	57百万円	20百万円
投資有価証券 (関係会社株式を含む)	998百万円	1,086百万円
和解金	248百万円	—
繰越欠損金	215百万円	162百万円
その他有価証券評価差額金	144百万円	61百万円
海外子会社における 繰延税金資産 (注)	50百万円	69百万円
その他	1,240百万円	1,309百万円
繰延税金資産小計	4,005百万円	3,470百万円
評価性引当額	△1,906百万円	△1,806百万円
繰延税金資産合計	2,099百万円	1,664百万円
(繰延税金負債)		
その他有価証券評価差額金	△2,079百万円	△7,238百万円
海外子会社における 繰延税金負債 (注)	△41百万円	△37百万円
その他	△14百万円	△179百万円
繰延税金負債合計	△2,135百万円	△7,456百万円
繰延税金資産(負債)の純額	△36百万円	△5,791百万円

(注) 海外子会社における繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
(繰延税金資産)		
繰越欠損金	11百万円	8百万円
その他	58百万円	71百万円
繰延税金資産小計	70百万円	80百万円
評価性引当額	△20百万円	△10百万円
繰延税金資産合計	50百万円	69百万円
(繰延税金負債)		
減価償却	△40百万円	△27百万円
その他	△0百万円	△10百万円
繰延税金負債合計	△41百万円	△37百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
法定実効税率	40.69%	40.69%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	6.50%	8.15%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△2.98%	△8.61%
住民税均等割等	0.61%	0.85%
関係会社株式売却損益の連結修正	8.71%	—
繰越欠損金による差異	—	△3.35%
法定実効税率の変更による差異	1.66%	0.75%
海外子会社における適用税率の差異	△4.58%	△8.73%
評価性引当額による差異	2.11%	△0.16%
その他	1.44%	1.49%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	54.18%	31.08%

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定および業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、広告を中心としたコミュニケーションに関連するサービスを提供する事業を行っており、事業の種類別に「広告業」および「その他の事業」の計2つを報告セグメントとしております。

「広告業」は、雑誌、新聞、テレビ、ラジオ、デジタルメディア、OOHメディアを媒体とする広告業務の企画と取扱い、広告表現およびコンテンツの企画と制作、セールスプロモーション、マーケティング、パブリックリレーションズ等のサービス活動など、広告に関する一切の業務を行っております。また、「その他の事業」は、雑誌・書籍の出版・販売等を行っております。

2 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」および「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項の変更」における記載と概ね同一であります。

また、報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

なお、セグメント間の内部売上高および振替高は、実勢価格に基づいたものであります。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額 (注) 2
	広告業	その他の事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	340,082	7,029	347,111	—	347,111
セグメント間の内部売上高 又は振替高	0	60	60	△60	—
計	340,083	7,089	347,172	△60	347,111
セグメント利益又は損失(△)	3,859	△8	3,851	1	3,852
セグメント資産	175,552	8,790	184,343	△155	184,188
その他の項目					
減価償却費 (注) 3	934	41	975	—	975
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	1,926	19	1,945	—	1,945

(注) 1 調整額の内容は、以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益又は損失の調整額は、セグメント間取引の消去および未実現利益の控除によるものであります。
- (2) セグメント資産の調整額は、セグメント間取引の消去によるものであります。
- 2 セグメント利益又は損失は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。
- 3 減価償却費には、コンピュータ費で計上しているソフトウェア償却費等の他科目計上額を含んでおります。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額 (注) 2
	広告業	その他の事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	344,135	6,686	350,822	—	350,822
セグメント間の内部売上高 又は振替高	2	3	5	△5	—
計	344,138	6,690	350,828	△5	350,822
セグメント利益又は損失(△)	3,587	△425	3,161	13	3,175
セグメント資産	186,854	8,492	195,346	△183	195,163
その他の項目					
減価償却費 (注) 3	1,297	43	1,341	—	1,341
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	898	58	957	—	957

(注) 1 調整額の内容は、以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益又は損失の調整額は、セグメント間取引の消去および未実現利益の控除によるものであります。
- (2) セグメント資産の調整額は、セグメント間取引の消去によるものであります。
- 2 セグメント利益又は損失は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。
- 3 減価償却費には、コンピュータ費で計上しているソフトウェア償却費等の他科目計上額を含んでおります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が、連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	海外	合計
3,611	699	4,311

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める顧客が存在しないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が、連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	海外	合計
3,594	702	4,296

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める顧客が存在しないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

（単位：百万円）

	広告業	その他の事業	全社・消去	合計
減損損失	255	—	—	255

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

（単位：百万円）

	広告業	その他の事業	全社・消去	合計
減損損失	69	—	—	69

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

金額的重要性が低いため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
1株当たり純資産額	2,270円23銭	2,567円03銭
1株当たり当期純利益金額	54円37銭	65円83銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	—	65円81銭

- (注) 1 前連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。
- 2 1株当たり当期純利益金額および潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
1株当たり当期純利益金額		
当期純利益(百万円)	2,293	2,781
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る当期純利益(百万円)	2,293	2,781
普通株式の期中平均株式数(株)	42,187,505	42,250,172
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
普通株式増加数(株)	—	15,125
(うち新株予約権)(株)	(一)	(15,125)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に含まれなかった潜在株式の概要	—	

なお、当社は従業員持株E S O P信託制度を導入しており、当該信託にかかる従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式については、連結財務諸表において自己株式として計上しております。そのため、1株当たり当期純利益金額および潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「普通株式の期中平均株式数」を算定しております。

- 3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (平成23年12月31日)	当連結会計年度 (平成24年12月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	96,800	109,559
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	965	1,038
(うち新株予約権)(百万円)	(一)	(5)
(うち少数株主持分)(百万円)	(965)	(1,032)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	95,834	108,521
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(株)	42,213,802	42,274,851

なお、当社は従業員持株E S O P信託制度を導入しており、当該信託にかかる従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式については、連結財務諸表において自己株式として計上しております。そのため、1株当たり純資産額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「期末の普通株式の数」を算定しております。

(重要な後発事象)

当社は、平成25年2月12日開催の取締役会において、会社法第459条第1項及び当社定款の規定に基づき、自己株式取得に係る事項について決議いたしました。

1. 自己株式の取得を行う理由

資本効率の向上を図るとともに、株主還元を推進するために自己株式の買い受けを行うものがあります。

2. 取得に係る事項の内容

(1) 取得対象株式の種類

普通株式

(2) 取得し得る株式の総数

500,000株(上限)

(発行済株式総数(自己株式を除く)に対する割合 1.17%)

(3) 株式の取得価額の総額

1,250,000,000円(上限)

(4) 取得期間

平成25年2月18日から平成25年6月17日まで

(5) 取得の方法

信託方式による市場買付

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	94	59	1.79	—
1年以内に返済予定の長期借入金	272	246	1.92	—
1年以内に返済予定のリース債務	102	113	3.56	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	483	246	0.77	平成27年4月20日
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	273	192	2.06	平成26年1月4日～ 平成29年10月10日
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	1,226	858	—	—

(注) 1 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く）の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額の総額

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
リース債務	102	68	20	0
長期借入金	164	82	—	—

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首および当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首および当連結会計年度末における負債および純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	91,004	179,791	260,268	350,822
税金等調整前 四半期(当期)純利益金額 (百万円)	2,518	2,866	2,542	4,069
四半期(当期)純利益金額 (百万円)	1,458	1,774	1,847	2,781
1株当たり 四半期(当期)純利益金額 (円)	34.53	42.02	43.73	65.83

(会計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	第 4 四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	34.53	7.50	1.71	22.10

2 【財務諸表等】
 (1) 【財務諸表】
 ① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※3 9,266	※3 9,797
受取手形	※2, ※5 3,795	※2, ※5 3,685
売掛金	※2 73,682	※2 67,932
有価証券	6,085	6,119
たな卸資産	※1 3,813	※1 4,429
前渡金	894	1,000
前払費用	93	87
繰延税金資産	956	366
未収入金	157	693
その他	480	324
貸倒引当金	△191	△167
流動資産合計	99,036	94,268
固定資産		
有形固定資産		
建物	2,409	2,635
減価償却累計額	△1,365	△1,408
建物（純額）	1,043	1,226
車両運搬具	93	88
減価償却累計額	△73	△64
車両運搬具（純額）	20	23
工具、器具及び備品	1,035	1,042
減価償却累計額	△754	△799
工具、器具及び備品（純額）	280	243
土地	327	321
リース資産	519	530
減価償却累計額	△129	△230
リース資産（純額）	389	299
有形固定資産合計	2,061	2,114
無形固定資産		
借地権	1	1
ソフトウェア	2,219	2,088
リース資産	2	1
その他	76	76
無形固定資産合計	2,300	2,169

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	※3 13,812	※3 14,165
関係会社株式	33,743	46,288
出資金	120	119
関係会社出資金	837	1,043
従業員に対する長期貸付金	190	103
関係会社長期貸付金	100	95
破産更生債権等	697	722
長期前払費用	30	13
差入保証金	3,778	4,361
その他	2,612	2,058
貸倒引当金	△1,451	△1,194
投資その他の資産合計	54,471	67,778
固定資産合計	58,832	72,062
資産合計	157,869	166,330
負債の部		
流動負債		
支払手形	※2, ※5 10,907	※2, ※5 8,861
買掛金	※2 54,106	※2 50,880
1年内返済予定の長期借入金	※6 164	※6 164
リース債務	81	83
未払金	2,543	2,046
未払法人税等	367	78
前受金	62	485
預り金	555	327
賞与引当金	504	—
その他	604	405
流動負債合計	69,898	63,332
固定負債		
長期借入金	※6 410	※6 246
リース債務	239	157
繰延税金負債	1,549	6,551
退職給付引当金	378	250
債務保証損失引当金	34	65
その他	935	1,026
固定負債合計	3,547	8,298
負債合計	73,445	71,630

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	37,581	37,581
資本剰余金		
資本準備金	7,839	7,839
その他資本剰余金	12,184	5,406
資本剰余金合計	20,023	13,245
利益剰余金		
利益準備金	1,555	1,555
その他利益剰余金		
配当準備積立金	1,100	1,100
別途積立金	25,219	25,219
繰越利益剰余金	2,739	3,431
利益剰余金合計	30,614	31,306
自己株式	△7,632	△746
株主資本合計	80,587	81,387
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	3,912	13,308
繰延ヘッジ損益	△76	△2
評価・換算差額等合計	3,835	13,306
新株予約権	—	5
純資産合計	84,423	94,699
負債純資産合計	157,869	166,330

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
売上高	301,878	303,422
売上原価	※1 268,721	※1 270,609
売上総利益	33,156	32,812
販売費及び一般管理費		
給料及び手当	15,790	16,099
賞与引当金繰入額	504	—
退職給付費用	1,741	1,797
法定福利費	1,788	1,777
旅費及び交通費	1,025	992
賃借料	2,422	2,394
貸倒引当金繰入額	—	335
減価償却費	240	335
交際費	586	551
コンピュータ費	1,509	1,744
その他	5,813	5,443
販売費及び一般管理費合計	※2 31,421	※2 31,470
営業利益	1,734	1,341
営業外収益		
受取利息	58	59
有価証券利息	12	13
受取配当金	※3 1,397	※3 1,559
生命保険配当金	37	68
その他	208	358
営業外収益合計	1,714	2,059
営業外費用		
支払利息	12	10
売上割引	0	0
貸倒引当金繰入額	—	45
不動産賃貸費用	18	14
投資事業組合運用損	14	1
保険解約損	10	24
その他	6	8
営業外費用合計	62	105
経常利益	3,387	3,296

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
特別利益		
投資有価証券売却益	607	139
関係会社株式売却益	2,331	9
貸倒引当金戻入額	9	61
その他	100	15
特別利益合計	3,049	226
特別損失		
固定資産売却損	※4 —	※4 7
固定資産除却損	※5 2	※5 13
減損損失	※6 255	※6 69
投資有価証券売却損	78	79
投資有価証券評価損	※7 904	※7 27
関係会社出資金評価損	115	173
貸倒引当金繰入額	12	7
特別退職金	※8 3	※8 811
和解金	537	—
その他	490	387
特別損失合計	2,400	1,575
税引前当期純利益	4,035	1,947
法人税、住民税及び事業税	382	37
法人税等調整額	1,350	366
法人税等合計	1,732	403
当期純利益	2,302	1,543

③【株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
株主資本		
資本金		
当期首残高	37,581	37,581
当期末残高	37,581	37,581
資本剰余金		
資本準備金		
当期首残高	7,839	7,839
当期末残高	7,839	7,839
その他資本剰余金		
当期首残高	12,184	12,184
当期変動額		
自己株式の処分	△0	△0
自己株式の消却	—	△6,777
当期変動額合計	△0	△6,777
当期末残高	12,184	5,406
資本剰余金合計		
当期首残高	20,024	20,023
当期変動額		
自己株式の処分	△0	△0
自己株式の消却	—	△6,777
当期変動額合計	△0	△6,777
当期末残高	20,023	13,245
利益剰余金		
利益準備金		
当期首残高	1,555	1,555
当期末残高	1,555	1,555
その他利益剰余金		
配当準備積立金		
当期首残高	1,100	1,100
当期末残高	1,100	1,100
別途積立金		
当期首残高	25,219	25,219
当期末残高	25,219	25,219
繰越利益剰余金		
当期首残高	5,078	2,739
当期変動額		
剰余金の配当	△4,641	△851
当期純利益	2,302	1,543
当期変動額合計	△2,338	691
当期末残高	2,739	3,431

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
利益剰余金合計		
当期首残高	32,953	30,614
当期変動額		
剰余金の配当	△4,641	△851
当期純利益	2,302	1,543
当期変動額合計	△2,338	691
当期末残高	30,614	31,306
自己株式		
当期首残高	△7,718	△7,632
当期変動額		
自己株式の取得	△2	△4
自己株式の処分	88	112
自己株式の消却	—	6,777
当期変動額合計	85	6,885
当期末残高	△7,632	△746
株主資本合計		
当期首残高	82,840	80,587
当期変動額		
剰余金の配当	△4,641	△851
当期純利益	2,302	1,543
自己株式の取得	△2	△4
自己株式の処分	88	112
自己株式の消却	—	—
当期変動額合計	△2,252	799
当期末残高	80,587	81,387
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金		
当期首残高	7,495	3,912
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△3,582	9,396
当期変動額合計	△3,582	9,396
当期末残高	3,912	13,308
繰延ヘッジ損益		
当期首残高	△94	△76
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	17	74
当期変動額合計	17	74
当期末残高	△76	△2
評価・換算差額等合計		
当期首残高	7,401	3,835
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△3,565	9,470
当期変動額合計	△3,565	9,470
当期末残高	3,835	13,306

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
新株予約権		
当期首残高	—	—
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	—	5
当期変動額合計	—	5
当期末残高	—	5
純資産合計		
当期首残高	90,241	84,423
当期変動額		
剰余金の配当	△4,641	△851
当期純利益	2,302	1,543
自己株式の取得	△2	△4
自己株式の処分	88	112
自己株式の消却	—	—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△3,565	9,476
当期変動額合計	△5,817	10,276
当期末残高	84,423	94,699

【継続企業の前提に関する事項】

該当事項はありません。

【重要な会計方針】

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

総平均法による原価法

(2) その他有価証券

時価のあるもの

決算末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定）

時価のないもの

総平均法による原価法

2 たな卸資産の評価基準及び評価方法

通常の販売目的で保有するたな卸資産

個別法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）

3 デリバティブ取引により生じる正味の債権(及び債務)の評価基準及び評価方法

時価法

4 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

建物(建物附属設備は除く)

i 平成10年3月31日以前に取得したもの……旧定率法

ii 平成10年4月1日以降に取得したもの……旧定額法

iii 平成19年4月1日以降に取得したもの……定額法

建物以外

i 平成19年3月31日以前に取得したもの……旧定率法

ii 平成19年4月1日以降に取得したもの……定率法

また、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 3～65年

工具、器具及び備品 3～20年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）……定額法

なお、ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（3～5年）に基づく定額法によっております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

……リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

なお、リース取引開始日が平成20年12月31日以前の所有権移転外ファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

5 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支出に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員の賞与の支出に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、期末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。

なお、数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（13年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしており、過去勤務債務は、発生時に全額費用処理しております。

(5) 債務保証損失引当金

保証債務の履行による損失に備えるため、被保証先の財政状態等を勘案して、損失負担見込額を計上しております。

6 収益の計上基準

(1) 広告取扱高

雑誌・新聞・デジタルメディアについては広告掲載日、OOH（アウト・オブ・ホーム）メディアについては広告掲出日、テレビ・ラジオについては放送日によっております。

(2) 制作売上高

広告物の納入日によっております。

7 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。ただし、外貨建金銭債権債務をヘッジ対象とする為替予約については、振当処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段……為替予約取引

ヘッジ対象……外貨建金銭債権債務、外貨建予定取引

(3) ヘッジ方針

外貨建金銭債権債務、外貨建予定取引に係る為替の変動リスクの軽減を目的として、為替予約取引を行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

当社が利用している為替予約取引は、リスク管理方針に従い実需により実行しており、原則として為替予約の締結時にヘッジ対象と同一通貨建による同一金額で同一期日の為替予約を振当てているため、その後の為替相場の変動による相関関係は完全に確保されているので、決算日における有効性の評価を省略しております。

8 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 消費税等の会計処理

消費税および地方消費税については、税抜方式によっております。

【会計方針の変更】

該当事項はありません。

【表示方法の変更】

(損益計算書関係)

- 1 前事業年度において、独立掲記していた販売費及び一般管理費の「役員退職慰労引当金繰入額」については、金額的重要性が低下したため、当事業年度より販売費及び一般管理費の「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、販売費及び一般管理費の「役員退職慰労引当金繰入額」として表示していた12百万円は、「その他」として組み替えております。

- 2 前事業年度において、特別損失の「その他」に含めていた「関係会社出資金評価損」については、特別損失の総額の100分の10を超えたため、当事業年度より独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、特別損失の「その他」に表示していた605百万円は、「関係会社出資金評価損」115百万円、「その他」490百万円として組み替えております。

【会計上の見積りの変更】

当事業年度において、平成26年夏頃に本社を移転することを決定いたしました。この決定により、本社の不動産賃借契約に伴う原状回復義務として計上していた資産除去債務について、より精緻な見積りが可能になったため、見積額の変更を行っております。

これにより、従来に比べて、当事業年度の営業利益、経常利益および税引前当期純利益は26百万円減少しております。

【追加情報】

当事業年度の期首以後に行われる会計上の変更及び誤謬の訂正より、「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準」（企業会計基準第24号 平成21年12月4日）および「会計上の変更及び誤謬の訂正に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第24号 平成21年12月4日）を適用しております。

【注記事項】

(貸借対照表関係)

※1 たな卸資産の内訳

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
制作支出金	3,810百万円	4,424百万円
貯蔵品	3百万円	4百万円
(注) 制作支出金は、制作工程の途中にあるもので、すでに役務提供等の終了した工程に係る外注先への支払額および支払いの確定した金額を集計したものであります。		

※2 関係会社に対する資産及び負債

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
受取手形及び売掛金	1,668百万円	2,314百万円
支払手形及び買掛金	2,808百万円	3,555百万円

※3 取引先に対する営業保証金の代用として差し入れているものは、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
現金及び預金(定期預金)	25百万円	25百万円
投資有価証券	8百万円	11百万円

4 偶発債務

(1) 保証債務

次のとおり債務保証を行っております。

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
㈱ADKインターナショナル	買掛金 196百万円	買掛金 275百万円
㈱ADKアーツ	買掛金 4百万円	買掛金 3百万円
ASATSU-DK SINGAPORE Pte.Ltd.	買掛金 41百万円	買掛金 40百万円
ASATSU-DK (Malaysia) Sdn. Bhd.	買掛金 11百万円	買掛金 11百万円
IMMG Pte.Ltd.	借入金／買掛金 104百万円	借入金／借入金 55百万円
ADK America Inc.	借入金 182百万円	借入金 82百万円
北京旭通广告有限公司	借入金 42百万円	— —
北京華聞旭通国際广告有限公司	借入金 123百万円	借入金 195百万円
Dai-Ichi Kikaku (Malaysia) Sdn. Bhd.	— —	借入金 4百万円
Asatsu-DK Korea Ltd.	借入金 19百万円	— —
グループエム・ジャパン(株)	買掛金 174百万円	買掛金 176百万円
計	900百万円	845百万円

上記のうち、取引先であるグループエム・ジャパン(株)以外の保証債務については、関係会社に対するものであります。

(2) 係争事件に係る損害賠償義務

前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
① 業務委託料等請求訴訟に対する反訴提起について 当社は、アートコーポレーション(株)より受託した業務に係る代金および立替えた金員の支払請求につき、その代金および金員の支払いについて、平成22年1月8日に業務委託料等請求訴訟(請求額379百万円およびそれに対する遅延損害金)(本訴)を提起いたしました。 これに対し、アートコーポレーション(株)から、平成22年4月22日に反訴(請求額311百万円およびそれに対する遅延損害金)が提起され、現在係争中であります。 当社は、以上の主張が反訴提起であることを踏まえ、慎重かつ十分に分析、検討した結果、当社の業務委託料等請求が正当であり、アートコーポレーション(株)の反訴請求は理由のないものであると考えており、これについて当社顧問弁護士も同様の意見であります。今後は、当社顧問弁護士と協議のうえ、本訴請求および反訴請求に対して適切に対処していく所存であります。	① 業務委託料等請求訴訟に対する反訴提起について 当社は、アートコーポレーション(株)より受託した業務に係る代金および立替えた金員の支払請求につき、その代金および金員の支払いについて、平成22年1月8日に業務委託料等請求訴訟(請求額379百万円およびそれに対する遅延損害金)(本訴)を提起いたしました。 これに対し、アートコーポレーション(株)から、平成22年4月22日に不当利得返還請求反訴(請求額311百万円およびそれに対する遅延損害金)が提起されましたが、平成25年3月12日に東京地方裁判所より、アートコーポレーション(株)の反訴請求を棄却し、当社の請求を一部認容してアートコーポレーション(株)が当社に62百万円およびその遅延損害金を支払うことを命じる判決が出されました。当社はこれを不服とし、平成25年3月25日に東京高等裁判所に控訴しました。 なお、アートコーポレーション(株)が、上記判決に対して、判決書の送達を受けた日から2週間以内に控訴する可能性があります。 当社におきましては、当社顧問弁護士と協議のうえ、当該訴訟に対して適切に対処していく所存であります。

※5 当事業年度末日は金融機関の休業日でありましたが、当該期日の満期手形の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理しております。その金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
受取手形	524百万円	536百万円
支払手形	905百万円	808百万円

※6 従業員持株E S O P信託に係る借入金残高であります。

(損益計算書関係)

※1 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
売上原価	141百万円	50百万円

※2 販売費及び一般管理費に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
	1,103百万円	1,039百万円

※3 受取配当金のうち関係会社からのものは、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
	1,043百万円	1,273百万円

※4 固定資産売却損の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
建物	—	4百万円
車両運搬具	—	0百万円
土地	—	2百万円

※5 固定資産除却損の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日)
建物	0百万円	11百万円
車両運搬具	0百万円	0百万円
工具、器具及び備品	1百万円	1百万円
ソフトウェア	0百万円	—

※6 減損損失

以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

前事業年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

用途	種類	場所	件数
事業用資産	ソフトウェア	—	1件
遊休資産	建物および土地	岩手県盛岡市	2件

(1) 減損損失の認識に至った経緯

ソフトウェアは、当初想定していた収益が見込めなくなったため、減損損失を認識いたしました。

建物および土地は、市場価格が著しく下落したことにより、減損損失を認識いたしました。

(2) 減損損失の金額

建物	4百万円
土地	2百万円
ソフトウェア	248百万円

(3) 資産のグルーピングの方法

資産のグルーピングは、広告業として一括しております。ただし、賃貸資産および遊休資産については、個別の物件ごとにグルーピングの単位としております。

(4) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、使用価値と正味売却価額のいずれか高い額とし、遊休資産については正味売却価額を使用しております。正味売却価額は、不動産鑑定評価、取引事例比較方式その他合理的な方法によって算定しております。

当事業年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

用途	種類	場所	件数
事業用資産	ソフトウェア	—	1件

(1) 減損損失の認識に至った経緯

ソフトウェアは、当初想定していた収益が見込めなくなったため、減損損失を認識いたしました。

(2) 減損損失の金額

ソフトウェア	69百万円
--------	-------

(3) 資産のグルーピングの方法

資産のグルーピングは、広告業として一括しております。ただし、賃貸資産および遊休資産については、個別の物件ごとにグルーピングの単位としております。

(4) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、使用価値と正味売却価額のいずれか高い額とし、遊休資産については正味売却価額を使用しております。正味売却価額は、不動産鑑定評価、取引事例比較方式その他合理的な方法によって算定しております。

※7 減損処理に伴うものであります。

※8 特別転身支援措置により退職者に支給した退職加算金であります。

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度（自 平成23年1月1日 至 平成23年12月31日）

1 自己株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	2,990,104	1,153	49,659	2,941,598

(注) 当事業年度末の自己株式の株数には、従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式367,900株を含めて記載しております。

(変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取りによる増加 1,153株

減少数の内訳は、次のとおりであります。

従業員持株E S O P信託口の株式売却による減少 49,500株

単元未満株式の売渡しによる減少 159株

当事業年度（自 平成24年1月1日 至 平成24年12月31日）

1 自己株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	2,941,598	1,987	2,563,036	380,549

(注) 当事業年度末の自己株式の株数には、従業員持株E S O P信託口が所有する当社株式304,900株を含めて記載しております。

(変動事由の概要)

増加数の内訳は、次のとおりであります。

単元未満株式の買取りによる増加 1,987株

減少数の内訳は、次のとおりであります。

取締役会決議に基づく消却による減少 2,500,000株

従業員持株E S O P信託口の株式売却による減少 63,000株

単元未満株式の売渡しによる減少 36株

(リース取引関係)

リース取引開始日が平成20年12月31日以前の所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年12月31日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
工具、器具及び備品	352	297	55
ソフトウェア	13	13	—
合計	366	311	55

(単位：百万円)

	当事業年度 (平成24年12月31日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
工具、器具及び備品	192	177	14
合計	192	177	14

(2) 未経過リース料期末残高相当額

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
1 年内	42	17
1 年超	18	0
合計	60	18

(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成23年 1 月 1 日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年 1 月 1 日 至 平成24年12月31日)
支払リース料	111	41
減価償却費相当額	97	38
支払利息相当額	2	1

(4) 減価償却費相当額及び利息相当額の算定方法

減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

利息相当額の算定方法

リース料総額とリース物件の取得価額相当額の差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。

(5) 減損損失について

リース資産に配分された減損損失はありませんので、項目等の記載は省略しております。

1 ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

主として、システム機器（工具、器具及び備品）であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
1 年内	48	48
1 年超	83	35
合計	131	83

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社及び関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
子会社株式	7,477	7,121
関連会社株式	937	393
計	8,415	7,515

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
(繰延税金資産)		
流動資産		
賞与引当金	230百万円	－百万円
制作支出金	217百万円	172百万円
和解金	248百万円	－百万円
その他	259百万円	193百万円
計	956百万円	366百万円
固定資産		
貸倒引当金	474百万円	421百万円
投資有価証券 (関係会社株式を含む)	967百万円	987百万円
資産除去債務	93百万円	285百万円
その他	514百万円	487百万円
繰延税金資産小計	2,050百万円	2,182百万円
評価性引当額	△1,644百万円	△1,468百万円
繰延税金負債との相殺	△405百万円	△713百万円
計	－百万円	－百万円
繰延税金資産合計	956百万円	366百万円
(繰延税金負債)		
固定負債		
その他有価証券評価差額金	△1,954百万円	△7,099百万円
その他	－百万円	△165百万円
繰延税金負債小計	△1,954百万円	△7,265百万円
繰延税金資産との相殺	405百万円	713百万円
計	△1,549百万円	△6,551百万円
繰延税金負債合計	△1,549百万円	△6,551百万円
繰延税金資産(負債)の純額	△592百万円	△6,185百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
法定実効税率	40.69%	40.69%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	6.33%	12.73%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△3.60%	△16.94%
住民税均等割等	0.67%	1.59%
関係会社出資金	－	△8.83%
繰越欠損金による差異	－	△4.35%
評価性引当額	△4.52%	△4.57%
税率変更による差異	1.14%	1.17%
その他	2.22%	△0.77%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	42.93%	20.73%

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(1 株当たり情報)

	前事業年度 (自 平成23年 1 月 1 日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年 1 月 1 日 至 平成24年12月31日)
1 株当たり純資産額	1, 999円90銭	2, 239円96銭
1 株当たり当期純利益金額	54円59銭	36円53銭
潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額	—	36円52銭

- (注) 1 前事業年度の潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。
- 2 1 株当たり当期純利益金額および潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 平成23年 1 月 1 日 至 平成23年12月31日)	当事業年度 (自 平成24年 1 月 1 日 至 平成24年12月31日)
1 株当たり当期純利益金額		
当期純利益(百万円)	2, 302	1, 543
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る当期純利益(百万円)	2, 302	1, 543
普通株式の期中平均株式数(株)	42, 187, 505	42, 250, 172
潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額		
普通株式増加数(株)	—	15, 125
(うち新株予約権)(株)	(一)	(15, 125)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額の算定に含まれなかった潜在株式の概要	—	

なお、当社は従業員持株 E S O P 信託制度を導入しており、当該信託にかかる従業員持株 E S O P 信託口が所有する当社株式については、連結財務諸表において自己株式として計上しております。そのため、1 株当たり当期純利益金額および潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益金額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「普通株式の期中平均株式数」を算定しております。

- 3 1 株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前事業年度 (平成23年12月31日)	当事業年度 (平成24年12月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	84, 423	94, 699
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	—	5
(うち新株予約権)(百万円)	(一)	(5)
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	84, 423	94, 694
1 株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数(株)	42, 213, 802	42, 274, 851

なお、当社は従業員持株 E S O P 信託制度を導入しており、当該信託にかかる従業員持株 E S O P 信託口が所有する当社株式については、財務諸表において自己株式として計上しております。そのため、1 株当たり純資産額の算定にあたっては、当該株式数を自己株式に含めて「期末の普通株式の数」を算定しております。

(重要な後発事象)

当社は、平成25年2月12日開催の取締役会において、会社法第459条第1項及び当社定款の規定に基づき、自己株式取得に係る事項について決議いたしました。

1. 自己株式の取得を行う理由

資本効率の向上を図るとともに、株主還元を推進するために自己株式の買い受けを行うものがあります。

2. 取得に係る事項の内容

(1) 取得対象株式の種類

普通株式

(2) 取得し得る株式の総数

500,000株(上限)

(発行済株式総数(自己株式を除く)に対する割合 1.17%)

(3) 株式の取得価額の総額

1,250,000,000円(上限)

(4) 取得期間

平成25年2月18日から平成25年6月17日まで

(5) 取得の方法

信託方式による市場買付

④ 【附属明細表】

【有価証券明細表】

【株式】

銘柄			株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)
投資 有価証券	その他 有価証券	アサヒグループホールディングス(株)	1,000,000	1,837
		松竹(株)	1,100,000	977
		(株)東京放送ホールディングス	982,900	888
		日清食品ホールディングス(株)	220,000	720
		(株)資生堂	435,556	530
		三菱商事(株)	310,000	510
		(株)歌舞伎座	100,000	485
		(株)ニコン	167,810	423
		(株)ヤクルト本社	109,900	414
		(株)不二家	2,000,000	388
		その他株式 (131銘柄)	7,291,478	5,733
計			13,717,644	12,909

(注) 端株株式数は、切り捨てて表示しております。

【債券】

銘柄			券面総額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)
投資 有価証券	その他 有価証券	BNP Paribas ユーロ円建CMS・フローター債	500	474
		その他公社債（2銘柄）	600	601
		小計	1,100	1,075
計			1,100	1,075

【その他】

種類及び銘柄			投資口数等(口)	貸借対照表計上額 (百万円)
有価証券	その他 有価証券	(証券投資信託受益証券) 大和証券投資信託委託(株) フリーファイナンシャルファンド 国際投信投資顧問(株) フリー・ファイナンシャル・ファンド 野村C R F (キャッシュ・リザーブ・ファンド) J Pモルガン円建てキャッシュ・ リクイディティ・ファンド その他証券投資信託受益証券 (3銘柄)	2,001,801,140	2,001
			2,001,290,764	2,001
			1,000,105,075	1,000
			500,537,465	500
			644,370,331	615
		証券投資信託受益証券計	6,148,104,775	6,119
		小計	6,148,104,775	6,119
投資 有価証券	その他 有価証券	(投資事業組合) S B I フェニックス1号投資事業有限責任組合 その他投資事業組合 (1銘柄) 投資事業組合計		
			2	98
			1	81
			3	180
小計			3	180
計			6,148,104,778	6,299

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は 償却累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	2,409	303	77	2,635	1,408	99	1,226
車両運搬具	93	16	21	88	64	11	23
工具、器具及び備品	1,035	84	77	1,042	799	121	243
土地	327	—	5	321	—	—	321
リース資産	519	10	—	530	230	101	299
有形固定資産計	4,384	415	181	4,618	2,504	333	2,114
無形固定資産							
借地権	1	—	—	1	—	—	1
ソフトウェア	3,222	590	248 (69)	3,564	1,476	652	2,088
リース資産	2	—	—	2	0	0	1
その他							
電話加入権	76	—	—	76	—	—	76
施設利用権	0	—	—	0	0	0	0
無形固定資産計	3,304	590	248 (69)	3,646	1,477	652	2,169
投資その他の資産							
長期前払費用	47	1	—	48	34	18	13
投資その他の資産計	47	1	—	48	34	18	13
繰延資産	—	—	—	—	—	—	—
繰延資産計	—	—	—	—	—	—	—

(注) 当期減少額のうち () 内は内書きで、固定資産の減損に係る会計基準に基づく減損損失であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	1,642	597	596	282	1,361
賞与引当金	504	—	504	—	—
債務保証損失引当金	34	65	—	34	65

(注) 1 貸倒引当金の当期減少額のうち目的使用以外の取崩によるものは、次のとおりであります。

貸倒実績率の見直しによる戻入額 38百万円

回収等による戻入額 224百万円

その他 19百万円

2 債務保証損失引当金の当期減少額(その他)欄の金額は、保証先の債務が消滅したことによる戻入額であります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

① 資産の部

イ 現金及び預金

区分	金額(百万円)
現金	2
預金	
当座預金	2,551
普通預金	6,446
定期預金	785
振替貯金	12
計	9,794
合計	9,797

ロ 受取手形

(a) 相手先別内訳

相手先	金額(百万円)
(株)コーセー	435
興和(株)	402
(株)バスクリン	311
積水ハウス(株)	195
久光エージェンシー(株)	194
その他	2,145
合計	3,685

(b) 期日別内訳

期日	金額(百万円)
平成25年1月	1,249
平成25年2月	1,029
平成25年3月	894
平成25年4月	301
平成25年5月	185
平成25年6月以降	24
合計	3,685

ハ 売掛金

(a) 相手先別内訳

相手先	金額(百万円)
ユニリーバ・ジャパン・カスタマーマーケティング(株)	4,030
(株)東芝	2,033
武田薬品工業(株)	1,747
アスクル(株)	1,540
シャープ(株)	1,403
その他	57,177
合計	67,932

(b) 売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 (百万円)	当期発生高 (百万円)	当期回収高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	回収率(%)	滞留期間(日)
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A) + (B)} \times 100$	$\frac{(A) + (D)}{2} - \frac{(B)}{366}$
73,682	317,925	323,675	67,932	82.7	81.5

(注) 消費税等の会計処理は税抜き方式を採用していますが、上記「当期発生高」には消費税等が含まれておりません。

ニ 制作支出金

区分	金額(百万円)
マーケティング・プロモーション	1,934
制作その他	2,490
合計	4,424

ホ 貯蔵品

区分	金額(百万円)
印紙等	4
合計	4

ヘ 関係会社株式

銘柄	株式数 (株)	取得価額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)
WPP plc	31,295,646	22,262	38,773
(株)協和企画	81,400	1,563	1,563
Asatsu Europe Holdong BV	22,287	1,272	1,272
(株)ADKインターナショナル	915,000	1,022	1,022
(株)日本文芸社	4,067,000	689	689
その他	19,550,487	3,123	2,966
合計	55,931,820	29,934	46,288

② 負債の部

イ 支払手形

(a) 相手先別内訳

相手先	金額(百万円)
(株)フジテレビジョン	2,906
讀賣テレビ放送(株)	1,096
関西テレビ放送(株)	620
(株)毎日放送	465
丸紅紙パルプ販売(株)	243
その他	3,529
合計	8,861

(b) 期日別内訳

期日	金額(百万円)
平成25年1月	2,737
平成25年2月	2,806
平成25年3月	2,456
平成25年4月	861
合計	8,861

ロ 買掛金

相手先	金額(百万円)
(株)テレビ朝日	3,517
(株)フジテレビジョン	1,802
(株)ADKアーツ	1,769
日本テレビ放送網(株)	1,416
(株)TBSテレビ	867
その他	41,506
合計	50,880

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日まで
定時株主総会	3月中
基準日	12月31日
剰余金の配当の基準日	6月30日および12月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り および売渡し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区大手町二丁目6番2号(日本ビル4階) 東京証券代行株式会社 本店
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区大手町二丁目6番2号 東京証券代行株式会社
取次所	—
買取・売渡手数料	当社の株式取扱規則に定める金額
公告掲載方法	電子公告(http://www.adk.jp)とする。 ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。
株主に対する特典	該当事項なし

(注) 当社は、株主の有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利
- (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第 7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

- | | | | | |
|-----|-------------------------------|---|-----------------------------------|----------------------------|
| (1) | 有価証券報告書
及びその添付書類
並びに確認書 | 事業年度
(第57期) | 自 平成23年 1 月 1 日
至 平成23年12月31日 | 平成24年 3 月30日
関東財務局長に提出。 |
| (2) | 内部統制報告書
及びその添付書類 | 事業年度
(第57期) | 自 平成23年 1 月 1 日
至 平成23年12月31日 | 平成24年 3 月30日
関東財務局長に提出。 |
| (3) | 四半期報告書
及び確認書 | 第58期第 1 四半期 | 自 平成24年 1 月 1 日
至 平成24年 3 月31日 | 平成24年 5 月15日
関東財務局長に提出。 |
| | | 第58期第 2 四半期 | 自 平成24年 4 月 1 日
至 平成24年 6 月30日 | 平成24年 8 月14日
関東財務局長に提出。 |
| | | 第58期第 3 四半期 | 自 平成24年 7 月 1 日
至 平成24年 9 月30日 | 平成24年11月13日
関東財務局長に提出。 |
| (4) | 臨時報告書 | 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第 2 項第 9 号の 2 (株主総会における議決権行使の結果) の規定に基づく臨時報告書を平成24年 4 月 2 日に関東財務局長に提出 | | |
| (5) | 自己株券買付状況
報告書 | 報告期間 | 自 平成25年 2 月18日
至 平成25年 2 月28日 | 平成25年 3 月15日
関東財務局長に提出。 |

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成25年 3 月28日

株式会社 アサツー ディ・ケイ
取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 坂 本 満 夫 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 林 一 樹 印
業務執行社員

＜財務諸表監査＞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社 アサツー ディ・ケイの平成24年1月1日から平成24年12月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社 アサツー ディ・ケイ及び連結子会社の平成24年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社 アサツー ディ・ケイの平成24年12月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社 アサツー ディ・ケイが平成24年12月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。
以 上

-
- ※ 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
- 2 連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成25年3月28日

株式会社 アサツー ディ・ケイ

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 坂 本 満 夫 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 林 一 樹 印
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社 アサツー ディ・ケイの平成24年1月1日から平成24年12月31日までの第58期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社 アサツー ディ・ケイの平成24年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2 財務諸表の範囲にはXBR Lデータ自体は含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成25年3月29日
【会社名】	株式会社アサツー ディ・ケイ
【英訳名】	ASATSU-DK INC.
【代表者の役職氏名】	取締役社長 植 野 伸 一
【最高財務責任者の役職氏名】	取締役執行役員 酒 井 吉 廣
【本店の所在の場所】	東京都中央区築地一丁目13番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

取締役社長植野伸一及び最高財務責任者酒井吉廣は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に準拠して、財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき一体となって機能することで、合理的な範囲でその目的を達成しようとするものです。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見できない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当連結会計年度の末日である平成24年12月31日を基準日として行い、その評価にあたっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して実施いたしました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行ったうえで、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析したうえで、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況の評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用関連会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社並びに連結子会社及び持分法適用関連会社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の連結売上高（連結会社間取引消去前）の金額を基準として、概ね連結売上高の2／3の割合に達する事業拠点を重要な事業拠点といたしました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として「売上高」「売掛金」「売上原価」「たな卸資産」「買掛金」に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。さらに選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の可能性が高く、見積りや予測をとまなう重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業または業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、平成24年12月31日現在の当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成25年3月29日
【会社名】	株式会社アサツー ディ・ケイ
【英訳名】	ASATSU-DK INC.
【代表者の役職氏名】	取締役社長 植 野 伸 一
【最高財務責任者の役職氏名】	取締役執行役員 酒 井 吉 廣
【本店の所在の場所】	東京都中央区築地一丁目13番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社取締役社長植野伸一および当社最高財務責任者酒井吉廣は、当社の第58期（自 平成24年 1 月 1 日 至 平成24年12月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

